

幼馴染の好感度が低すぎる件

足でされたい

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

高校2年生になった天谷純一は9年間片思いしている幼馴染の北原静に告白することを決意する。

だがいっぽうの静は純一に対しては酷く冷たく周りの人から見ただ純一と静の関係は飼犬と飼い主といったかんじだ。

この物語は飼犬と飼い主が周りの友達を巻き込みながらも成長していく物語です。

目次

始まり	1
家に帰ったら？	4
野球部のマネージャー	13
告白	16
静、覚醒	20
追求	23
大天使北原菜華	29
騒動	33
ゆかりさん？	36
亀裂	41
待ち伏せ	47
解決	53

告白	58
恋人同士になって	67
監視者菜華	72
紅白戦	76
1回	81
ヤキモチ？	90
試合終了	97
試合が終わって	105
小悪魔菜華	111
和解	117
過去編 純一	122
姉妹喧嘩？	128
HR前にて	136

五十嵐早苗の初恋	144
疑惑	162
学園の魔女	177
仲直り？	187
夜	192
菜華の思い	202
タカの不運な日	207
ゆかりさんの本気	215
薫ちゃんの秘密	219
ケースバツテイング	227
帰路にて	236
家に帰って	242
抽選会とデート前夜	248

デート当日	258
お家デート	264
幕開け	270
初回	275
投手交代	284
パーフェクトリリーフ	290
反撃開始！	297
ピッチャー返し	307
私の大切な人	312
一夜明けて	318
それぞれの思いと	327
お見舞い	335
再開	338

最終回

行ってらっしゃい！

—

344

始まり

「よっしゃ次！レフト一本で返せよ!!!」

「おす!!ラストお願いします!!」

外野にカキーンという金属音とともに打球が飛んでいく。

それを綺麗に取り外野からホームにノーバウンド返球がストライクで帰ってきた。

「ナイスボー！上がってよし！」

「あざした!!」

「ラスト一球!!声出してけ天谷!!!」

グラウンドに我が高の野球部監督の野村謙二監督の野太い声が響き渡る。夏の地区予選を間近に迎えているから監督、部員共に気合が違う。

「よっしゃあ！ラストお願いします!!!」

今声を出しているのはヘタレの天谷純一。私（北原静）とは小学生からの幼馴染でずっと野球をやっているのは知っているけど毎回補欠補欠で楽しいのかなって私は思う。百合山高校は神奈川県じゃ毎回優勝候補までは名前はあるのだがここ数年は準決勝まで行けていない、らしい。

「静！さつきからぼーっとしてどーしたの！休憩終わってるよ！」
「あーごめん！今戻る！」

私北原静はバスケ部のエースという扱いらしい。2年生なのにエースは先輩方にもあまりいい思いはされなれないと思っっているんだけどそうでもないらしい。要は勝てれば誰がエースだろうがキャプテンだろうがなんでもいいってことみたい。

~~~~~

「純！帰りコンビニよってこーぜ！」

「おう。たかのおごりでいいの？」

「ふざけんなって。お前が相川からエースナンバー奪い取ったらなんでも奢ってやるよ！」

「一生無理やんけそれ。奢る気ないやんけ……」

今話をしているのは幼馴染の小久保隆俊。小学生から同じ野球チームで野球をしてずっとバッテリーを組んできた。

「そんなことよりお前静ちゃんにはいつこくんだよ。もう9年も片思いなんだろ。」



「負けがわかつてる試合ほど面白くないものはないって。この話はやめよーぜ。それじゃあまた明日ね。」

「静ちゃんはもしかしたらお前のこと好きかもしんねーだろーじやあまた明日な。」

たかが言つてた通り僕は幼馴染の北原静の事が好きだ。きつかけは些細なことだった。小学生一年生の時僕はいじめられていた。その時いじめを助けてくれたのが静だった。それ以来静の事を見る度にドキドキしたり野球に集中出来なくなったりもした。でも静が僕をどんな風に見てるかと言ったら多分自分の犬だろう。口を開けばこれ買ってきてだとか暴言。でもそれは僕が少し嬉しかったりする。他の人には優しい静だけ僕に対してだけは素で接してくれてるんだなって思えばプラスに考えられる。それをたかに言ったらガチなDMになつてね。って言われました。ひどい。

家に帰ったら？

「ただいまー。」

家に帰っても誰からも返答がない。どこか出かけてるのかな。

「じゅんにいおかえり」

「え？なんで菜華ちゃんがおれんちにいるの？」

声の主は静の妹の菜華（なのは）ちゃん。菜華ちゃんも外見は黒髪ロングでかなり顔立ちは整っていて可愛い。菜華ちゃんのファンクラブも中学校にあるらしい。

「私のお父さんとお母さんとじゅんにいのお父さんとお母さんこれから1週間海外旅行に行くからこれから1週間私とおねえとひとつ屋根の下だよったね」

菜華ちゃんは俺が静のことを好きなのをわかってて毎回にやにやしなからそういう事を言ってきてくるからまあまあタチが悪い。でも可愛いから怒れないんだよね。

「俺何も聞いてないよーそれに静が俺なんかと1週間も一緒にいるの了承するわけない

と思うんだけど…」

「なによ菜華うるさいわね…」

「あ」

そこにはお風呂上がりでタオル一枚の幼馴染の姿があつて…少しだけ膨らんだ胸やらに張り付いて…てかお風呂上がりの静は新鮮で元から可愛いのについて何言つてんだろ俺…

「え、えつとごめん！ほんと見てないから！俺リビングいるね!!!」

「なのは！純一帰ってきてるなら一言かけてよね！おかげでめちゃくちゃ恥ずかしい思いましたじゃん!!」

あーほんと最悪。どうしよう最近少し太ってきたからあいつに太ったとか思われてないよね…リビング行ったらとりあえずお話し合い（物理）しよお話し合い。

「えー。普通にじゅんにいこのぐらいに帰ってくることでぐらい頭に入れてないおねえが悪いよ。別にいいじゃん減るもんじゃないし。」

「そういう問題じゃないってば！もういいわなのはも先行つてて着替えたら行くから。」  
おねえもいい加減素直になればいいのに……

「えっと、さつきはごめん。つてか静は両親が旅行行くつて知つてたの？」

「私も全然知らなかったわよ。母さんなのはにだけ言つて私には伝えてくれなかったみたい。そのなのはは何故か私には言わなかったのよねえ……」

なのはちゃんが何を企んでいるかなんて俺にでも想像がつく。とにかく楽しいことが大好きな彼女は俺と静がひとつ屋根の下で暮らしてるのを観察したかったからあえて静には言わず拒否権そのものを与えなかったんだろう。

「ごめんごめん忘れててさ☆(ゝω・)vキャピ」

「殴るよ」

「キャーじゅんにいたすけてー」

「もう……いい？純一は絶対に二階には来ないで。入ってきたら殺すから。」

殺意の籠った目で見られて俺はこの1週間絶対に上に行かないことを心の中で誓った。

「んで飯はどうする？面倒だから俺買ってこようか？」

「私を作るからいいわよ。」

「え？！静料理とかできるの？」

中学生の時1度だけ静の飯とよんでいいかわからないものを食べさせられた時お腹を壊したことがあるから正直怖いんだが……

「料理ぐらいできるわよ。もう高校生なんだからね？」

「じゃあお言葉に甘えてお願いします。」

「はいはい」

好きな人から手料理を作ってくれるなんてほんとに幸せなことなんだろうけどほん

とに過去のことがあるから不安だったんだけどそんな時なのはちゃんから一言

「おねえ中学の時盛大にやらかしたでしょ？その時からめちやくちや練習したから大丈夫だよ。誰かさんのためにね」

「まじか…あの静が俺のために…？嬉しすぎて泣きそうなんだけど」

「まあ実際はお母さんから結構本気で練習しなさい言われてたからなんだけどねえ笑」

「そんなことですよね知ってた。」

そんなこんなで料理が出来たらしく俺達はテーブルの前で待機していた。

出てきたのはカレーだった。見た目は普通に美味しそう。

「普通に美味そう…」

「なによその言い方。食べないなら私がそれ食べるけど。」

「たべる！たべる！いただきます！食べさせてください！」

「がつつきすぎて引くわ…気持ち悪…」

静のカレーはほんと美味しかった。ってか母親が作ったものの数倍美味しかったですほんとに。

「マジでおいしいよ。」

「そ。」

そってなんですかそって……でもこの距離感が俺は好きだから逆に嬉しかった。

「なににやけてんのよ気持ち悪い。」

「いやいやにやにやなんてしてないよ。」

「よかったね！おねえ！じゆんにい美味しいって！」

「そんなやつに言われてもなんとも思わないわ。」

「まあたそーやつて嬉しいくせに。」

「菜華うるさい。」

「はい。」

「じゃあ片付けは俺やつとくから時間ももう遅いし寝たら？」

「そーね。そーさせてもらうわ。寝顔覗きに來たら殺すから」

「命かけてまでお前の寝顔なんてみたかねーよ」

すんごいみたいけどね…

「わたし久々にじゅんにいと寝たいからおねえ！人で二階で寝ていいよ」

「は？！」

「何言ってるの菜華ちゃんもう中学生の子と同じ布団で寝れるわけないでしょ？」

「そーよ菜華そのロリコンに襲われても知らないわよ」

「別にじゅんにいになら襲われてもいいよ？」

にやにやした顔で菜華ちゃんは上目遣いで見てくる。やめてくれ普通に可愛いから心臓にも悪いし下半身が熱くなる。

「そういう冗談はだめよ菜華ちゃん笑」

「はーい」

多分菜華ちゃんはこの1週間の間に静と俺をなんとかくつつけたいんだと思う。でも肝心の静があれじゃとうに無理なことはわかってるはず…でも手料理作ってくれたりしたからワンチャンあるのかな…そんなことを考えていたらもう時刻は深夜の二時をまわっていた。



「はあ静のこと考えていたら全然寝れなかった…」

だつてひとつ屋根の下に好きな人がいるなんて考えたら寝れるわけないでしょ！

「じゅんにいき起きてる？」

「あー起きてるよ朝飯はパンがキッチンにあると思うから食べてね」

「わかつたー。おねえも起きてるし早く準備してリビングきてねー」

「はいはい」

あれ？なんとテーブルにはパンではなくてご飯と味噌汁と焼き魚などが置いてある。純一家は両親が共働きで忙しいため滅多に手間のかかることをしない。

「これ？静が作ったの？」

「そ。家に泊めさせて貰ってるんだからこのぐらいするわよ。早く食べちゃつて。後一緒に家出て登校してるとこ他の人なんかに見られたら変な勘違いされるからあんたは時間置いてきなさいよね。」

「あー…そーだねわかつた。」

勘違いでもいいから静と付き合つてるとか思われてーよ…毎回犬だとか下僕だとか言われねーんだもん。

「なに残念そうな顔してんの気持ち悪い。」

「いやいやそんな顔してないって」

どうやら表情に出てたらしい。つてか静は俺が好きだつてことわかってないのかな。結構アプローチ的なのはかけてるはずなんだけど…

「おねえはにぶいからわかんないよじゅんにい」

「人の心を読まないで」

「はーい」

朝飯を各自たべ終わったあと静となのはちゃんが先に出て俺は少し遅れて学校に向かった。

## 野球部のマネージャー

家を出た俺は学校に向かっていた。

「おはよたか」

「おーおはよ」

俺は毎朝友達のとかと学校に行っている。なんだかんだでもう9年間朝一緒に学校に行つてると思うと長いよね

「そろそろ大会に向けた練習増えるからきちいなあ。まだ疲れ取れてねーよ俺。なんで2時間もショールバン受ける練習させられなきやいけねーんだよ膝死ぬわ」

「俺なんて昨日2時間の走り込みにその後ポール間、それでノックだぞ。足疲れてんのに遠いところ打ちやがってあいつ」

「おーい監督の悪口言ってる悪い子はだーれだ」

「すみません!!ってなんだゆかりさんか」

そこにいたのは百合山高校野球部のマネージャーの高町ゆかりさん。うちの学校では知らない人はいないぐらいのアイドル。ゆかりさん目当てで入部してくる部員も後

を絶えなくて我が部では入部テストの制度が出来たきっかけでもある。

「なんだとはなによー。監督に天谷君が走り込みしたいってぼやいてましたよって言おうかな」

「マジでやめてください死んじやいます」

ゆかりさんの発言は監督の発言と同じぐらいのものなのでほんとにやめてほしい

「じゃあ今日の昼休みちよつと私に付き合つてよ、それでゆるしてあげる」

「そんなことでしたら全然構いませんよ」

「ゆかりさん！俺も行きます！行かせてください！」

「小久保君はテストで赤点取つてやばいの知ってるんだよー。勉強してなさい」

「うー…純一お前ゆかりさんと二人つきりとかずるいぞー！」

「ずるいも何もそういうのはないってお前もわかつてるやろ…」

「そろそろ行かないと遅刻するよ、じゃあ昼休みにブルペンにきてね」

「あ、ほんとだよべ。りよーかいです！」

なんでブルペンなんだろ。マウンドの整備でもするのかな？

昼休みの出来事を今後純一は一生忘れなくなるのをこの時はまだ知らなかったのだ

：

教室に着いたのはHR開始ギリギリだった。

「きたはらー。純一がゆかりさんに昼休みとられちゃうよーいいのー?」  
「え? 純一なんかあのゆかりさんが振り向くわけないでしょ。」

「おーい本人いるんですけど普通に傷つくんですけど。」

「ただマネージャーの仕事手伝うだけだつて。たかもいい加減しつこい」  
「わりい」

『ゆかりさんに限つてありえないとは思うけど一応見に行こうかな。純一は私だけの犬なんだから』

キーンコーンカーン。午前の授業終了のチャイム。さて待たせたら悪いしとつとつとやること終わらせて飯食べよ。

「純一ゆかりさんに迷惑かけんなよ!!」

「わかつてる!!!」

## 告白

ブルペンにつくともうゆかりさんはその場にいた。

「ゆかりさんすみませんお待たせしました。」

「ううん。私も今来たとこだし気にしないで」

そう微笑むゆかりさんはほんとに絵になって綺麗で見とれてしまいそうになる。

「早速なんですけど用件はなんですか？見たところブルペンもマウンドも荒れてないみたいなんです。」

「野球とは全く関係ないよ天谷君。私があなたに話があるの」

「お話ですか？練習メニューとかの相談ですかね」

「前から思ってたけど天谷君鈍いよね…笑」

まあ本題だけど天谷君バスケ部の北原さんのこと好きでしょ？」

「え、ええ！なんでわかるんです？1年の教室とかこないですよ先輩」

俺が静のことを好きって知ってるのは幼馴染の隆俊ぐらいで他の人にはそんなこと

言われたこともなかった。

「だって君…毎回グラウンドから帰る時同じ子ばかり見てるんだもん。そりや少し考えればわかるよ。それで私が話したいことっていうのはね…」

「はい。」

「私は天谷君の事が好きなの。私と付き合ってくれませんか？」

その後の事はいまいち思い出せない。少し時間を下さい。って言った後午後の授業は完全にうわの空で教師が何を言っているかわからなかった。

「純！…ちよつとねえってば！」

「はい！すみません！」

「なんで敬語なの気持ち悪い。」

「なんだ静か…どうしたの？」

「あんたゆかりさんに呼ばれた後からずっとうわの空だけど何かあったの？もしかして部活中あんたの気持ち悪い目で視姦しててそれが気持ち悪いからやめて死ねとかでも言われたの？」

「女子が視姦とか言ってるじゃねーよ…そんなんじゃない。静には関係ないことだよ」

「何その言い方。なんかむかつく」

「ごめん。とにかく今はいっばいいいっばいなんだよ。俺は部活行くから」

静は自分でもわけがわからぬくらいイライラしていた。

なんなのあいつ。ゆかりって言ったけな。あの人は間違ひなく純一に好意を向けてた。鈍感なあいつじゃわからないだろうけど私にはわかってた。見たところ多分告白でもされたんだろう。なんでかな。別に純一のこと好きでもないのに付き合ったらと思おうと胸が張り裂けそうだった。これ以上考えると私も部活に支障出るし今度ちゃんとして純一の口からどーするのか聞こう。私らしくもないうじうじすんな！両手で頬をばしつと叩いて気を入れ直して部活に行く静だった。

ゆかり side

はあついに言っちゃったよわたい！

高校2年の春に天谷君の投球を見て1年生なのに凄く投手なんだとは思っていたけど気配りも出来て誰にでも優しいし気付いたら彼をずっと目でおつてしまっていた。好きだって確信したのは5月の合宿の時同じ1年生の相川君に強引に告白されて迫られた時に純一君がなにしてんだよお前！ゆかりさん嫌がつてんのわかんねーのかよ！つて庇つてくれた。私にはそれが本当の王子様に見えた。その後相川君は監督に敵



しく言いつけられてそれ以来私には目も合わせなくなつたけどね。とにかく私は天谷純一って人が好き。北原って子が好きなのはわかっているけど私にも取られたくないものはある。絶対に純一君は渡さないからね北原静。

「さあ部活行こ！もう好きなの隠す必要もないんだしガンガン行くから覚悟しててよ純一君！」

この発言が純一にとんでもない災厄をもたらすとはこの時は何も知らなかったゆかりであつた。

## 静、覚醒

「静！lonelyしよ！今日先生いないから自主練だつて！」

「あ、まじ！やったやりたい放題できるね」

話しているのは同じ2年生の八神 祐希。笑顔が可愛い黒髪のショートカット。多分バスケット部の中で私が一番仲良い子かな。

「そー！そーいえば3年の高町ゆかり先輩が純一君にこくつたらしいじゃん!!!」

「え？それほんとゆーき？」

ちよつと待つて。何かしらあるとは思つてたけど告白なの…でも純一本人が言うわけないしまさか噂広めたのはゆかりさん本人？

「ほんとらしいよ！バスケット部の先輩がゆかりさんに恋愛相談頼まれたんだつて！」  
「あいつのなにががいいんだか。ゆかりさんなら相手いくらでもいたでしょうに…」

やっぱり告白だった…あいつどーするのかな。あいつの好きな人とかなんて考えたことなかったけどゆかりさんなのかな。毎回話す時デレデレしてたし。ずっと笑顔だし。なんかむかついてきた。やめよあいつの事考えるの。結局きめるのはあいつなん

だしどうでもいいや。

「まあ純一君普通に顔もそれなりだし性格いいからもてるしね」

「みんな目が腐ってるのよ」

「またそういうこと言う。静はもつと自分に正直になった方がいいよ」

「余計なお世話、そろそろ始めましょ。時間がもつたじゃないわ。」

そういつて祐希を相手にlonerを始めた。最初は私が攻撃で祐希が守備だ。祐希も1年生の中でスタメンに選ばれている出場者。ちよつとでも気を抜いたら簡単に負けてしまう。

「どつからでもきなさいな」

「なめてると泣いても慰めてあげないよ」

「純一君取られて泣いてても慰めてあげないもんねこつちも」

「んな!？」

「ひつひー、隙をみせたねーしずかあ。純一君の名前出した瞬間動揺したのみえみえだよ」

「はぁありえない。祐希。私を怒らせたね。もう手加減してあげない。」

その時の静は本当にエースオブエースって感じだったらしい。その後20回ぐらいやって祐希はボールにすら触らなかつたらしい。攻撃でもシユートを1度も打てない

ぐらいいに完封負け。

「あんたさあ……それ試合でやりなさいよ。そんな動き試合ですら見たことないんだけど……私相手にこんな動きしてもしょうがないでしょ……」

「静ちゃんやるねー。それならマジで全国レベルよ。毎回純一君の名前使つて煽つたらいいんじゃない?」

「ですよねキャプテン!」

「キャプテンまで勘弁してください、別に純一が誰とくつつこうがどうでもいいんですけどに。」

バスケ部のキャプテン風見葉。同級生後輩からの人望がありみんなのまとめ役。恋愛沙汰の話が大好きでこの人に捕まると口をわるまで返してくれないとか。ちなみに本人は彼氏はいません。

「もお素直じゃないんだから」

祐希とキャプテンは純一君も可哀想になどと言ってるが無視しておこう。でも確かに今日の動きはキレてたな。あの動き覚えておこう。

半年後百合山の怪物と言われる北原静の1歩であった。

# 追求

## 決意と追求

練習が終わって帰り道純一は今日の告白のことで頭がいっぱいだった。

はあなんで俺なんかを……ゆかりさんは部内どころか学園のアイドルだ。そんな人野球部の2番手エースだよ。何がいいんだか。僕は北原静が好きだ。絶対にその気持ちが変わることはないしこれからもそのつもり。明日ちゃんと断ろう。ゆかりさんにいつまでも待たせるのも迷惑だし大会前に色恋沙汰を理由に調子を落として糞エース様にとやかく言われるのも嫌だしな。そうと決まればゆかりさんに一言R I N Eで連絡入れておくか。

『明日の昼休み今日の返事がしたのでまたブルペンに来てもらってもいいですか?』  
1分もたたないうちに既読がついて返信が来た。

『りよーかいーじゃあまた明日ね(\*?▽?\*\*)』

これでよしと。正直に言うんだ僕は北原静が好きなのでお付き合い出来ませんって。それで僕も大会が終わったら静に告白しよう。もう9年間も片思いなんで10年

間も思いを隠したまま幼馴染として付き合うのはやめにしよう。

「やるぞー!」

「夜に大きな独り言とかマジで気持ち悪いんですけどやめてもらえます?」

「…静さん?」

「はいなんですか害虫さん」

「見なかつたことにしてくださいお願いします。」

「まあいいわ。早く帰りましょう部活で疲れててお腹すいてるの」

「おう。」

静には絶対言えないがこうやって二人で一緒に帰れるだけでも凄い嬉しい。つくづく好きなんだなあとか思っちゃうんだよね。

「ただいまー」

「あ、じゅんにいやつとかえってきた!遅いよお。私お腹ペコペコだよ、つておねえも一緒じゃんになに二人ラブラブじゃーん」

にやにやしながら静に話しかける菜華ちゃん。なんだかんだ仲良い姉妹なのだ。

「うっさいたまたまそこで変なのがいいたからよ。菜華手伝って夕飯作るから。」

「じゃあおれも手伝うよ。」

「臭いから風呂はいつて。あんたスライディングとかして泥かぶってんのによくやろう

とするわ……」

「あ、すみません入ってきます……」

そう夏場のユニフォームとかソックスとかはマジで異臭を放つ。前女子に言われたっけかサッカー部の汗は綺麗な汗だけど野球部の汗は汚くて気持ち悪い。うん。マジで硬球顔面にぶち当てたろうかと思った。その不細工面もつと凹ましたる思ったよほんとに。

「お風呂私がわかशीたからー！」

「ありがとう」

中学生なのに気が利くなあ。菜華さん妹に下さい。

お風呂から上がるとご飯はもう出来ていた。今日は昨日の残りのカレーとポテトサラダ。

昨日に引き続きめちやくちや美味しそう。

「じゃあいただきます。」

「ちよつとまつた！菜華は食べていいよ。純一はダメ」

「へ？おねえいきなりどうしたの？」

「おいおい冷めちゃうやん。」

「純一さ、2年の高町ゆかりさんに告られたってほんと？今バスケット部でめちやくちや噂

になつてるよ」

「え!? 高町ゆかりさんつて菜華も知つてるよ! めちゃくちゃ美人さんで有名な人ですよ」

一番触れられなくなかつた話題を静に触れられてしまった。あーこいつも色恋沙汰になるとめんどくせえんだよなあ。中学の時も告られた時罵られながらひたすらどーすんの? とかお前みたいな害虫好きになるとかやばとか言われたよな…

「ああ…ほんとだよ。昼休みにおれいになかつたのはそれが理由」

「うわあじゆんにいすごいじゃん! どーすんの! どーすんの!」

「ちよつと菜華黙つてて。あんたがあゆかりさんに告られるとか考えられないんだけどなんか弱みでも握つて脅したんじゃないの?」

「おいおい俺をなんだと思つてんだこいつ…」

「俺はそんなクズじゃねーよ。俺だつてびっくりしてるんだから。」

「私ご飯食べ終わつたからお風呂入つてくるー。後で教えてねじゆんにい」

多分菜華ちゃんなりに気使つてくれたんだろう去り際にウインクして頑張つて思つてくれたんだろうなマジでいいこや…

「まあいいわ。で、返事はどーするの?」

「断るよ」



「え、ことわんの!? あんたみたいなのが雲の上の人と付き合えるチャンスなんだよ!」  
「あほか。俺は好きでもない人と付き合う気なんてないよ。ゆかりさんは人としては好きだけど恋愛対象には見てないよ」

俺から見たゆかりさんはお姉さんって感じ。いい人だなとは思うけど恋愛対象的に見たことはこれまでにいちどもなかった。

「はあ…もつたいな。ゆかりさんとキスとか出来るかもなんだよやれるかもなんだよ。私の友達にも女だけどゆかりさんとならやりたいって子もいるレベルなんだから。」

「どーなってんだよお前の友達…ってか女の子がやるとか言うなや」

まあ俺以外の相手に下ネタ言うことなんてほぼないから別にいいんだけど。ってかゆかりさんは女の子からもてるのかすげーな…

「まああんたが断るのはわかったわ。でもなんて断るの? 中途半端な断り方は相手傷付けるしゆかりさんレベルだと納得してくれないんじゃない?」

「好きな人がいるので付き合えませんかって言うよ。ってか告白される前に俺が好きな人いるってゆかりさんわかってたみたいだったけどね」

好きな人が目の前にいるんだよわかってくれ。ってかこれ以上この話を続けたくないんだが…

「あんた好きなやついるんだ」

「うん」

にやにやしなからこつちを見て話す静は到底自分のことだなんて思いはしてないんだらうな。

「誰よ。おじさんに教えてみなさいな」

「静。俺そろそろ飯食って寝たいんだよもう解放してくれ。」

「教えてくれたらご飯食べていいよ」

「こいつ人の気もしらないで…もういいや強硬手段使つてやる。」

「わかった。俺の好きな人は静。これでドーよ。」

「冗談でもやめてくんない？鳥肌たったわ。なんかしけたからいいよ食べて。私寝るね片付け宜しく。」

泣きたい。目が本気だった。今日食べたご飯は少ししよっぱかったよママ…

「じゅんにいき起きてる？」

天使降臨。まだ世の中捨てたもんじゃない。

「菜華ちゃん…もう俺無理だよ静となんて恋人同士になれるわけないよ…」

「ちよつとどうしちゃったのじゅんにいそんな泣きそうな顔して」

かくかくしかじかで…

## 大天使北原菜華

「ちよつとそんなに悲觀的にならなくても大丈夫だよじゅんにい」

「好きな人に告白まがいのことしてあれだよ？可能性なんてないよ…」

「もう自信もつてよ少しは」

そう言つて菜華ちゃんは俺の頭を撫でる。

なんだろ…どこかの有名な○ヤアさんも言つてたけどバブみを感じるつてこの事なのかな…

「ままあ無理だよ立ち直れない」

「ああ…おねえのせいでじゅんにいが壊れた…」

じゃあ教えてあげる。おねえ寝たから言うけどじゅんにいが好きな人おねえつて冗談っぽく言つただけだあの後部屋に帰つてきた時顔真っ赤にしてそのまま布団にくるまって寝ちやつたんだから。少なくとも嫌いな人に好きって言われて顔赤くするほどちよろくないと思うよ妹目線で見たらね」

「じゃあまだ俺可能性あるかな…?」

「全然あるよ! 私は大好きなじゅんにいと大好きなおねえがくつついてほしいの! だから諦めないでよね!」

ああほんとにいい子すぎて泣けてくる…

「ありがとう菜華ちゃん。俺大会終わったら告白するって決めてるんだ。その時ダメでも何度でもアタックして高校終わるまでにはあの毒舌がなくなってるぐらいにしてみせるよ。あ、でも毒吐く静好きだからそこはそのままでもいいかな」

「やつぱりどえむだよねじゅんにいって…じゃあ少なくとも大会でポコポコにされないでよね。おねえ説得して大会見に行くから!」

「おうよありがとね菜華ちゃん」

「いえいえー。じゃあおやすみじゅんにい」

「うん、おやすみ」

菜華ちゃんのおかげでなんとか立ち直れた純一であった。

~~~~~

あーあのバカいきなりなんてこと言うのよびつくりして逃げちゃったじゃない…？
てかあいつの策よねこれ…私を動揺させて話変えるための…でも誰なんだろあいつの
好きな人。同じクラスで仲良い所なら亜里沙ちゃんか愛実かな。

つてかなんでこんな動揺してんだろ私。純一が珍しく真面目な顔であんなこと言っ
たらかな…

あー考えれば考えるほどわかんない！やめよやめ！今日の部活のイメトレして早く
寝なきや！

「じゅんにいおきてー。おーいってばあ。」

あれ？気付いたらソファで寝てたのか俺…

「あーおはよ菜華ちゃん。今何時？」

「もう7:30だよ。おねえは朝練でとつくに家出たー。ご飯は律儀に作ってくれたみ
たいだよー。いいねー毎朝好きな人のご飯食べられて」

「あー普通にあいついいから言うけどマジで嬉しいよ」

「朝からごちそうさま。私もそろそろ行くねー。ちゃんとゆかりさんと話しなよ！」

「もち。行ってらっしゃい」

朝から好きな人の飯と天使と会話出来てマジで幸せだな俺。昼休み頑張らなきゃ。

騒動

それは学校について校門をくぐった瞬間だった。

「あ、あいつだよゆかりさんがこくったらしいって人！」

あーそーいえば噂になってるんだっけ……

「おい！なんでお前なんかゆかりさんに告られるんだよ！特に顔も良くないくせに
！」

本人目の前にして失礼極まりないなこいつら……それにお前らだってイケメンには程
遠いじゃねーかよ、

「自分にだってわかりませんよ。ってか邪魔なんすけど」

「んだと？先輩に向かってその口の利き方はねーだろ。」

胸ぐらを掴んで俺を持ち上げようとする先輩A。知ってる人はいるかもしれないが
野球部は暴力沙汰においてはめっちゃくちや厳しい。こちらから手を出さなくても関

わっていた理由だけで登録抹消なんてこともある。どうすれば…

「ちよつと何してんの！さつきから話聞いてれば理不尽なことばつかじやない！そのバカがあんたらを煽ってんならともかくただ質問されたことに返してただけで胸ぐら掴んで威圧することないんじゃないの」

なんで静がここに…？そこには幼馴染の俺でも見たことのないぐらい怒気を含んだ口調で仁王立ちしている北原静がいた。

「うるせーな関係ないやつはひっこんでろ！」

「関係ないやつ？一応あんたが釣り上げてんの私の友達なのよね。それに後ろ見てみなよ。」

「ああ!?後ろがなんだって？って…お前らずらかるぞ！真木田だ！」

真木田一徹。うちの学校の3年の学年主任。一応バスケット部の監督になってる。あまり体育館にいるところは見たことないが…

「真木田先生自分は何もしてません！野村監督に言うのだけはほんとにやめて下さい！大事な大会前なんですお願いします!!!」

多分静が呼んでくれたんだろうけど真木田先生次第ではこのことが監督に知れ渡って面倒なことになるかもしれない。俺はお願いすることしか出来なかった。

「なーにいつてんだ天谷。言うも何も俺は何もみてねーよ。ただ校門近くで人だからが

出来なくてうちの部員がランニング出来なくて困ってたから来ただけだよ。大会俺も楽しみにしてるし頑張れよ。」

「はい！ありがとうございます！」

助かった…真木田先生これから保健の授業で絶対寝ないっす。

「あんたも災難ね。」

そこには練習着姿の静がいた。

「ありがとう。静が呼んでくれたんだろ？」

「別に。実際私ら外周組があんたらのせいで道塞がれ通れなかったから朝練さぼった祐希を職員室側の出口で見つけたから罰で祐希に真木田先生呼ばせたのよ。」

「まあなんにせよ助かったよありがとうな」

「そ」

静のおかげで大事にならず今回のことは終わった。こんなことが続いたら最悪だけどな…流石ゆかりさんでも言うんだろうか…

ゆかりさん？

校門前での一悶着を終え純一は教室に向かっていた。

「純一！お前ギリギリで教室入った方がいいぞ！ゆかりさんのファンが机囲ってる」

あーやっぱりもう知れ渡ってるのか……

「心配してんだか楽しんでんだかどっちなのかねたかとしくん」

「いやあ心配してますしてます」

「そのニヤニヤした顔で言われてもなんも説得力ねーよ。ってかお前もゆかりさんのファンだろ？てつきり囲ってる人間と同じかと思ってたよ。」

「ばーか。何年友達やってると思ってたんだよ。そこまでおろかじゃねーよ。それに純一君は北原一本だしな。もちろん断るんだろ？付き合うとかいつたら一生お前のボール受けない」

「つきあわないよ。今日の昼休みしっかり断るつもり。たかお願いがある。」

「まあそーよな。ん？」

「なんとかして昼休み俺を一人にしてくれ。野次馬がついてきたら流石にきつい。」

「おいおい無茶言うなよ。他のクラスのやつもお前がどんなやつか見に来てんだぞ。」

「うう…まあとりあえずなんとかやってみるわ。」

「おう。健闘を祈る。」

キーンコーンコーンコーン。

朝のHR開始のチャイム。入りたくはないがいつまでもこうしているわけにもいかず純一は教室に入った。案の定男子の目付きが殺意に満ち溢れていたのは言うまでもない。それから1〜4時間目の間純一は授業終了と同時にトイレに逃げ込んでやりすごした…

便所籠城主人公ってなんなんでしょうかね…

そしてついに昼休み。俺はブルペンに向かった。告白を受けたのはじめてじゃないけれど失礼だけが相手が学園のアイドルゆかりさんでは緊張しないわけがなかった。

「純一君遅いよー！」

「すみません教室で少し絡まれちゃってて」

ゆかりさんはいつもの様子でブルペン横のベンチに座っていた。

「そんな事だろうと思ってたから大丈夫だよ」

「ありがとうございます。早速本題なんですが…」

「うん」

「ごめんなさい。他に好きな人がいるのでゆかりさんとはお付き合い出来ません。」

「そっか…そーだよね北原さんが好きって言うってたもんね。ごめんなさい困らせるようなことを言っ…」

「いえいえ、そんな困るとかはなくてむしろ嬉しかったです。こちらこそごめんなさい。」

「じゃあごめんなさいの代わりに私の言うことーっだけ聞いてもらえないかな？」

「自分出来ることでしたら」

「じゃあさ握手してくれないかな？これから友達として部活仲間として宜しくって！」

ゆかりさんほんとに人間出来るなあ。俺なら振られた後絶対こんな振る舞いできないや。

「じゃあ右手出して」

そう言われて俺は自然に右手を出した。

もにゆ。

え？

カシヤツ！

「純一君酷いよオ握手つて言つたのに胸触るなんて…」

「ちよつと待つてください！それはゆかりさんが勝手に！自分はそんな気まつたくなかつたんですよ」

「でもさ？私と純一君どつちのこと他の人は信じると思ふかな？それにこの写真が決定的証拠だよ？大会前にこんなの監督に見つかったら出場停止だよ」

「そ、それは…」

「純一君。もう一度言うね。あなたの事が好きです。私とお付き合いしてもらえませんか？」

「卑怯ですよそんなん！」

「ごめんね。私欲しいものはどんな手を使ってでも手に入れたいの。それで返事は？」

「宜しく願います…」

「ありがとう！大好きだよ！」

そう言つてゆかりさんは満面の笑みで俺に抱きついてきた。

「ごめんなさい。そろそろ教室戻らなきゃなんで」

「わかった！また連絡するね。」

何かが音を立てて崩れた。きっとゆかりさんはすぐクラスの友達に付き合えたことを報告して周りに流すだろう。きつちり断るって宣言した静や菜華ちゃん、それにタカを裏切ることになる…俺はどうしたらいいんだ…

「ちくしょう!!!!」

俺はマウンドで吠えた、

亀裂

静視点からのお話になります

「ねえ聞いた!? ついに3年のゆかりさんが彼氏出来たらしいよ!？」

「え、ほんとに!? 相手誰なんだろう! めっちゃ気になる!」

「それがうちのクラス为天谷君らしいの!」

「えーほんと!?! 天谷君教室戻ってきたら話聞かなきゃ!」

「は? 断るんじゃないのあいつ?」

静はイライラしていた。私が最初に聞いてやる。別にあいつが誰と付き合おうが私にはどうでもいい。でも断るって言った手前付き合うのはどうなのさ。早く帰ってこいゴミ虫。帰ってきたら即効で事情聴取してあげるからね。

しかし授業開始のチャイムがなつても純一は姿を見せることは無かった。

あーもうだめだ。何もする気が起きない。信頼してた人から裏切られるってこんな気持ちなんだな、それに俺がここまでメンタル弱いとは思わなかったよ、あーむり。

帰ろ。教室帰った瞬間どうなるかもわかってるし荷物もそのまま帰ってやる。

コンコンコン

「失礼します。野村先生はいらっしゃいますか？」

「どしたーあまやー。なんかようか？」

「すみません体調悪いので早退するので今日の部活休みます。大会前の大切な時期なのに自分の体調管理不足で申し訳ありません。」

「体調悪いならしゃーないな。自分でも理解してるようだし早く治して万全な状態で出てこいよ。」

「すみませんありがとうございます。」

嘘をついてごめんなさいと心の中で詫びて職員室を後にする。次は担任か、ああめんどくせえ。なんでこうなるんだよほんとに。

目当ての教師は教室の奥にいた。

「小林先生。」

「お、どーしたの天谷君？」

小林未来先生。俺達2―3のクラスの担任で年齢は若く容姿も童顔で生徒から人気がある。

「すみません体調悪いんで早退させてもらってもいいですか？」

「熱あるようには見えないけどなあ、もしかしてゆかりちゃん絡み？」

「いや違います。ほんとに頭痛が酷くて、」

出来るだけ動揺がないように答えたつもりではあった。しかし、

「やっぱりそーかー。先生の目をごまかそうとしないの。2年も担任やってんだからわかるに決まってるでしょ」

「ごめんなさい。でも本当に今日だけは勘弁してもらえませんか、」

「付き合えてルンルン希望で私にイヤミ報告しに来たのかと思つたのにねえ、まあいいわ、でもこれつきりだからね！何があつたかは聞かないけど本当に困つた時相談しに来なさい、それは約束してね」

「ありがとうございます、失礼します」

あの真面目な天谷君がねえ、高町ゆかりさん、ね。少し調べてみようかしら。

「ただいま、」

なんか1人つていうのがこんなに寂しいものだつてなつてるわ、

早く菜華ちゃん帰つてこないかな、

静は、帰ってきたら質問責めだろうな、どうしようほんと、もういいや寝よ。

そう言つてベッドに潜ると5分も立たず寝た純一だった。

「純一！どういうことが説明しなさいよ！扉開けなさい！」

「おねえやめなよ！じゅんにいにして話したくないことだつてあるかもしれないじゃん！」

「菜華はだまつてて別に誰かと付き合おうがどうでもいいの！でも私達だますことないじゃない！」

あー帰つてきてたのか、今何時だ？

げ、もう9時かよ、

取り敢えず話に行くか、

「なんでそんな事言うの！おねえのばか!!」

「菜華ちゃん」

「じゅんにい、」

菜華ちゃんは泣きそうな顔をしてた。多分この時間までずっと言い争いをしてたんだと思う。本当にごめんね、

「純一、出てきたつてことはそういうことだよね」

「うん、菜華ちゃんも来て、全部話すから」

俺は2人に今日あったことを全部話した。胸を触つてるのを写メられたこと。あの性格が偽りだったこと。仕方なく付き合うことになったこと。

「菜華ごめん、私が間違ってたみたい」

「ううん、私も強く言いすぎたよごめんねおねえ」

姉妹仲は戻ったみたいだった。よかった、俺のせいで2人が仲違いとかにでもなったら最悪だった。

「んで純一はどーすんの？あのゴミこのままにはしとかないんでしょ？」

「ゴミっていうなよ、取り敢えず大会終わるまでは何もしない。仮に大会前に行動起こして部に亀裂入るようなことあったらおしまいだからね、先輩達勝たせてあげたいんだよ」

「私は先輩だろうが先生だろうがゴミはゴミよ、まあ純一らしいね、わかった。私も大会終わるまでは普通にしとく、でもね？純一が怒ってる以上に私も菜華も怒ってるのはわかってね。今日は休みな、ごめんね起こして。おやすみ」

「え、あ、おやすみ静」

待って、あんな優しい静初めて見たかもしかかも最後の優しい言葉のおやすみすぎるだろ、録音して家宝にしたいレベル、やばい今の顔絶対見せられない100%ニヤニヤしてるよ俺、

「あああああなんだよ今の反則だろ!!」

布団にくるまってゴロゴロ転がる純一君。うん、気持ち悪いよ、

「じゅんにい私いること忘れてない、？」

「、、、見なかったことにしてもらえませんかね？」

「残念でしたー全部見ましたー、それと」

そうニツコリ笑う菜華ちゃん

「それと、、、？」

『あああああなんだよ今の反則だろ!!』

録画されていた、、気持ち悪くベッドをぐるぐるする高校生の姿がそこにあつた。

「マジで静には言わないで下さいお願いします」

「わかってるよお、でも私もビツクリだよおねえがあんな態度とるなんて」

「でしょ？好きな人からあんな態度取られたら無理よ無理」

「もうこれ以上喋らないで私が恥ずかしいから」

そう言つて頬を赤く染める菜華ちゃん。

「ごめんごめん、じゃあ夜も遅いから寝なよ、おやすみ」

「うん、おやすみ」

こうして北原姉妹に元気をもらった純一は少しだけ元気が出た。

待ち伏せ

「じゅんにい起きてーあさー」

「おーおはよ、今日は行くぞー」

このやりとり何回目ですかねごめんなさい、

「やる気出しているとこ悪いんだけど玄関覗いて見てよ、、、」

「玄関？」

ドアの穴から玄関を除くとまだ登校30分前だつていうのにゆかりさんがいた、、

「なんで、、 あーRINE!」

純一は昨日帰つてから携帯を全く見てないことを思い出した。

「なんだこれ、、」

「うーわ、流石に引くよ私でも、、間違つてもこんな女と付き合っちゃダメだよじゅん

に、、、」

携帯を開くと未読RINEの通知が430件。ヤンデレかよお前。そして1番新しい通知には家の前いるから早く来てね（ハート）

そもそもなんでゆかりさん俺の家なんて知ってるんだよ来たことも言ったこともないぞ、

「菜華ちゃん、静におれよりあとにでるように言ってもらってもいい？あの人のことから一時的にはいえ同棲してるなんて事がバレたら面倒なことになりかねないから」

「わかった、じゅんにいも何かあったらすぐ連絡ちよーだいよ」

「ほんと何考えてるのかわかんなくなってきたわね高町ゆかり、」

「ほんと変な女にひつかからなくてよかったよじゅんにい、」

「取り敢えずあいつが出てから15分後に出よう菜華、今日の朝練は諦めるわ、」

「ゆかりさんごめん！昨日体調悪くてRINEとか全然見てなくて、」

「あ、そーだったんだ！嫌われたのかと思ってゆかり心配したんだよ!!!」

ゆかりさん昨日あんな事しといて嫌われてないとも思ってたんのかよ、

「すみません今後はこんなことないようになりますので。」

「つてか敬語やめようよ！もう私達付き合ってるんだし！」

「流石に学校の時は敬語でお願いします、他の人に何言われるかわかりませんし、それ以外のとこでならタメでつていうのはどうですか？」

「別に私は他の人に何言われてもいいんだけどなあ、でも純一君がそれでいいならいい

よー！」

「ありがとうございます、じゃあ行きましようか」

「うん！」

それからゆかりさんは俺の耳元に顔を近付けると「誰にも言っていないよね？」と小声で言つて笑顔で言つたのだった。俺は苦笑いすることしかできなかった。

学校に着くと男子からは嫉妬と殺意の目を向けられた。それもそうだろう、学校全体にまで俺とゆかりさんが付き合つてゐることはバレてしまつてゐるしプラス一緒に登校だなんてしてみたらそれもなる。

「じゃあ私こっちだから行くね純一君」

「はい、ではまた部活で」

「何言つてんの？昼休み一緒にご飯食べるに決まつてるじゃん！ブルペン集合ね！」

「あー、はいわかりました、」

昼休みもあの人の顔見なきやいけないのか、昼休みはタカに話聞いて欲しかったんだけどね。

「純一ちよつと話があるから部室こいよ」

「わかつた」

タイムリーなおにタカからの誘いだった。丁度いい。今全部話してしまおう。

部室につくと、

「見損なつたぜ純一、別にな？ゆかりさんと付き合うことに反対とかしてるわけじゃない、でもな？なんで俺の前で断るなんて言つたんだよ、俺がゆかりさんの事好きだから気をつかつたつもりかよ、そんな気の使いならいらねーよ、それに静ちゃんはいいのかよ？なあ？正直おまえじゃ無かつたらぶん殴つてんぞ」

「待つてくれよタカ、断つたのはほんとなんだつて？でもゆかりさんが、」

俺はタカに昨日あつた出来事を全て話した。

その瞬間

「いってえな、なにすんだよ」

タカは話を聞いた瞬間俺の顔を殴つた。

「お前がそんな言い訳をするやつだとは思わなかつたよ、ゆかりさんがそんなことするわけねーだろ、もうお前の球も受けたくねーし顔も見たくねーよ一生俺に話しかけてくんな」

「おい！俺は嘘なんて言つてねーよ待てよ！」

制止の声を聞かずにタカは部室を出ていってしまった。

「くそがつ！！！！」

純一は部室のパイプ椅子を蹴飛ばした。

なんでこうなる？マジでわけわかんねーよ。なんだよ俺が一昨日ゆかりさんの呼び出しを断ればよかったのか？わからないわかららないわからない。

「純ー！いる！？」って、なにしてんのよあんた！やめなつて！大会あるんでしょ！利き腕で硬い壁殴つたら骨折れちゃうつて！あーもう！」

「しず、か？」

気が動転して壁を殴っていたらしい。両手が真っ赤に腫れ上がっていた。そして、それを静が俺を羽交い締めして止めたようだ。

「もうやめてー大丈夫だから！もうこんな純一見たくないのーやめてよー」

静は瞳に涙を溜めて言った。

何してんだ俺、、好きな人泣かせるまでなことして、、もうどうしようもねえな、、

「ごめん静、もう大丈夫、ほんとにごめん」

「何が悪いか言つて、じゃなきや離さない」

「自暴自棄になつて相談するつて言つた静とかに相談せずにこんなことになつたこと」

「説明不足だけどもまあいいわ、で、部屋で何があつたの？流星にあんたが何も理由もなく暴れないでしょ」

「うん、、」

静にタカとのやり取りを説明した。

「あのバカ、、あいつ周り見えなくなると人の話聞かないからなあ、私も交えてもう1度それは話に言つて説得する、いいわね？」

「うん、悔しいけど正直俺が何言おうがタカには聞いてもらえないと思うし」

「まあゆかりさんのこと大好きだからねえあいつ、取り敢えず授業始まつちやうから私先行くからね」

「うん、ありがとう静」

「はいはい」

また静に助けられちゃつたな、、そろそろ俺も何か恩返ししたいな。

「なんであんたがここに：：？」

「どうしたの静？」

「もお純一君誰にも言わない約束じゃなかったのお？」

そこには静に羽交い締めされていた時の写真がすっかり撮られていた携帯を見せながら立っている高町ゆかりがいた、、

解決

「純一君酷いよお。いきなり浮気だなんて」

「ずっと見てたんですね。恐らくですけどタカと話してた時から」

「なんのことかしら？ 私は部屋に忘れ物して取りに来たら今北原さんと純一君がいやらしいことしてるのが見えちゃったんだもん、私の告白受けといてそれはないよ」

ゆかりさんは目を赤くして言っていた。一見ガチ泣きに見えるがあれは紛れもなく演技だ。もう役者にでもなれよ、

「はー？ 高町さん今のどこがいやらしいんですかね？ 暴れてる純一抑えてただけじゃないですか？ 逆にそれすらもいやらしいとか考えるほどむっつりなんですかね先輩って、可愛いところあるじゃないですか」

おいおい、挑発すんなよ、

「んな!? 流石に先輩に向かつてあまり良くない言葉なんじゃない？」

「悪いんですけど私いくら歳上でも行動とかが歳上に見えない人敬えないので。写メ使つて脅して付き合う人を敬えと？」

「あーあもういいや、この写真今から野村先生と真木田先生にばらまくから、純一君残念

だったね大会は諦めた方がいいかもね」

大会に出れない、？待ってくれ、相川1人に投げさせて勝ち上がれるほど神奈川は甘くない。そんな事になったら先輩に合わせる顔がない。

「待ってください！ほんとに大会だけはでさしてくださいお願いします！先輩達にお世話になったのを返させてください！確かにうちには相川つてエースがいます。でも彼一人投げさせて勝ち上がれるほど甘くないのはゆかりさんもわかるでしょう!？」

そーだよ、ゆかりさんだつて今年で引退だ、出来ることなら長く部活やりたいはずだ。「部活？別に私はどうだつていいよ、あいつらが負けようが私は純一君さえいればいいから。あーそれと大事なこと言い忘れてたわ、北原さん、なんで純一君が私の告白1度断ったか理由ご存知で？」

断つた理由、それは静の事が好きだったから、つまり今ゆかりさんはそれをそのまま静に伝えようとしてる。こんな形で気持ちを知られたくない……！

「ゆかりさんこれ以上は！」

「純一君は黙ってて」

「知ってますよ。好きな人がいるから断つたつて言うのは本人の口から聞いてます」

「その好きな人についてよ名前？知りたくない？」

「ちよつとゆかりさんいい加減にしてくださいよ、俺だつて怒る時は怒りますよ」

やめてくれ、それだけは言わないでくれ。9年間の片思いがこんな形でバレたくな
い……

「実はそれってね、「はいそこまで！」

「「え？」」

「高町、ちよつとうちのクラスの生徒が様子おかしかつたんでこの間からずっと後を付
けさせてもらってたのよ。いやあ優等生で学校のアイドルにこんな一面があつたとは
ねえ、写真とやらの話詳しく聞かせてよ」

「小林先生、」

「みっちゃん!」

「小林先生?」

3人揃ってびつくりした。なんでここに小林先生がいるのかわけがわからなかつた。
「んで、高町、どう言い訳する?そろそろ天谷君を解放してもらつてもいいかな?今の会
話全部私聞いてるんだよ、写真ももちろん消して。これはお願いとかじゃないよ、命令。
わかるよね?」

「なんのことです?写真なんて知りませんけど」

「いい加減にしろやお前、あ?もう全部バレてんのがわかんねーのかよ、早く消せつてん
だよ高町!」

うわ、こええ、、、小林先生が怒つてるところ初めて見たけど下手したら真木田先生より怖いんじゃない、

「はあほんと最悪消しましたよこれで満足ですか」

「天谷君にわびの一言もないんか？」

「はいはいわかりましたよ」

「はいは一回だろうがよお!!」

小林先生が椅子を蹴り上げる

「えつと、ほんとにごめんなさい！部活の人には言わないで!!」

言つた後駆け足で部室から出ていったゆかりさん。相当メンタルきたかなあれわ、、

「みっちゃん怒ると人変わるんだね、、」

「ん？まあ昔私レディースの頭張つてた時あつたからさあ、それじゃ私は行くねー。二人とも遅れないようにね！あ、天谷君、静ちゃんに好きな人ぐらい教えてあげてもいいんじゃない？ほら？迷惑もかけたんだしさっ！それじゃあねえ」

「あ、本当にありがとうございしました!!」

手をひらひらと振つて帰る先生はマジでかつこよかった。つてか最後の一言絶対わかつて言つてたよな流石だわ、、

「そーだなあ折角だし」

「ん？どした静」

「じゃあ好きな人教えてよ！協力したしいいでしょ！」

小林先生どーしてくれんすかあ
!!!

告白

「ねーもつたいぶらずに教えてくれてもいいじゃん長い付き合いだし」

「こんなやりとりがもう5分は続いている。

俺も覚悟を決めるか、」

「わーっただよ言えばいいんだろ言えば聞いて後悔すんなよ」

「うんしないしない！」

なんで女子って恋バナとかにはすんげー反応するんだろな。

「えっと、ああそれで好きな人ってのは

キーンコーンカーンコーン

「あ」

朝のHR開始前の予鈴が鳴り響いた。

「純一が言うの遅いから始まつちやつたじゃん！じゃあ家帰ったら教えてね！どーせあんた今日部活ないんでしょ」

「あーわかった、それじゃ家でつてことで、」

逃げ場がねえ、、、こういう時タカに相談したいのにさっきのあとだしなあ、、、

教室に着くと男子からの視線が痛いほど純一に注がれた。

あー。露骨に睨むのやめろって、、それに付き合っていないんだし。

「はいはい、朝礼始めるわよ」

小林先生が教室に入ってくる。

「なーに天谷君そんな暗い顔して、もしかして3年の高町さんに振られたのまだシヨツクなの？」

は？振られたも何も付き合ってすらないのになんでこんなこと言うんだ。小林先生の方を見ると口の前に人差し指を置いて任せておいてと言った感じた。

「え!?天谷振られたの!?!小林先生それマジです!?!」

「それがねえ今日私が出勤してた時に丁度見ちゃってねえ、だから皆天谷君にそんな目してたら流石に可哀想だからやめてあげなさい」

「はーいー!」

小林先生マジでありがとうございます。心の中で感謝しかない純一だった。

「敵わないね小林先生にわ」

隣の静が耳打ちしてくる

「そーだね、もう頭が上がらない」

朝礼が終わるとタカが申し訳なきように俺の机の方に向かってくるのが見えた。

「あのさ純一」

「どーした？」

「俺、小林先生から全部聞いたんだ。ほんととれだけ謝つたら許してもらえるかわからないけどほんとにごめん！何かあればマジで何でも言ってくれ！」

「もういいって、大丈夫だから、顔上げろよタカ。それには何でもなんて言葉はそんなに軽々しく吐いちゃいけないんだぜ」

「すまん純一ほんとにごめんなさい。」

「だからいいって、その代わりに昼休みブルペン来てくれよ話がある」

「お、おうわかった」

「ええー!? 今日ゆかりさんと話したせいで好きな人の話になって小林先生が静に教えてあげればって煽つた結果教えなきや行けない流れになって今日の放課後告る!?! そりやまたいきなりだな、」

昼休み、俺は事の次第をタカに伝えた。

「もう逃げ場がないんだよマジで俺こういうの初めてだからどうしたらいいか、」

「どうしたらいいってお前覚悟決めて思つてること全部ぶつけちまえばいいんだよ。ダメだった時は、お願いだから部活やめないで下さい。」

「正直立ち直れる自信ないわ」

「ばーか顔が笑ってんだよじゃあ今日の夜にでも結果聞かせてな」

「はいよ。」

放課後。静は部活があるので早くは帰ってこない。それまでに文章やら決めなきやな、な、な、

「ただいまー」

「おかえりじゅんにい、聞いたよ！解決したんだってね！よかつたじゃん！」

「ありがとう菜華ちゃん、でもねまだこれから解決しなきゃいけない事が出来ちゃったんだよね、」

「ついにこの時が来たんだね、私めちやくちや楽しみ！」

「振られた時は菜華ちゃん彼女にしちやおうかな」

「すぐ乗り換える男の人は嫌いですよお、ご健闘をお祈りします」

「はいよ」

それから静が帰ってくるまでの時間はやけに長く感じられた。30秒に1回ぐらい時計を確認してわテレビを見たりして挙動不審にもほどがあるぐらいだった。

「ちよつとじゅんにいじたばたしすぎだつてそんなんじやおねえ見たらぶつ倒れるんじゃないの?」

「そんなこと言われても無理なものは無理だよ、9年間も片思いしてんだよそれで振られたらつて思つたら、」

「もー!女々しいんだつて!ほらおねえ帰つてきたみたいだよ後は頑張つて」

菜華ちゃんが言うように扉が開く音が聞こえた。

「はあ疲れた、純一、お風呂沸かしといてよ、めちやくちや汗かいちやつて」

「はいよ」

男がいるのにワイシャツ一枚でパタパタすんのやめてくれ目のやり場に困る。

「じゅんにい……」

菜華ちゃん違うんだつてこれは男だつたらしやーないんだよ、

「そーだ!菜華今日純一が好きな人教えてくれるんだつてえこいつロリコンだからあんたかもよ」

「エーヤメテヨーワタシコマルウ」

「あーあ純一振られたね」

「勝手に言つてろ」

「じゃあお風呂入つてくる」

「あの様子じゃまさか自分だとは思ってないだろうねおねえほんとにぶいんだから、」
「まあねえ、ガサツだし」

「つてかこの流れだと私も告白聞いちやうんだけどいいの？」

「別に菜華ちゃんには中学生の時ぐらいからバレてるんだし気にしないよ」

「まあそれもそうだね」

「あーもうつじゆんにいの緊張が私にも移っちゃったじゃん」

「ごめんごめん」

菜華ちゃんとの会話のおかげで少し緊張がほぐれた気がした。

「はあさっぱりしたー」

お風呂から静が帰ってきた、ジャージにTシャツ1枚だけなのに可愛いつて反則だわ

マジ。

「さあて、純一君教えてもらいましょうか」

ニヤニヤした顔で静が迫ってくる。

「はあお前言わなきや絶対寝かしてくれねーもんな、」

「流石に10年もつるんでるだけ私の性格よくわかつてるじゃん、あんたの浮ついた話なんて今まで聞いたこと無かったら結構びっくりしてるんよこれでも、女なんて見ずに野球だけしかやってなかったじゃん？」

「んーまあね。でも見てたのは野球だけじゃなかったっていうかなんつーかね」

あーやばい心臓の音が静にまで聞こえてんじやないかってぐらい緊張してる。菜華ちゃんの方をちらつと見ると顔を真っ赤にしていた。うぶだなあ、、

「なんか台詞がくさいよ純一、、んで誰なの？もつたいぶらないで早く言つてよ」

「静だよ」

言つちやつた、、

「だから冗談いらないって今、怒るよ？」

「冗談なんかじゃないよ、見てたのは野球だけじゃないって言ったでしょ。俺は9年間ずっと北原静に片思いしてたんだから。　　はあ言い直すよ。静の事が好きです。こ

んな俺で良かったら付き合ってもらえませんか？」

静の顔が見れない。俺は右手を静の前に突き出す形で気持ちを伝えた。

「えっと、あの、ほんとに？だって私達学校じゃずっと飼い主と犬とか言われてたんだよ
!？」

静の顔を見ると顔を真っ赤にしていた。この間の菜華ちゃんの言葉を思い出す。『嫌いな人から言われて顔赤くしたりしないって！』

まだ希望持っていいのかな、、返事が早く聞きたい。

「ほんとだよ。確かに飼い主と犬って呼ばれた時はおいつて思ったけど好きな人に特別

な扱いされるって事はほんとに嬉しかったんだよ？たえそれが荒い口調だったりパシリだったりしてもね？」

「もうこれ以上言わないでほんと恥ずかしいから！」

「それで返事はおねえ？言つとくけど菜華は大分前から気づいてたからね」

「まじ？」

「まじ。おねえ鈍感すぎるんだよ」

「だってこいつから憎まれることはあってもその、好きだとか思われてると思わなかったし、」

「静。取り敢えず俺も恥ずかしい思いしたんだから返事聞きたいかなって、」

「あーもーわかったわよ！」

「私も9年間純一の事が好きでした。こちらこそ宜しくお願いします。もう！これでいいでしょ！今日は寝る！おやすみ！」

え？今静が俺のこと好きだったって、

「よっしやあああ
!!!」

もう今までの人生で何より嬉しかった。やばい泣きそう、

「じゅんにいおめでどう!!! 私は絶対大丈夫だって思ってたけどね!!! それでもほんとおめでどう!!!」

「ありがとう菜華ちゃん絶対静の事大切にすることから任せといて」

「うん!! じゃあ私達も寝よ! おやすみ!」

「おやすみ!」

「おねえ? どーせ起きてるんでしょ? 一応おめでどうって言つといてあげる」

「うるさい、でもありがとう、」

「うん」

あいつとなら上手くやっていけそうな気がする。そんな気がした静だった。

恋人同士になつて

珍しく目覚まし無しで目が覚めた。未だに昨日の事が夢なんじゃないかなつて思う。リビングにつくともう静は起きていた。

「あ、おはよ静」

「お、おはよ純」

昨日までならなんでもない挨拶だったがお互い意識してしまったせいかわくぎこちない感じがした。

「あ！、あのさ……私達その、恋人同士になつたわけじゃん？ どうしたらいいのかなつて、、付き合い方わかんなくなつちやつた」

なんか悩んでる静が凄く可愛く見えてからかいたくなつてしまった。

「強気の静も可愛かつたけど大人しい静も可愛いんだね」

「んな!?なんてこと言うのバカ! い、いきなりそんな事言うなんて気でも狂つた?」

「いや、思ったままのこと言っただけだよ」

「も、もういいから純一着替えてきて、ご飯作つとくから!」

「うん、つてか付き合い方なんて少しづつ変えていけばいいと思うよ」

「それもそうだね、私達のペースでやってけばいいか」

「うん」

「朝から胸焼けしそうだよじゅんにい、」

「起きてたの菜華ちゃん？」

「いやあ初々しいカツプルの初日どんな感じなのかなあと思つて除いてただけどあんなにじゅんにいに押されてるおねえ初めて見たよ」

「あんなに動揺すると思わなくてついからかいたくなつちやつて、たまには立場逆転してもいいでしょ？」

「いやあ私はどうかなあつて思いますよ」

「どうしたの菜華ちゃん？急に敬語になつたりして」

「そつかあ、純一にからかわれてたのかあ私。しつめの悪い犬にはお仕置き必要だよね菜華？」

そこには菜箸片手に立っている静がいた。

「必要ですね、じゃあ私学校行くから後はファイトだよじゅんにい！」

「ちよつと！それはずるいつて！」

「はいはい純一君こつちきましょーねー」

俺は静に強引に何故かわからないが自室まで連れていかれるのだった、

「小学生以来かもねあんたの部屋入るの」

「あーそーだな、でもなんでまた俺の部屋なんかに？」

「なんか久々に見たくなつたのよ、えっと」

おもむろにベッドの下に手を突っ込む静

「おい、やめろ。お前が求めてるようなものはないから！」

「あるじゃん？」

静が右手に持っているものは紛れもなくお宝本だった。

「勘弁してくれ、、、」

「彼女として彼氏の好み知つとくのは悪くないと思うんだけど？」

ニヤニヤしながら聞いてくる静。完全にからかいに來てるな、、、

「取り敢えずそれしまつてくれ、、、普通に恥ずいわ」

「はいはい、そーいえば聞きたかつたんだけどさ何で私なの？ゆかりさんのが綺麗だし

あの裏知るまで性格も完璧だったじゃん」

「それ言わなきやダメか？好きな人に惚れた理由話すとかめちやくちや恥ずいわ」

「からかわれたお返し。言わなきやこの部屋から出さないから」

「いや、そんなこと言つたら静も学校行けないんだけど、、、」

「別に私はいいいよ？純一と二人でずーつとここにいても」

その発言はするいわ、俺の心情全部読み切ってるもんな静。このままだと尻にひかれっぱなしでしたまたこっちから攻めてみるか。

「俺だつて男だぜ？ずつと好きな子といったらそういう気起こして押し倒すかも知れないよ。」

さあどうでる静、流石に部屋から出す気になるだろ。

「別にいいよ。純一なら。ほらなんなら今からでもいいんだよ？」

静は目を瞑つて両手を後に組んで唇を突き出すようにして、

これって、そういうことだよな、女の子からせつかくいいよって言われてるのにないのなんて逆に失礼だし男見せろ天谷純一！

「静、」

俺は静の唇に重ねようとした時だった。

「相変わらず甘いね、フン！」

「いってええええええ!!お前玉蹴りあげるやつがあるかよ!!!やばい、ほんと泣くわこんなん、」

静はキスを避けて思いつき股間を蹴り上げた。

「ばーか。あんたなんか私の唇なんて100年早いわ、このバカ。出直してきなさい。じゃあ私は学校行くから」

そう言つて静は純一を残して家を出たのだつた。

監視者菜華

「痛い、い、」

純一は静の蹴りを受けて未だに立ち上がれずにいた。

「なんだよ！そりやずつと好きだった人がいいよ？言われて我慢出来る男なんているわけないやん！」

「おねえは素直じゃないからねえ」

「ほんとだよ！もう少しぐらい素直になつてくれないじゃん！」

「だよね！でも蹴られた時ちよつと嬉しそうな顔してたの見てたよ！」

「ちよつとだけだよ！普通にいてーよ！つて、ちよつと待つてなんで菜華ちゃんがいの？学校行つたんじゃ？つてかなんでどんどん俺から離れてくれの？」

「うわあ、おねえに完全に調教されてるじゃん、頼むから私の見てない所でそういうプレイやつてよね、い、」

「ガチで引かないでよ、やらねーよ！つてかほんと学校は？」

「じゅんにいまだ7：30だよ。私がそんな早く行くメリツトないもん。私がいなくなつたら2人でどんなことするのかなあつて隠れて見てたらじゅんにいが発情して蹴

られてるところ見てうわあつてなった」

「普通菜華ちゃんが学校に行くのは8時だ。全然時間見てなかったわ、、、だから静あんな余裕だったのか。」

「あのねえ菜華ちゃん、、、頼むから覗かないで、、、この間のベッドゴロゴロ事件だったりろくな姿みられてない気がするんだけど、、、」

「まあまあ気にしない、気にしない。じゅんにいがちよつとずれてることぐらい気にしないから私」

「気にしろよ、、、つてかずれてないです。」

「もうとにかく覗きとかはやめてくれよな、いくら妹でも静が怒るんじゃないか?」

「大丈夫だよおねえそういうの気付かないもん、だからじゅんにいがおねえに言うぐらいいしないと気付かないよ」

「俺が言う可能性は考えてないのね、、、」

「言ったらこの動画おねえにみせるだけだもん」

『ああああなんだよ今の反則だろ!!』

ベッドで見悶える高校生が映っている動画、ゆかりさんの件で相談した時の静の優しい顔を見た時のものだった。まだ持ってたのね、、、

「菜華ちゃんやつてることゆかりさんと同じなんだけど、、、」

「あーそれはむりきつい！消す！でも言わないでよね！でもおねえの知らない表情見るの私楽しみにしてるから覗きはやめないからっ！」

ニコツと笑う菜華ちゃん。お姉ちゃんっ娘だったなあそういうえば昔から。初対面の時は静の後に隠れてたっけそーいえば。

「ほどほどにしとけよ。それじゃあそろそろ学校行くか。」

「うん！」

こうして純一と菜華はお互いの学校に向かった。

いつもの通り待ち合わせ場所にはタカがいた。

「おはよータカ」

「おー来たな！〜んでどーだったよ？お前昨日連絡よこさねーから心配したんだぜ？振られて意気消沈して今日こねーかと思ったよ」

あーそーいえば夜連絡するって言ってたっけ俺。ごめんタカ。

「いやあ、実はね。付き合うことになったんよ。なんか元から両思いだったみたい」

「マジで!!!よかったな純一！もう俺絶対ダメだと思っててなんて声かけようかと思ってたぐらいだったわ」

「おいおいやめてくれよ」

「いやあ祝わなきやな、部活前にアクエリ奢ってやるよ」

「あざす！じゃあそろそろ学校行こうぜ、これ以上話していると遅れちまう、後一応内緒にしといてな」

「おっけー、じゃあ行くか」

紅白戦

「うーっす」

俺とタカは学校についてクラスに入った。

「おはよー静」

「ん、おはよ」

付き合っても静は静だな。

「んだよ北原付き合っただかかんんんん」

「ちよつときて！」

俺内緒にしとけつて言ったのに、タカは静に教室の外に連れ出されていった。俺も

あとをつけてみようと思う。

「何すんだよ北原、いてえよ」

「ばか！クラスの人の人にばれたら恥ずかしいでしょ！今まで散々犬みたいに扱ってたやつと付き合つてるとか知れ渡つたらなんて言われるかわかったもんじやないわ！」

犬みたいって、まあそんな感じだったけど、

「別にいいじゃねーか。他の奴らはそういうプレイだったんだなって思ってくれるよ」

にやにやしなから話すタカ。あ、これ蹴られるぞ。ほらやっぱり、

「いつてえ!!冗談だろ!!」

「あんたの脳腐つてんの!?!そういう発想にならないから普通!なんか照れ隠しでそういう対応してたとか思われたくないの!」

「つたく面倒なやつだな!なあ純一!お前こんなのどこがいいの?つていったあ!!なんで純一まで蹴んの!?!」

「あのねえ…まず声がかい、、そりや彼女悪く言われていい思いする彼氏いないだろ」

「あらあ朝からお熱いですことねえ純一さん、北原良かったやんこんな彼氏ができて」

「うっさい!」

再び静の蹴りが炸裂するもタカはそれをひよいと交わす。

「じゃあ俺先戻るからお二人でイチヤイチヤしてからききなよバカップル!」

笑いながら逃げるタカ。あんまからかうなよ俺も恥ずかしいんだから。

「相変わらずねあいつわ」

「そーだな、俺らも戻ろ」

「うん」

4時間目は男女合同でソフトボールだった。こういう時得意だからって調子乗って
いばるやつとかいるけど純一はその逆だった。なんていうか体育の運動ぐらい静かに
やりたかったのだ。今回も軽く流して終わる予定だったのだが、

「今日は紅白戦をして負けた方のチームには罰としてトイレ掃除やつてもらおうから宜し
く！チーム分けはこの紙を見てね！」

周りのクラスの人間もざわつきはじめる。

「お、楽しそうじゃん」

そう呟くのはタカ。こいつはゲームとかほんとすきだから毎回の授業でも人一倍め
だっていた。

「めんどくせえよ、負けたら部活とか遅れるじゃん掃除のせいで」

「まあ俺ら一緒のチームなら余裕だつて」

いやあクラスに二人しかいない野球部を一緒のチームにしないとと思うんだけど、

「あー違うチームやん！つてかポジションまで決まってるのかよ、」

「ポジションも決まってるのかよ、俺にも見してくれ。」

げ、俺のチームを見ると運動部に所属してる人もほとんどいなければ静もタカも相
手チームだった。こちらのメンバーを一通りいうと

a チーム

1 番 ショート佐々木（サッカー部主将）

2 番 ライト 木下（帰宅部）

3 番 センター 天谷

4 番 ファースト 橘（柔道部）

5 番 レフト 坂下（帰宅部）

6 番 ピッチャー 五十嵐（料理部）

7 番 セカンド 桜井（文芸部）

8 番 キャッチャー 赤星（料理部）

9 番 サード 風見（バスケット部マネージャー）

つてか野球未経験者にピッチャー、キャッチャーつて出来るのだろうか、

「赤星さん！」

「ん？天谷？どーしたの？」

「いや、キャッチャーつてかかれてたから大丈夫かなって思って、、ボール取れなさそうなら変わろうかって相談だったんだけど」

「あー大丈夫よ、私中学までソフトボールやってたからそれなりに動けるし早苗も、あ、

五十嵐ね。あの子とバッテリー組んでたから任せといてよ！小久保君は無理かもだけど他の子には打たせないから！」

これは勝つたろ。こんな奇跡もあるんやな。もしくは小林先生知ってたのか？

「マジで！めちやくちや頼もしいわ！頑張ろうな！」

「天谷も頼むよー」

「おうよ」

後は相手のバッテリー次第かな。タカがピッチャーやつてると面倒なんだよね、、、それなりに速い球投げれそうだし、、、えつと相手のピッチャーは、、、

1番ピッチャー 北原静

は!?静がピッチャーやるのか、、、んでキャッチャーが同じバスケット部の冴島さんか、、、少しでもいいとこ見せたいし思いつきり打ってやろう。この言葉を後悔することになるとはこの時純一は知らなかった。

1回

「はいー！じゃあ並んで！！これよりaチーム対bチームの掃除をかけた紅白戦を始めます！！7イニング制で同点の際は代表によるジャンケンになります！」

「おっしやあー！お前ら勝とうぜー！！！」

「うえーい！！」

タカの言葉でbチームが奮起する。こういう時クラスのムードメーカーは重宝するよな。

「天谷も掛け声してよほら」

五十嵐が声を掛けてくる。あんま柄じゃないんだけどな、

「よっしやあー！全力でaチーム潰してやろうぜ！！！」

「っしやーい！！！」

「じゃあaの先行で始めるよ！bの人は守備についてね！」

「はいー」

えーつとbの守備位置は、ピッチャーに静、キャッチャーに冴島、サードに剣道部の田島、ショートにタカ、レフト方向は捌かれるな。

セカンドに陸上部の星川、ファーストにサッカー部の野田。キーパーって言うてたっけかな。

レフトに文芸部の村田、センターにテニス部の植田、ライトに帰宅部の入江。先生がbに運動部集めたのは五十嵐の球打てるか分からなかったからかな。

「二姫（かずき）ちゃんを取ってよね！」

「あんたが変なところ投げなきや大丈夫だよ！」

どうやら静の投球練習が始まるみたいだ。

「みんな一応静の球確認しておこう。今のうちにタイミング合わせて打席に備えようぜ」

「おけ」

静の球はというと、平均的な女子のスピードと言つていいだろう。下からふんわりした感じの球。これなら誰でも打てそうだな。

「じゃあ一番佐々木くんどうぞ」

「うす」

「佐々木先頭頼むぜ!!」

「佐々木君打てー!!」

aチームから佐々木に声援が飛ぶ。佐々木はこつちを見てピースサインをしていた。

そして静の初球を叩いた。カキーン！

「はい、タカ！」

「はいはい、ほい野田っち」

「はいあうとー！次2番の木下さん」

なんか変だ。今のは佐々木が力んで打球があがらずショート正面に飛んだ。でも投げたコースがアウトロー低めの1番遠いことでストライクゾーンからボール半個外れたところに綺麗に投げた。しかもそれを冨島は要求してなかったか？

ただの考えすぎだといんだけど。

2番の木下は三振に倒れた。

「どんまいだよ木下！俺が打つから大丈夫！」

「ごめんね天谷君お願い」

こういう時運動が苦手な人はきついだろうな、、、やりたくもないのにやらされてミスしたら何か言う人もいるからな、、佐々木と木下が打てなかった分俺が打ってやる。野球部の面子が立たないしな。

「じゃあ3番天谷君」

「うす」

「静、悪いけど打たせてもらうぜ」

「あんたなんか打たれないわよ。そんな口叩いて打てなかつたら恥ずかしいよお」
「んなヒョ口球で抑えられるかよ」

第1球を静が投げた。外側に少し外れてボールとなる。

「かzukiいごめん！こいつ相手に隠しとくの無理だわ！もういい!？」

「はあ!?!あんだだけ終盤までとつとくいったのに、、、まあいいよあんたに任せる!」
「隠す?何をだ?」

「天谷君さ?静のこと好きでしょ?」

「な、何言ってるんだよ試合中に!？」

「はいすとらいーく」

「んな!？」

冴島に気を取られてる間にいつの間にかボールはミットに収まっていた。

「天谷君わかりやすすぎだよ」

「ほっとけ」

もうささやき戦術にはのらない。次の球打ってやる。

静の投げるフォームが変わつてることに気付いた。さつきまではプレートの前にたつていわゆる女の子投げをしていたのに今は後ろでサインを見ている。

考えている間に第3球は来た。

ばしーん！は???

「ストライク2！」

「あんたねえ！私が小学生の時ソフトボールやってたの覚えてないの？女子ソフトで私と一姫はバッテリーだったんだよ？それでバスケの終わりとかに暇で投げ込みまだしてたんだよね。この球あんたに打てるかしら？」

そういえばそんな事を言っていた気がする。小6の時は全国大会の決勝までいったって、

この球打てるのか？

野球をやってるやつはソフトボールも打てるだろと思ってる人がほとんどかもしれないが以外にそうでもない。第1プレートからホームベースまでの距離がだんちだしソフトボールで早い人は体感150ぐらい投げてる人だっているんだ。そこに緩急使われたらプロ野球選手だって打てないぐらいにはなる、

「別に棒球やけん打てるよ、確かに球速は認めるよ」

恐らく静の直球は体感140ぐらい。でも打てない球じゃない。ってかなんでお前バスケ部いんだよソフトボールやつとけよ、

「ふーん、じゃあこれで終わり！」

第4球を静が投げた。

「あ、、」

スパン。静は野球で言うところのチェンジアップを投げてきた。それを初見で見た純一がタイミングが合うはずもなく空振り三振に倒れる。

「北原やるじゃん!!これ俺達余裕じゃねーか!!」

bチームで歓声があがる。大丈夫だ。恐らく先生との約束でこの投球が許されてるのは俺だけ。他の人になんとか罍出て貰うしかないな、、

aチームの指揮も下がってきている。なんとかして指揮を高めないと、、でも三振した俺に何が言えるんだ、、

「ほら暗い顔しない!!こつちだつてソフトボール経験者がバッテリーしてんだし点取れなきや負けないんだから元氣出していくよ！」

キャッチャーの赤星が声を上げる。流石元捕手だけあつて流れの切り方わかつてるわ。

「おうよ!!みんな守備行くぞ」

1回裏bチームの攻撃を前に俺は五十嵐、赤星のバッテリーに声をかけにいった。

「さつきは助かったよ赤星、ありがとう。それで守備んだけど見てわかるとおり右方向は初心者の塊なんだよ。出来れば内側放らせて左方向に打たせることでできないか？」

「あーおけ。でも打たせる気ないけどね。静みたいな球速はないけど私には変化球があるから。あ、小林先生から使っていいのは静と一姫と小久保にだけって言われてるけどね」

「マジで頼もしいわ頼んだぜ」

「はいよ」

「はいじゃあ1回裏bチームの攻撃は北原さんから！」

全国レベルとすればバッティングもそれなり出来るんだろう。外野にも来るかもしれないし内側主体の投球するなら少し左中間寄りに守っておくか。

第1球を五十嵐が投げる。

「ストライク！」

インローいっぱいのところに綺麗に決まる。

「ないばーよ早苗！」

見たところ球速は体感110キロほど。マジでなんで運動部入ってねーんだ、、

静は様子見といった感じで微動だにしなかった。

第2球を投げる。

「ストライクツウ！」

また同じところに綺麗に決まる。マジでコントロールいいんだな。俺も公式戦であんなコントロール出来たらなあ、

「五十嵐ないぴーよ！そのまま頼むぜ！」

外野から声をかける。普段俺は投手をやつてて思うのがほんとに内外野からの声掛けつてのはありがたいものだつて思う。

第3球を投げた。

「ボール」

なんか落ちた感じがしたな。チェンジアップか？よく見逃したな今の、

『インローのストレート2球に落ちる球。でもスピードが遅いから簡単に見切れるわ。イン2回続いてるしこれ以上ボール投げたくないだろうし外のストレートにやまはつて初心者側飛ばしてランニングホームランでも狙おつと』

バッテリーのサイン交換が終わり第4球が投げられた。

『外のストレート！貰った、いやこれは……！』

「スイング！スイング！小林先生今のは？」

「スイングだね、北原さんアウト！」

「ナイス早苗!!」

「いやあ今のスライダーはやられたよ」

舌を出して笑う静。

「手加減出来ないからねえ全国さんにわ」

「次は打つよ」

おいおいほんとにこれクラスの紅白戦か、、

レベル高すぎてやばいんですけど。確かに百合山高校は部活動力入れて体育とかの授業が1番多いけどさ、、

後続の2番の田島と3番野田はふたつの内野ゴロを打たされスリーアウトとなった。

ヤキモチ?

2回の表aチームは冴島さんの配球と静のコントロールで三者凡退に終わった。

「はい次4番小久保君」

「っしー!」

「赤星ちよつといいか?」

「ん?どーしたの天谷?」

「タカの配球なんだけど俺に任せてほしい。だめか?」

「ううん、野球部で苦手なことかわかってるだろうしどうしたらいい?」

「初球にど真ん中の出来るだけ早めの直球。後は全部ストライクからボールに逃げるス

ライダーで頼む。あいつ逃げる球にめちやくちや弱いんだよ」

「わかった、任せといて」

タカ本人は克服しようとしてるらしいがどうにも外のスライダーに弱い。公式戦の記録でも外角は2割ない。

第1球を投げて予想通りタカは見逃した。

「ストライク!」

「タカなにしてんの！甘い球だよ！」

「わりーわりーいいたますぎで手が出なかつたわ」

これもタカの癖だ。何故だかわからないが初球は8割型見逃す。

第2球を投げた。

「おらー！ カキッ！」

「ファウルボール！」

「ボール球振つちまつたな、まあ追い込まれてもなんの問題もないわ」

「あんま舐めてると痛い目みるわよ」

「赤星ちゃん目が怖いよ」

第3球を投げた。

「ボール」

それでいい。タカは絶対振ってくる。

続いて第4球を投げた、カキーン!!!

「え!? センター！」

打球はぐんぐん俺のいるところまで伸びてきた。ネット手前でなんとかキャッチする。

「あぶな、、、今のもボールなのに強引に腕伸ばして当てやがった」

「たあ！ボールかよ！純一お前の配球だなきたねーぞ！」

「お前が外側よえーのがわりーんだよ！！大会までにくせなおせよ！」

それでもセンスだけで外に逃げる変化球についていけないのは流石だと思った。流石うちのチームのクリーンナップだわ。

3回の表は三者凡退で終わった。そしてbチームは2人凡退して次が静だった。

「1番ピッチャーきたはらさーん」

小林先生は早くもウグイス嬢に飽きてきたみたいだった、

静は才能の塊で中学から始めたバスケもみるみるうちに上手くなって気づいたらチームでエースになっていた。となるとさつき投げた外に逃げるスライダーも通用しないのではないか。くさいとこついで最悪フォアボールでもいいんじゃないかと思つた、まあバッテリーに任せるか。

赤星は考えていた。

『歩かせたいけど一打席目あんまり見れなかつたけど一姫も怖いんだよね。ツーアウトとはいえ油断せずくさいとこついでいこうかな初球はボールからストライクになるスライダー。のけぞってよね静』

『一打席目は上手いことやられたけど次はそうもいかないんだからね。初球はスライダー狙い。多分私はスライダーまだ攻略しきれてないと思つてるだろうし』

五十嵐が第1球を投げたっ！ボールは狙い通りボールからストライクになるところのけぞるかと思いきや、

「踏み込んでる?!」

かきーん!!!ボールはぐんぐんのびてソフトボール用のネットを超えた。

「痛烈！一閃!!打球はレフトスタンドに一直線!!北原選手先制の一打です!!」

うるせーよスタンドねーよってか楽しむなよ小林先生、

「っし!!」

「おおお!!!北原すげえ!!」

bチームからは歓声があがる。

そしてaチームからは、

「うわあまじか、」

「天谷でも打てない北原からどうやって点とればいいんだよ、」と悲観的な声上がる。

二塁ベースを回る時静はセンターにいる俺に向かって笑顔でピースサインを作っていた。よっぽど嬉しかったんだろうな、

「ごめん早苗！私の配球ミスだよ、、」

「ううん、あれは静褒めるしかないよ、、流石元全国だよね」

「だね。まあ切り替えて次の一姫抑えよ」

その一姫への第一球ストレートが真ん中高めの甘い球になる。カキーン!!!

打球は俺のいるセンターへの低い打球になる。

『落としてたまるか!!静だけにいい形はさせないっ!』

ズザアア！純一は見事低いライナーを落ちる寸前でスライディングキャッチした。

「あぶねえ、、、つてかハーフパンツでスライディングするもんじゃねえわ思いつきり膝擦りむいたやんけ、、、」

「ごめん天谷助かったよ、、、つて膝擦りむいてるじゃん！ちよつとまってて!」

「大丈夫だよ五十嵐さんこのぐらいい」

「だめだよベンチ座つてて!」

「お、おう」

擦り傷とかは慣れてるんだけどな、まあ好意無駄にしたいくないしね。

「はい、保健室から包帯とか貰ってきたから」

そう言つて五十嵐は俺の前に屈んで丁寧な傷口を消毒してくれて包帯を巻いてくれ

た、っ、つてかまあまあ恥ずかしいなこれ。五十嵐も普通に外見可愛い子だし後でタカに
なんか言われそうだな。

「ありがとね五十嵐」

「うんうんこちらこそあれ取ってもらって助かったよありがと」

笑顔で言う五十嵐。あーこういうのに惚れる人もいるんだろとか呑気な事を純一
は思うのだった。そんな時マウンドで静はこちらを見ていた。

『なによデレデレして気持ち悪い』

「3番センター天谷君」

あれ？前の二人は？

「ごめん打てなかった！ショートゴロ！」

「私もピッチャーフライだった、」

本格的にまずいなこれ、、

さあどうするか、、直球一本に絞ってやるしかないな。チェンジアップは捨てよ。

第1球を静が投げた。

「いってえ！」

足首へのデッドボールとなる。コントロールのよかった静が？ええ??????

「ごつめーん純一手が滑ったあ」

わざとらしく謝る静。

「おいお前わざと当てたな、」

「いやあ美少女にお世話されるなんていいご身分になったなあつて私も早苗ちゃんにお世話されたいなあ!」

もしかしてヤキモチ?あの静が?ちよつと嬉しいかも。

「おいそのバカツプル長い!4番ファースト橘君」

「カツプルじゃないし!!!」

そこまで大きく否定されるとまあまあ傷つくぞ、

さてせっかくランナー出たし走ろ。

第1球投げた!それと同時にスタート!つて足首いてえ、全力で走れない、

「アウト!!」

あの野郎走ること見越してやがったな、

「純一さんよお走るのバレバレだったぜ、冴島もろウエストしてたぞ、」

「いやあスコアリングポジションに進めようかと、」

「まあ、足首スプレーやつとけよ、」

「おう、はあ見透かされてんのきつっついなあ。」

こうして4回表まで終わって0-1でbチームがリードする形になった。

試合終了

その後試合は6回裏まで終わって0―1でbチームがリードしているといったかんじだ。4回裏から今までbチームの冴島とタカカのヒットのみでaチームはノーヒットで7回表を迎えてしまった、。

「じゃあ最終回！1番シヨート佐々木君！」

「頼んだぞ先頭！静もそろそろ疲れてきてるはずだからな！」

「おうよ！純一にチャンスで繋いでやるぜ！」

「ばーか私に疲れなんてもんはないんですけどお」

「うるせえそう言つて泣いても知らねーからな」

「泣くのは純一君じゃないかなあ」

「プレイ！」

静が佐々木に第1球を投げた！その初球！

「ん、ん、」

「んな!? サード！」

「ええ!? おれ!？」

佐々木はなんと初球セーフティバントを試みて見事成功させたのである。

「おー！ナイス！」

「前野球見てた時にイチローがこんな感じのヒットもあるとか言ってたからやってみたらドンピシャだったぜ！」

バントは一見簡単そうに見えるが実はそうでもない。コースによつては球が浮き上がったたり強く転がしすぎたりもしてしまう難しいものなのだ。

「なんで奇跡的にプツシユバントになるかな、普通のバントなら静が処理して終わつたのに、」

「一人ぐらい気にしない気にしない。さあ次行くよ一姫！」

「はいよ！」

2番の木下はボテボテのファーストゴロとなるが詰まったのが幸いして1死に2塁となる。

「あまやー!!!」

「頼んだぞマジで！お前打てなきや後がいねーからな!!」

「任せとけて！静の泣き顔写メってやろうぜ」

純一家帰つたら覚えときなよその言葉。

「雑魚が何言つても残念な事ね、とつとと終わらせましょ」

俺の名前が小林先生からコールされる、

「3番センター天谷君」

なんだろう、部活の公式戦ぐらいドキドキ出来るような試合が出来ると思っていなかったしマジで俺楽しんでるわこの試合。

第1球を静が投げたっ！

「ストライク！」

アウトローへのチェンジアップとなる。

「ないぼー静！」

「頑張れ純ー！」

互いのチームから声援が飛び交う。

第2球を投げたっ！カキーン!!打球を捉えはしたもののレフト方向への大きなファールになる。

「今のところ打つてもファールにしかならないよ天谷、次でラストボールだね」

「うっせえもうストレートもチェンジアップも完璧に捉えられるつつうの」

「タイムお願いします」

突如静がタイムをかける。

「純ーこんな時だからこそ話したいことがあるの。いいかな？」

「んあ？別にいいがどうした？タイムなんて1分も取れないぞ」

マウンドで突如話し出す静。

「私ね、こうやってずっと前から純一と何か同じ競技で競ってみたかったの。あのね、結構こんなところで言うのも恥ずかしいんだけど好きな人と一緒に何か熱くなれるって幸せなことじゃない？だからさ最後悔いのない勝負しようよ」

a. bチーム両方からからかいの声があがる。とくにbチームの野手陣からはひたすら大きな声があがっていた。

「静、俺も「天谷君静モーション入ってるよ！」

「え？」

バシーン!!

「ストライクバッターアウト!!」

「いえーい！作戦成功！引っかけたね純一。私があんたのことを好き？そんなことありえないよねえ」

「わりいな純一そういう手はずだったんだよ今のタイムは」

「え、でもタイムかかってたはずじゃ、」

「私は貴方達へのからかいの声援と同時にプレイかけてたよ、静ちゃんもプレート踏んでたしね」

「それにあんた小さい時から恥ずかしいことあると目逸らすのよ。ごめんねあんた完璧に抑える自信なくてね」

待つてくれ、今静大事なこと言つてなかつたか、、私があんたのことを好き？そんなことありえないつて、、あーそつか、、俺の告白失敗してんだ、、多分断りづらくてOKしてくれたのかな菜華ちゃんの目の前だったし、、

「みんなごめんこんな形でベンチ戻つてきて、、」

「ちよつとちよつとたかがクラスの紅白戦なんだから気にしないで！後で掃除頑張ろー！」

「うん、、」

そして4番の橘が三振に倒れゲームセット。長いようで短い紅白戦が終わった。そして俺の恋も終わったのかな、、はあ、、よかつた今日部活自由参加で、、掃除終わったら帰ろ、、流石にしんどい、、

教室に戻ると五十嵐さんが声をかけてきた。

「天谷大丈夫？さつきから顔死んでるけど」

「あー大丈夫だよごめんね心配かけて」

「ううん。つてか天谷がショック受けてるのつて試合の結果うんぬんより静の言葉なん

じゃないの？三振した時はうわあやられたみたいなの顔してたけど静が好きにならないって言った瞬間いつきに顔色悪くなったのわかったからさ」

「ああ、うんあつてる。そんなに顔に出てたのね俺、」

「もしかして静の事好きなの？」

「んーまあ別に隠すことでもないしそーだよ」

「まじで!?!逆に嫌いなんじゃないかなって思ってたんだよ女子の間でわ。だって静天谷の事凄い扱い方してたじゃん？パシツたり悪口言ったり」

「まあはなからみたらそう見えなくてもないかもね、でも本当は優しいところもあるんよあんなんで」

「そーなんだ、あーなんだあ好きな人いたんだあ。ここだけの話だけど結構天谷うちの女子から人気あるんだよ、まあ理由がどんなこと言っても許されそうとか甘やかしてくれそうとかまあまあ酷いけどね、多分静と天谷のやり取り見ててそう感じたんだと思っうけどね」

笑いながら話す五十嵐さん。

「ひでえなおい、、なんか喜んでいいのか複雑だわそれ、、」

「まあそうだよね、でも私はそうは思わないよ、一生懸命に野球することか他人に気を使ってくれてたりするでしょ？ほら？今日だって木下さんつらそうにしてて声掛けて

あげてたじゃん？私はそういうところ好きだよ」

ちよつと照れくさそうに話す五十嵐さんにちよつとだけドキッとしてしまった。

「お、おうありがとな励ましてくれて」

「ううん、私で良ければいつでも相談乗ってあげるから！後五十嵐さんはやめてよ、他人行儀っぽいから早苗って呼んで。私も純一君って呼ぶから」

「はいよ、ありがとな早苗」

「う、うん！じゃあまた放課後掃除の時にね！」

そう言うのと五十嵐さんは走って教室を出ていつてしまった。

「はえーな、、あんな慌ててでてかなくても、トイレか？」

「あーまーやー」

「え？」

「早苗のこと泣かしたら許さないからね」

そう言うのは赤星。試合ではキャッチャーをやってた人ね。

「なんで俺が五十嵐を泣かせるんだよ、、」

「まああんたには一生わかんないかもね、じゃあ掃除してとつとと帰ろ、もうbチームの人達天谷が落ち込んでとぼとぼ教室に戻ってきた時にはみんな帰っちゃったみたいよ。なんか祝勝会行くんだってさ。いいなー」

「そーなんだ、つてか掃除するにしてもなんで今残ってるのが俺と赤星と早苗しかいないの?」

「あー、、皆帰りました!サボりです!」

「あいつら、、確かにサッカー部とかは大会期間中だしわからなくもないんだけど、、まあしゃーないわな俺らで終わらして帰ろ。終わったら購買行ってお菓子とジュースでも買ってプチ反省会しよーぜ暇だろ?」

「お、いいねそれ!早苗にも伝えとく!きつと来るよ」

「おう。じゃあ俺適当に上からやつてくから終わったらまた教室集合な」

「はいよ」

こうして俺達は1時間近くかけて掃除を終わらせた。

試合が終わって

純一と早苗、赤星らと掃除をしている頃静はと言うとaチームの皆とファミレスで祝勝会をしていた。

「じゃあみんな俺らの勝利を祝ってかんぱーい!!」

「かんぱーい!!」

タカの声からaチームの面々が声を上げる。

「しかし北原があんな球投げれると思わなかったぜ。しかも打点もあのホームランの本だけだったしな、マジで北原様様だぜ」

「いやあまさかキャッチャーの私ですらあんな投げたところに来るとは思わなかったもん」

「やめてよ、私だつて今日は出来すぎだったよ、それに最後危なかったしね」

ちよつと純一には悪いことしちやつたからなあ、私があんたのことなんて好きにならないって言った時のあいつの顔マジで真つ青だったしやっぱり謝つとかなきゃな、あいつあー見えてメンタル豆腐だし、

「最後マジで天谷テンパってたよねあれ面白すぎ」

「一姫の性格の悪さ出てるわあんな作戦立てるなんて」

そう、6回裏私達の攻撃の時にこの作戦は提案されたものだった。毎回きつい当たり方してるあんただから出来ることって言われてノリでやっちゃったけどちよつと最後の煽りいらなかったって反省。

「ひどいなー私は性格良くて美人って評判なのに」

「はいはい毎月のように告白されてる姫ですもんね」

そう、冴島一姫は美少女である。容姿をいかして男共を操作するんだからほんとに恐ろしい。

「なんか今失礼なこと思ってるない？」

「思ってます」

「ならいいけど！あー田島君悪いんだけど飲み物持ってきてもらってもいいかな!」

「え、うん！りよーかい！」

言ったそばから上目遣いでおねだりすか一姫さん、田島君めちやくちや顔赤くしてたじゃん。

「ってか静、付き合ってるのにあれはひでーぞ今だから言うけどさ、純一あの後顔しんどたぞ」

小声で純一の親友小久保隆俊が耳打ちしてくる。うっさいな私だって一番気にして

るところなのに、

「わかってる、後でフォロー入れとくから」

「キスぐらいしてやれよー」

それはしないけどね、タカの言葉を見殺しして祝勝会を楽しむ静だった。

一方純一はと言うと、

「おつかれー!!」

「おつかれー!!」

赤星、五十嵐、純一の面子で教室でプチ反省会みたいなことをしていた。

「ほんと静にやられたってだけの試合だったね思い返すと、」

「まあねえ…天才だよあいつは、俺も最初の打席全く捉えられなかった」

「でも最後の打席ちゃんとストリート捉えてたよね、流石野球部だよ」

フォローを入れてくれる五十嵐さん。

「まあ一応ね、でも最後がなあ、」

またいらんことを思い出しちまった、湿っぽくするのも嫌だったので話を交える。

「そーいえば二人ともあんなに上手いのになんでうちのソフトボール部入らなかつたの？」

「いやあだつてなんか高校の部活つて面倒なイメージあつたから何か入るにしても文化系にしよーかなつて早苗と話して今は文芸部にいるんだ」

「そーなんだ、まあたしかに高校の部活つてめんどいイメージあるよね、実際野球部も色々と厳しいし結構いざいざとかもあるんだよね」

「あーやつぱそーなんだ、つてかゆかり先輩とは振られた後なんかはないの？」
すつかり忘れてた。そーいえばその後すつかり姿を見ていない。

「あー特に何も無いね、部活もたまたまこころ2、3日先生が出張行つてるから自由参加で俺行つてないで会つてないんよ」

「あーそーなんだ、何か周りに言われるかもだけど気にしちやダメだよ純一君、どーせ嫉妬とかなんだから、マジで男の嫉妬とかキモいだけだよ」

笑いながら話す五十嵐さん。ほんと五十嵐さんは優しいな。

「ん、ありがと。早苗ちゃん優しいよね。俺が絡んでた女子つてほんと静ぐらいだったからなんか新鮮だわ」

「へっくちー！」

「おい北原風邪かよ写すなよ？」

「風邪なんて引いてないわ。あいつが私の噂でもしてんのかもね」

「おい、天谷しれつとうちの早苗口説いてんじゃねーよ」

「口説いてないわ！」

「そーだよ赤星！別に私口説かれてない」

「そーいや赤星つて皆から苗字読みだけど名前なんて言うん？」

「う、、、」

「あー純一君触れちゃ行けないところに、、、」

「え？」

「天谷、そんなに知りたいか？」

「顔がこえーよ、、、」

「いえ、大丈夫です、、、」

「そ。じゃあそろそろいい時間だし帰りますか」

「そーだね、あ、純一君R I N E教えてよ！」

「ん？全然おけよ」

「ほんと!?!ありがと！」

「RINEE1つぐらい別になんてことないよ」

「今夜にでも連絡するね」

「おう、それじゃまた明日な」

こうしてプチ反省会は幕を閉じた。

小悪魔菜華

はあ、家に帰りたくねえ、

純一は昼間の試合の静の言葉がずっと胸に突き刺さったままだった。

『あんたのことなんて好きになるわけないじゃん!!!』

好きなわけないじゃん好きなわけないじゃん。

あー頭痛くなる、、冗談だし信じよう、

「ただいまあ」

「おかえりじゅんにいつて顔死んでるんだけど、、」

「あー気の所為よ、、静はまだ帰ってないみたいだね」

「あーおねえなら多分後30分とかしたら帰ってくるからご飯待っててって連絡あったよ」

「あーそーなんだ了解」

なんだ帰ってきてないのか。今日の事聞こうかと思っただけどまあいいや。頭冷やしに風呂行こ。あの発言忘れればいいんじゃないか？そしたら静にわざわざ聞く必要もないしこれまで通り恋人同士でいれるし、、

「風呂入ってくる」

「あー私入ろうとしたのにい」

不満顔で講義してくる菜華ちゃん。

「ここは譲れません！入ったもん勝ちや悪いな」

「ちよつとお！」

後から抗議の声がしばらく続いていたがそれを無視して俺は風呂に入った。

「はあ、くるわあああ」

おっさんみたいな声を出して風呂を満喫する純一。疲れてる時に風呂ほど最高なものないからね。

「たまにはゆつくり入ろ。静もしばらく入らないだろうし菜華ちゃんにはちよつと悪いことしちゃうけどね、」

後でアイスでも買ってきてあげればいいかな、なんて考えていた時だった、

ガラガラ。

「え？」

「じゆんにいがあったんだからね早い者勝ちって！」

「ちよつと待って待って！流石にもう子供じやないんだしそれは色々とまずいって！」

風呂場の近くにはバスタオルすら巻いてない菜華ちゃんの姿があった。

「えー？何がまずいのかな純一君？まさか中学生の体見て興奮したりしないよね？」

なんでこういう時だけ純一君なんだよ、俺にロリコンの趣味はないけど忘れてるかもしれないが北原菜華は美少女である。流星にいくら未発達な体とはいえ興奮しないわけがないですよ男として、

「あのなあ、俺はロリコンなんかじゃないし別に菜華ちゃんの裸見て興奮したりしないよ」

「ふーん？じゃあ別に一緒に入ってもいいよね！私はじゅんにいのこと異性としてって言うより将来のお兄さんぐらいにしか思っていないからなんともないし！」

「おいおいマジかよ、俺だって隠すものないし全部見られてるし流星にヤバイし早く出よ、」

「じゃあ俺出るから」

「あーそーいーこと言うんだ、たまにはゆつくり入ろって言ってたのに聞こえてたんだけどなあ。それって私を一人の女として見てるから色々やばいってことなんじゃないの？」

「ニヤニヤしながら見てくる菜華ちゃん。くっそ独り言まで聞かれてたのかよ、確かに今出たら私は彼女の妹の裸を見て興奮しました。って肯定するようなもんだしな、」

「そんなことないですよ、ゆつくり入ります」

「ならいいんだけどね！」

狭い、いつも1人で入ってる浴槽に2人入るところも違うのか、ってか足当てるくんよ、やっぱり姉妹だなんて思うよ。両方DSだわ、

「んでじゆんにい学校で何かあったんでしょ？」

「え、俺そんなこと言ったっけ？」

「顔見れば多分誰でもわかると思うけど、朝はおねえと付き合えてめちやくちや嬉し
いぜ学校行ってくるぜだったのに今はあー死にてえって顔してる」

なんだよその俺の口調は、

「そんなにわかりやすいの俺って、」

「残念ながらそうですよ」

「まあ隠すことじゃないし別に言うけどさ、」

俺は昼の試合の事を菜華ちゃんに話した。

「あのさあじゆんにい、おねえの性格をもう1度見直してよ、あのおねえだよ？素直に好きなんて言うわけないんだしそんなの気にしちやダメだよ、そんな事一々気にしてたらじゆんにい死んじやうよ」

呆れた顔で話す菜華ちゃん。やっぱり考えることでもなかったようだ。

「そーだよねありがと。はあよかったあ」

「ほんとメンタル弱いよねじゅんにいって」

「それを言うなよ、付き合いたてで今でも奇跡だと思ってるぐらいなんだからちよつとぐらい疑つても許されるって」

「なのはーどこー？純一もないし帰ってないの？」

静が帰ってきた。待てよ、今の状況冷静に見てまじいんじゃないか、

「菜華ちゃん浴槽から出てっつていうか早く風呂場から出てもらつてもいい？今の姿勢に見られたら流石にやばいと思うんだけど、」

「えー？大丈夫だつてえ、なんなら呼んでみよーか」

「待つてほんとにやめて」

「えいー！」

ぴろりろりーんぴろりろりーんお風呂が呼んでいます。湯沸かし器のボタンを押す

菜華ちゃん。

「ちよつと!!」

「えへへーおねえの反応楽しみ、どーせなら、えい！」

「え、ええええまつてこれはやばいつてまじ」

菜華ちゃんは僕の腕にしがみついてきた。もちろん何も着てない状態で、もちろん

控えめな胸とかももろに当たってるわけで、、、、

がら！

「ちよつといるならボタンじゃなくて返事してくれ、れば、、、、」

「あー静おかえり」

「死ねロリコン別れるから」

「ちよつと待って誤解なんだって！」

くすくすと横で笑う菜華ちゃん。1人だけこの状況を楽しんでいるようだった、、、、

和解

僕は菜華ちゃんと一緒にリビングで正座をしていた。ソファアに座ってこちらを睨んでる静さんはそりやまあ酷く不機嫌で、

「んで、何がちよつと待ってなのロリコン、いくら相手が私の妹とはいえ若い男女が一緒にお風呂入ってるなんてどうかと思うんだけど？」

「こもつともである。菜華ちゃんは相変わらずニコニコしてるしどーしよ、」

「いや、何度も言ってるけど俺が先に入ってたら勝手に菜華ちゃん入ってきてそれで言うこと聞いてくれなくて俺も出たくなって結局あーなってしまったわけです、」

「それで菜華の裸見て興奮してました、と。」

「してねーよ！」

「じゆんにいその言い訳はきついんじゃないかな、、男の人の身体の変化ってわかりやすいんだよ、」

「こいつ、、、これ以上ややこしくしないでくれほんとに泣きそうになるから、、、そこちを見る静の目がほんとに犯罪者を見るかの目してるから、、、」

「はあもういいわ、どーせわかってたけど菜華のイタズラでしょ。あんたも大概にしと

かないとこの変態に襲われるわよ」

「ちえーなんだよもつと動揺してくれば面白かったのに、それに今回はじゅんにいがおねえのことで悩んでたからわざわざお風呂にまで聞きに言ったんだからね」

「最初はいきなり妹に手出したのかよ思ってたけどよくよく考えてみたらこいつにそんな度胸ないもん、え？私のこと？」

「そーだよ、試合中に好きになるわけないじゃん言われてお風呂入る前までずっと死んだ顔してたんだから、そこんとこちゃんを謝った方がいいと思うな彼女として。いくら相手がじゅんにいだからって流石に可哀想だと思うよ」

菜華ちゃん、

「あー、純一ちよつと上来て。菜華はそこいなさい」

「え、ああわかった」

そう言つて手を引かれるまま俺の部屋に入った。

「なんでまたここ？」

「んーなんか話しやすいのよここ、んでもしかしてソフトボールの事間に受けてたつてマジ、、？」

「うん、あの時は結構ガツツリ間に受けちゃつてて俺が告白した時菜華ちゃんが近くに

いた手前断りづらかったんじやないかなとか考えちゃったけど風呂場で菜華ちゃんにおねえの性格考えてみてよって言われて冗談だったのかなって、でも静、金輪際あんなこと言わないでよ、好きな人にそれ言われるの結構きついんだぜ？」

「ごめん。私もあんたが相手だとなんかブレーキ外れるっていうか、あんたなら言っても大丈夫かなとか思ったりしちやったの、だから今回は本当にごめんさい、好きにならないうんて嘘だし私はほんとに純一の事が好きだから」

「静、、、」

気付けば静の顔が目の前にあった、そして目を瞑っていた、、、いいんだよな、今朝みたいなことじゃないよな、、、でも俺も我慢出来ない、、、

「ん、、、」

しばらくの間2人はキスをしていた。

夢みただ、と純一は思っていた好きになった当初は絶対付き合えないと思ってたし憧れの存在でしかなかったから、、、

「がつつぎすぎよバカ、、、」

「そつちから求めてきたくせに?」

「なーいや、その純一に悪いことしたな思ってたお詫びよー」

動揺している静を見るのは新鮮でちよつといじめたくなるような可愛さがあった。俺って以外sの気もあるのかな。

「菜華ちゃん待たせてるし戻ろ」

「そーだね、菜華には内緒だからねもちろん」

「わかつてるよ」

ちやつかり見てそうだけど菜華ちゃんなら、

リビングに戻ると菜華ちゃんはソファで寝ていた。

「菜華！そんなところで寝てると風邪引いちやうから上でちゃんと寝なさい」

「あ、おねえ、私寝ちゃってたんだけ行ったら部屋行くから先行っていいよ」

「りよーかい、じゃあ純一また明日ね」

「おう、おやすみ」

そう言つて静は上の部屋に行った。

「じゅんにいいものを見せてもらったよー。おねえの照れた顔とか中々見れないからねえ」

「やつぱ見てたのか、ダメだつて言ったのに、、どーすんのよあのままおっぱじめたら」

「えへへ、流石にそうなたら私も撤退するよ、家族のそんなところ見たくないし」

「まったく、、じゃあ俺も寝るわおやすみ」

「うん！おやすみじゅんにい」

過去編 純一

過去編

思えば静との出会いは最悪だった。小学2年生の頃が初めての出会いだった。俺はその頃は野球もしてなくて友達も少なくほとんどの時間を1人で過ごしていた、そんな時体育の授業でクラスを二つに分けてドッジボールをやっていた時だった。1人だけ桁違いの運動能力で周りを驚かせたのが北原静だった。小さな時から口悪かったなほんと、

「天谷！逃げてばかりじゃなくてボールとって私にパスするなり相手に投げなさいよ！」

試合終盤だった、静はアウトになり陣地に残るは何故か俺だけになってしまった、すばしっこくて中々当たらなかつたらしい。そして相手陣地は5人、それなりに運動が出来る子もいて絶体絶命だった。

「無理だよ北原さん、僕ボールなんてとつたことも投げたこともないんだから、」

「そんな弱気でどーすんのよだっさいなあ」

そんな会話をしてくる中で少年野球チームに入っていた小久保高俊（現在の親友）が

投げたボールを避けきれずゲームセットとなった。

「ごめんね北原さん僕がもう少しボール取れてたら、」

「弱虫の言い訳なんて聞きたくないわ。なら小久保君にでも教わって勉強しなさいよ、ほんとあんた見てるとイライラする」

この時の心境はなんだこのくそおんなちよつと運動出来て顔がいいからってなんだよこいつっていうのが素直な感想だった。俺が静のことを気にし始めたのがその半年後、ちよつとした出来事だった。

「おい、天谷そこどけよ俺が座りたいんだけど」

当時のクラスのいじめっ子に言われて俺は確かどかなかったと思う。でもそんな些細な事であーなるとは思わなかつたんだよね。

「なんでよ、ここ僕の席だし木村君向こうの席じゃん」

「はー？なんでお前に指図されなきゃいけないわけ？」

「逆になんで僕が譲らなきゃいけないのさ」

「もーいいよお前うざいわ」

ドン！俺は座ったまま蹴られていた。

「いったあ、」

「初めからどいときゃいいんだよバカ」

その次の日から木村君から俺へのいじめが始まった。

「あれ?」

登校して外履きから上履きに履き変えようとしたら上履きがなかった。仕方なく裸足で教室まで向かうと、

「お前なんで上履き履いてねーの? 可哀想にそんなお金もない家なのかな天谷の家つて、ギャハハハ」

すぐにわかった。上履きを隠したのは木村君だって。それに取り巻きも笑っていて心底腹が立った。

「返してよ! なんでそんなことするの!」

「はー? やめてくんね? 俺らが隠したみたいじゃん? 証拠でもあんの?」

「う、それはないけど、でも!」

「証拠もねーのに犯人扱いとかきもすぎなんだけどあつち行けよきもちわりーな」

その頃の俺は気も弱くて引き下がらざるをえなかった上に泣いてしまった、今思えばほんとに弱すぎだった俺、

机に顔をつつぷして泣いてたのを隠してた時だった、当時隣の席だった静が俺に声をかけてきた。

「ねえ、大丈夫? これ天谷のでしょ? さっき女子トイレにあつたんだよ? ねえつてば」

「え、北原さん、？」

「つてええ!?!なんで泣いてんのよ、ほらハンカチ貸してあげるから」

強気な静しか見たことなかった俺はあたふたしてる静を見て少し笑ってしまった。

「つてなんで今度は笑ってるわけもーわかんなよあんだ」

「なんか強気な北原さんしか見てなかったら慌てる北原さん見るの新鮮でおかしくて」

「はー!?私だつて心配ぐらいするわよ!ほらハンカチ使いなつて遠慮しなくていいから」

「ありがと北原さん」

そう言つて静からハンカチを使つて涙を拭いた。

「洗濯して返すねこれ」

「いいわよ別に、少しは元気でした?」

「うん、ありがとね、ほんとなら僕が木村君にガツンと言わなきゃなんだけど、」

「あんたの性格じゃまあ無理よね、気にしない事が一番だと思ふよ。私もあいつ嫌いだし。それにあんたが無理して性格変えるまでもないと思ふよ、まあ少し弱気すぎるところは直した方がいいけどね」

笑いながら話す彼女を見てたら胸がドキツとしてしまった。そんな優しい顔も出来

るんだ、

「何よ人の顔マジマジと見て？」

「あ、ううん。ごめんなんでもないよ、でもこの前の北原さんに言われた小久保君にでも教わつたら？つて言うので僕も野球始めたんだよ」

「え!?そーなの？冗談半分で言ったのに、結構真に受けるタイプなのあんた？」

「僕がボール取れてたら勝てた試合だったかもだし何か運動したいと思つてたからいきつけになったよありがと」

「あんた結構負けず嫌いだったのね、いい性格してんじゃん、それと！北原さんつてのやめて他人みたいで嫌だから。仲良い子は私のこと静つて呼んでるから」

「わかった、これからは静つて呼ぶね。僕も静の負けず嫌いなどこの性格とか真似したいと思つたんだもん、恥ずかしいけど1人活躍してる静がほんとかっこよかったんだもん」

「別にあんたに褒められても嬉しくないわよ、まあ素直に受け取っとくわありがと、じゃあこんどキャッチボールでもしようよ、私、ソフトボールやつてるんだ」

「だからあんなにドッジボール上手だったんだ。うん！こちらこそお願いします」

それから静とは気付けばクラス、学校でも一番の友達になり俺は静に憧れるようになった、男の子にも負けない運動神経やはつきり言える強い心、俺が今野球をしているのも静がいなかったら有り得なかったしね。そして気付けば憧れだけじゃなく静の事が好きだった気付いた。性格はもちろん外見も可愛くてほんとに夢中になっていたレベルで静以外の女の子には目もくれなかった。

姉妹喧嘩？

じりりりりり

ああ、もう朝なのか。学校行く準備しなくちゃ、昨日ほとんど寝れなかつたわ静とのキスの感触が残つてたせいで悶々としちゃつたよ、

「純一、もうそろそろ飯できるよ起きて。あれもう起きてんじやん珍しい」

「あー今起きたとこだよ、ここんとこずつと菜華ちゃんに起こしてもらつてからいい加減自分で起きないとつてね」

「まあ菜華はあんな性格だし純一の事好きだからくつつきに行つてるんでしようよ。で、純一聞いていい?」

「懐かれてるなら嬉しいわ。ん?どうした?」

「なんでズボンにテント張つてるのか聞いていいかしら、菜華に懐かれて嬉しい、それで昨日のお風呂でのあの子の裸でも思い出してたのかしら?」

しまった!!いや女子は知らないだろうけど男子には朝起きたばつつかの時とか生理現象で立つちやうもんなんだけど、

「いやいやいや違う違う! 静は女だから知らないけど男は朝起きたばつつかの時生理現象

で立つちやうもんなんだって！」

「ソーナンダー」

「ちよつと静さん？なんでニコニコしながら近付いて来るんですか？」

「いやあなんか大変そうだからテント治してあげようかなって」

上目遣いで言ってくる静。

「ちよつとまって！そういうのはまだ早いと思うし、それにこんな勢いみたいで」

「は？何勘違いしてんのか知らないけど、そい！」

「うっ！、、、」

「ちよ！純一！あれ、強く蹴りすぎたかな、、、菜華が純一がこれやれば喜ぶって言うてたからやったのに、、、ちよつとごめん大丈夫!？」

薄れゆく意識の中で菜華ちゃんに仕返ししてやると強く胸に刻んでいた、、、
二日連続で静に玉を蹴りあげられて俺は気絶してしまった。

「ちよつと純一起きて！ねえってば！」

「あ、あれ静？朝だから起こしに来てくれたの？」

「あ、そ、そーなのよなんでかこんな所で寝てたから大丈夫かなって、、、」

「ちげーだろ静が俺の息子蹴り上げたからだろ!!」

「なんだ覚えてんじゃん」

「んで静さん何か言うことあるんじゃないんですか?」

「朝の生理現象は知ってました。それに漬け込んでやるようにって妹から言われて勢いで蹴り飛ばしました誠に申し訳ございません」

「なんすかその定型文、、つてか菜華ちゃんなんて言つてたの、、珍しくさつきから姿見えなわけ」

「言われた言葉そのまま言うけど昨日寝る時の話ね」

「そういえばじゅんにいって朝弱いでしょ? 有効的な起こし方あるんだけど聞きたくない? それにそれしてあげるとじゅんにいすんごい喜ぶの」

「あんたそんなこと言つて変なことさせるつもりじゃないでしょうね」

「酷いなあ彼氏に喜んでもらえたら彼女としても嬉しいでしょ」

「否定はしないけど、じゃあどんな起こし方よ」

「とりあえず朝起きたらね、じゅんにいのあれが元気になつてるわけなんですよ色々あつて」

「やめた、あんたの話真面目に聞こうとした私が馬鹿だったわ、、」

「何勘違いしてるかわかんないけど扱けとも舐めろとも言つてないよおねえ」

『んな!? あんたほんと最近脳のブレーキ壊れてんじゃないの今日だつていきなり純一とお風呂はいってるしどうしちゃったの病院行く!?』

『そこまて言わなくても、まあともかくね、知ってるとは思うけど小学生からのおねえの長い調教によりじゅんにいは根つからのDMになつてるわけですよお姉さん』

『ちよつと待つて。わたしがいつあいつを調教したつて言うのよ!? まああいつがそつちのけあるのはタカからあいつはエムだからつて聞いてたから知つてるけど』

『自覚なかつたんだおねえ、私とじゅんにいが初めてあつた小学5年生の頃、ええと私が小学3年の時かな、おねえとじゅんにいがキャッチボールしててその時のやり取り見てて確信したの、あ、この人やべえつて』

『ごめん全然覚えてないわ、なんかやりとりあつたつて? それに私の彼氏やべえ呼ばわりはやめなさい』

『だつてちよつと体から離れたとこに投げるとしつかり投げてよ! とかほんと下手くそね糞虫とかゴミとか暴言吐きまくつてたのにあの時のじゅんにいね、笑つてたの、それにたまにおねえが少しは上手くなつたじゅんとか言つた時の笑顔とかマジで嬉しそうにしてたからその時から好きなんだなあとも思つてた』

『まあ確かに何言つても動じないやつだなとは思つてたけど、それは本人の口から聞いたわずつと好きだつたつて』

『お熱いようでも何よりです、まあ話し戻すけど明日の朝起きたら間違ひなくじゅんにいのじゅんにいがじゅんにいになつてゐるからそこで何かしら屁理屈言つて蹴つてあげて、そしたらじゅんにいは喜ぶし眠気覚めるしでいい感じですよ』

『いやあやめといた方がいいと思ふんだけど、流石の私でも彼氏が蹴られて喜ぶとこ見たくないよ、』

『私にかりあるよねーおねえ。今日じゅんにいの話聞いて元気づけてあげたの誰だっけ』

『つたくわかつたわよ明日だけだからね』

『やったーこれでじゅんにいも喜ぶし仲も深まるしワインワイン』

「つて感じなわけよ」

「菜華ちゃん、おーい菜華ちゃんどーせどつかから覗いてるんでしょ、出てこなかつたら誰もいない北原家に強引に帰らせるよ」

そう言つた瞬間リビングのドアの横からひっそり菜華ちゃんが顔を出した。

「お、おはよおじゅんにい、おねえ。どうしたの怖い顔して」

「菜華（ちゃん）」

「え、なんで2人して無言で近付いてくるのかな?かな?あの、ちよつとやめて!なんで無言で私の事縛つてんの!?そういうの好きなのじゅんにいだけで私にそういう癖ない

「ただけど！ちよつとおねえ！いや、ほんとすみませんでした！ごめんさい！」

無言で俺達は近くにあつた防犯用のロープで菜華ちゃんを縛つた。決してやましい思いでしたわけではないです。ちよつと縛つてんの楽しくなつたとかじゃないです、それにね？静もいるしね？うん。

「さて、菜華？言い残す事はあるかしら？」

「おねえ目が怖いよ私何もしてないのに！」

泣きそうな顔で菜華ちゃんが抗議する。なんだか可哀想になつてきた。

「そのアホには通じても私の目がごまかせるわけないでしょ、あんたの演技はお見通し」

「まあばれますよね、んで昨日言ったこと実行してくれたんだねおねえ、じゅんにいも喜んでたでしょ？」

「喜ぶどころか痛みのみあまり意識飛んだわ、静、菜華ちゃんどうしよつか」

「そーねえ、純一、菜華の足抑えてて、足だけでも暴れられたらやつかい」

「ういつす、菜華ちゃん失礼するよ」

「やーだー！じゅんにいがセクハラしてくるう！」

「昨日全部見てるし自分から胸押し付けできた人に言われても説得力が、」

「さてと、菜華、私の気が済むまでお仕置きしてあげる」

「え、ちょっと待っておねえ！ ってアハハハやめてくすぐったいって、ほんとやめてん、アハハアハハちよ、じゆんにいもはなしてえ！」

、、、

「はあスツキリした、純一、もう離していいわよ」

「お、おう」

5分ぐらいかな、ずっと菜華ちゃんをくすぐり続けていた。途中から次第にエツチな声になってたなんて思っていないよ、ほんと思っていないから。

「はあ、はあ、おねえよくもやってくれたね、、、」

「あんたが先に仕掛けてきたんでしょーが。これに懲りたら金輪際馬鹿なこと言わない事ね」

「うう、、、わかったよお」

「じゃあ私は朝練だから行くわ」

「行つてらっしやい」

「あーじゆんに聞いて!! 昨日おねえがキスした後何回も唇に手置いてたんだよ!!」

「菜華!! そんなことしてないわよ!」

「見ちゃったもんねー。アレ朝練じゃないのおねえ? 早く行かなきゃ間に合わないよ?」

「あんた帰ってきたら覚えてなさいよ、」

「べーっだ」

なんていうかこの姉妹ほんと仲良いな、俺もそろそろ学校行く準備しよ。

HR前にて

俺は早々に支度をして学校に着いていた。

今日の放課後を久々に部活があつて夏の大会の背番号が配られるので大事な日でもある。俺達2年はまだ来年があるからいいが先輩達は負けたら終わりのデンジャラスだ。今年こそは甲子園に行きたい。神奈川は激戦区だけど俺達だつてこの夏までにくさん練習してきたし絶対大丈夫！春の大会でベスト8にも残ったからシード権獲得出来たし絶対行つてやる。

教室に行くと昨日仲良くなつた五十嵐早苗に声をかけられた

「純一君RINE見てないでしょ!?!」

「あ、ごめん早苗ちゃん携帯全然見てなくて、、、」

「もーちゃんと昨日帰り際言つたのにい、まあそんなことだと思つてたよ、まあ後で返信でもしてよ」

「ほいほい」

えーつとRINEは、、、つて未読が10件もあるじゃん、タカからは明日背番号楽し

みだね。とええ、まあいいや後で見えなかつたって言お。後は、、ゆかりさん!?あの人からまだ連絡来ると思わなかつた、今日の練習メニューはポジション別2チームに別れての紅白戦だから最後監督にアピールするチャンスだよ!と。なんであんな事があつてこんな気軽にRINE送れんだよすげーな、、んで早苗ちゃんからは

『赤星の名前教えてあげるよ!本人には内緒だからね、あの子の下の名前愛空(アキラ)って言うのよ。本人はどうもコンプレックス持つててね、私は可愛くていいと思うんだけど、これ内緒だからね(、?、?)』

なるほど、俺も別に最近難しい漢字の読み方とかも増えてきたしなんとも思わなけれど本人が嫌ならだまつとこ。

「ねえ純一?」

今度は隣の席の静に声をかけられた。

「んあ?どした?」

「私が知らない間に随分早苗ちゃんと仲良くなつたみたいじゃない、下の名前なんかで呼んじやつて」

「おいおい、勘違いすんなよ昨日言つたら?お前らが祝勝会やつてる間にこつちも少数とは言え反省会みたいなのしてたつて、その時苗字呼びは好きじゃないから名前にしてつて言われたんだよ」

「ふーん、まあいいけど。まああんたは私に夢中だもんね」

小声とはいえさうつとんでもないことを言われ少し焦ってしまった。

「んな!? べ、別に夢中になんてなってねーよ」

「ふふ、ほんとあんたわかりやすいわね。嘘つくの下手くそだし浮気とかしたらすぐわかるね」

「心配しなくてもそんなことしねーよ」

「まあヘタレの極みみたいなのやつだもんねあんた」

流石にちよつとだけ今のはカチンときた。俺はへたれじゃなくて相手を大事にした
いからつてことをちやんと言っておこう。それにキスだっただしへたれじゃな
いでしょ、、、それでヘタレって言われるつてことは静はそれ以上を求めてるつてこと
??? って何考えてんだよ俺、、、

「おい、それは肯定しないぞ、俺はヘタレじゃない」

「ほお? 言うようになったじゃない、あんたから反論なんて珍しいこともあるものね」

「そりゃ違う時ぐらい言うわ、、、俺をなんだと思つてんすか、、、」

「え? 彼氏だけど?」

やばいっす、、、今のキョトンとした顔で言われて完全にハート撃ち抜かれたわ、、、
そつか彼氏だもん俺、思わず口元がにやけてしまうのがわかった。

「なにニヤニヤしてんのよ気持ち悪い」

「いやそうだよな静も俺の彼女なんだよなと思って」

「全く、まあまあ恥ずいわね直接言われると」

「ははは」

「ええ?!?静と純一君付き合ってたの?!?いつからいつから?!?」

「え?!?」

静と俺は近付いて聞き耳立ててる人物に気付かなかった。まだ時刻は8:10でHRまでは30分と時間があることもあり教室の中にはほんの数人しかおらず俺の席周辺には人はいなかったはずだったんだけど。

「いやあ静もようやく素直になったんだね!ねえどっちから告つたの?!?やっぱり純一君?!?」

そこにいたのは静と俺の中学からの友人八神祐希だった。

「な、なんであんたがここにいるのよ?!?」

「いやあ静朝練終わってすぐ着替えに行っちゃったから放課後のメニュー聞いてないだろうと思って教えに来ただけけど仲良さげに純一君と話してたから何話してんのかなあ思つて聞き耳立ててたらまあお熱いことで」

「ちよつと祐希他の人には言わないですよ?」

「なんでよ？別に恥ずかしがることじゃないじゃん？栞さんにもうR I N E送っちゃったよ静に春が来ましたって」

「はー!?あの人に言ったらすぐ広まっちゃうじゃない！もおお」

頭をくしゃくしゃとする静、よっぽどバレたくなかったらしい。

「まあ、どんまい？でもなんで隠したがるの？」

「あんたが言っただけでしょうが！いや、なんていうか私達ってその傍から見たら飼いかたと飼い主とか言われてたんでしょ、、、？そんなんが付き合ってたとかあったらなんか私が照れ隠しで純一にそういう態度取ってたとか言われそうだしさあ、、、それにこいつこゝんなんですれなりにモテるのよね、幼馴染だから好きな人聞いてきたとか何度言われたことか」

「なるほどねえ、まあ静らしい理由つちや理由だね、まあバレたらバレたでしゃーないしゃーない！」

「あんたがそれを言うなつての！」…

「ちよつと待つて前半部分は俺も聞いてたけど後半部分初耳だぞ、それに静が俺に好きな人聞いてきたのってゆかりさんの件の時ぐらいだったじゃん」

「はあ相変わらず鈍いな純一君わあ、そんなの静が敵に塩を送るようなことするわけないじゃん」

「祐希余計なこと言わないで、まあだいたいあつてるからそういう事よ」
少し頬を赤らめながら静が八神さんに続く。

そういう表情毎回思うけどずるいわ。ほんと可愛いんだもん。照れてる静とか今までほとんど見たことなかったし。

「ちよつと純一何ニヤニヤしてんのは気持ち悪い」

「別にニヤニヤなんてしてねーよ、そろそろ皆来る時間だし大人しくしとこーぜ」

「そーね、祐希もそろそろ教室戻りなよ」

「えー!? 酷い、アツアツの二人もつと眺めてたかったのに」

ニヤニヤしながら言う八神さん。

「部活の時泣かすから祐希。覚えといて」

「キヤー純一君静がいじめるう」

「ちよ、ちよつと八神さん!?!」

静を挑発するように八神さんは俺の腕に抱きついてきた。流石にまずいんじゃない、静から何か言うのかと思つたその時思いもよらぬ人が飛び込んできた。

「ちよつと祐希ちゃん!?! 何してんの純一君に!?!」

「「え?」」

3人揃つて思わぬ人物の登場に間拔けな声を出してしまった。そこにいたのは長い

黒髪をいつもポニーテールにまとめている五十嵐早苗が顔を真っ赤にして立っていた。

「早苗じゃん！めちやくちや久しぶり！去年話した以来じゃない？」

「そ、そーだけど今はそんなことよりなんで祐希ちゃんが純一君の腕に抱きついてるのか説明して欲しいんだけど!？」

「んーいや、なんとなく？つてか早苗って純一君とそんな仲良かったっけ？名前呼びする仲だとは思わなかったよ」

八神さんは俺と静の顔をちらつとみて返答していた。流石に俺と静が付き合つててからかい半分に抱きついたとは言えなかったんだろう、でも言い訳が苦しすぎる、、

「いいからはな、れて！昨日から仲良くなったんだよ、祐希ちゃんこそ純一君と仲良かったの?」

強引に俺の腕に抱きついてる八神さんを引き離して言う早苗ちゃん。

「私と静と純一君同じ中学だったんだよ。中学時からの付き合いだからそれなりに仲良くさせて貰ってるよ」

「あーそーだったんだ、、じゃあ私席戻るね！祐希ちゃんも早くクラス戻りなよ！」

「お、おう、静、早苗ってあんなにはきはき喋る子だったっけ？」

「なんか昨日からこいつとなんかあってからか元気なのよね。純一？心当たりは」
「ないです」

そんな怖い顔であるか？ っって言われてあるなんて言えねーよ。

「ならいいけど、それじゃ祐希また部活でね」

「うん」

五十嵐早苗か、まあ私達両思いだしあいつに限って浮気なんかしないだろうけど間違ひなく純一の事好きだよね早苗ちゃん、

五十嵐早苗の初恋

五十嵐早苗 高校2年生 身長165cm 体重??? 胸はbカップ。普段は長い黒髪をポニーテールにまとめている。家族構成は父母弟の4人家族。お父さんがソフトボールチームの監督をしていることもあり小学校入学と同時にソフトボールチームに参加。中学校では公立ながらもチームをバッテリーの赤星と引つ張り県大会決勝まで進めた成績を持つ。

試合前日赤星と共に小林先生に職員室に呼び出された。

「早苗なんかやらかしたの？」

「いや、赤星こそなんかやった？」

「ううん、職員室に呼ばれるようなことしてないんだけどなあ、なんか手伝って系かな、私達放課後大抵暇してるし」

「あーそれはある、まあいや終わったらみつちゃんに飲み物奢ってもらおうよ」

「それはあり！」

コンコンコン。

「失礼します。小林先生います？赤星と五十嵐です」

「おー待ってたよ、こっちきてこっち」

小林先生の職員室の席は一番奥にあり周りの先生の目が少しだけ気になってしまう。

「お待たせしました」

「大丈夫よー、それで呼び出した要件なんだけどね、明日3・4時間目に体育があるじゃない？聞いた話だと隣のクラスはその2時間使って違うことするらしいからグラウンドが1面使えるみたいでさ」

「あーはい、それで私達に何を？」

「まあまあ慌てなさんな、私はソフトボールの紅白戦をしようかと思ってるの、それで貴方達にaチームのバッテリーをしてもらおうかと思ってるね。経歴見たら貴方達中学の時バッテリー組んでたらしいじゃない」

「別に構いませんけどそれなりにしつかりソフトボールやってきたつもりですし試合にならなくなりませんか？打てるうちのクラス野球部の小久保君と天谷君ぐらいじゃないですか？」

「ふふん、そういうと思ったわ、これを見なさい」

そこには過去に北原静がソフトボールの全国大会で活躍したと言う記事があった。

「え!? 静ってバスケット部だったよね?」

「うん、びつくり、先生つまりbは静、一姫バッテリー、aは赤星、五十嵐ってことですね。面白そう」

「なら話はOKね! メンバーは明日発表するから! それじゃ解散!」

「はいさよなら先生」

「はいさよなら」

「投げるの久々じゃない? 大丈夫?」

「大丈夫よ、弟の練習にも付き合ってるし問題ないよ」

「なら完封だね、それじゃまた明日!」

「うん! 任せといて! じゃね」

久々にマウンド立つんだ、もう投げないと思ってたけどちよつと楽しみかも! 出来れば小久保君味方がいいな、なんとたつて2年ながら野球部でクリーンナップだからね。天谷君はピッチャーだしなんとかかなりそうな気がする。

「へっくしゅ!」

「ちよつとじゆんにい風邪? やめてよねー」

「菜華ちゃん違うよ、多分誰かが俺の噂してるわ」

「自意識過剰とか気持ち悪い」

「静さん、、、」

試合当日。メンバーを見た私は正直打線に1点取れるの?これって思った。

1番 ショート佐々木(サッカー部主将)

2番 ライト 木下(帰宅部)

3番 センター 天谷

4番 ファースト 橘(柔道部)

5番 レフト 坂下(帰宅部)

6番 ピッチャー 五十嵐(帰宅部)

7番 セカンド 桜井(文芸部)

8番 キャッチャー 赤星(料理部)

9番 サード 風見（バスケット部マネージャー）

なんで赤星が下位打線なの?!しかも天谷君の前にランナーためられる要素あるかなこれ、佐々木君はよくわかんないけど木下さんってガチガチの運動出来ない子じゃん、これ私が出て赤星に返してもらうしかないよね、

それに向こうの打線は1・2・4で経験者だし、しかも3番の人には全力投球は禁止。全力投球しているのはお互い経験者にものみ。きついなあ、

「どう思う赤星？」

「やる前からきついとかあんま言いたくないけどきついね。なんとか天谷君にやつてもらうしかないよ」

「そーだね」

「はいーい!じゃあ並んで!!これよりaチーム対bチームの掃除をかけた紅白戦を始めます!!7イニング制で同点の際は代表によるジャンケンになります!」

小林先生の掛け声とともに両チームの選手が集まる。

「おっしやあ!お前ら勝とうぜー!!!」

「うえーい!!」

小久保君の言葉でbチームが奮起する。こういう時クラスのムードメーカーは助かるなあつて思う、こつちの野球部の方は、ぼーつとしてるだけかよ！何か言つてよまとまんないよ！

「ねえ、天谷もほら掛け声！」

「あ、ああ俺かごめん」

何俺かつて、さつきキャプテンつて言われてたじゃん、

「よっしゃあ！全力でaチーム潰してやろうぜ!!!」

「っしやー!!!」

しまんないなあ、こんな調子で大丈夫なのかな、早苗の不安は的中する。1番の佐々木君は打たされてショートゴロ。2番の木下さんは三振。「どんまいだよ木下！俺が打つから大丈夫！気にすんな！」その時の天谷君の表情が普段見たことなかったから少しドキツとしちやつたな。よく得意な種目になると調子乗る人いるけど天谷君は木下さんに対してすんごい優しい声掛けてたな。ああいう声かけられる人は少ないから貴重よね。そして3番の天谷君は、体感140キロのストレートに100キロのチェンジアップを投げられて三振。あんなんチートやつて思ってしまった。コントロール

も良くついている隙があるのかなって感じ、、

一方の私の立ち上がりは一番気を付けなきゃいけないし一番打席に立つ静を変化球を使つて見事三振に抑えた。これだよこれ！この高揚感！やつぱりマウンドは面白いや！その後の打者も2つ内野ゴロで打ち取り初回は0—0で始まった。

2回表の攻撃は4番からだつたが4、5番ともあつさり内野ゴロと内野フライでツ—アウトとなる。

「6番ピッチャー五十嵐さん！」

このコールも久しぶりだなあ。最初は恥ずかしかったな、、

「五十嵐！ストレートかチェンジアップどつちかに絞んなきゃきついで！球速だけじゃなくて手元で伸びてくるから！」

ベンチの天谷君から声がかかる。やつとキャプテンらしく声出てきたじゃない。

「はいよ！任せといて！」

ピッチャーの静を見つめる。こんな才能の塊に勝てるのだろうか？いや、勝てるか？じゃない勝つんだ！

第一球を投げた！

「ボール！」

うわ、ほんとに手元でもうひと伸びしてくるじゃん、こんな球投げるピッチャー私知らないよ、ううん！弱気になっちゃダメよ早苗！

第2球を投げた！

きた！チェンジアップ!!私の非力なパワーじゃ外野ま

で飛ぶかわからないストレート待つよりチェンジアップミートして外野の前に落とす方が簡単！

「もらっつ、な!？」

かきつ！情けない打球音を残し打球はフラフラとキャッチャー頭上へと上がって冴島が捕球する。キャッチャーフライに打ち取られた、

まさかチェンジアップに見せかけてスローボール投げてるなんて、ど真ん中から落ちて低めいっぱいに決まるぐらいの落差あるやつ見せられてるからど真ん中なんか待てるわけないじゃん、やられた、

2回の裏は天谷君の小久保君への対策もあり1人は塁に出してしまっても0点に抑え2回終わって0-0。しかし3回表の攻撃は赤星に回るものの三振に倒れてしまう。他の打者がコーナーつく配球になんとかなるわけもなく回は裏へ。

「1番ピッチャー北原さん」

絶対打たせない。この気持ちだけで充分だよね赤星。サインは、ボールからストライクになるスライダーね。私もそれでいいと思う。普通の打者なら仰げ反ってストラ

イクの判定に不服を持った打者も少なくない。それぐらいそのコースは自信がある。だから仰け反ってストライク判定に驚いた顔見せてよね全国レベルさん。

私はプレートに足をかけ、全身全霊の一投をした。

よし！最高のとこ！ホームベースの角にギリギリ重なるとこ！

え？

なんで踏み込んでるの、、考えられない。そのコース初見で踏み込んで来る人なんて今の今までいなかったのに、、やめて！お願い打たないで！そこ打たれら私、、

カキーン!!!!

嘘、、でしよ？

無情にも打球はレフトを守る坂下の30メートル後ろにぼつりと落ちた。ホームランとなる。

bチームから歓声があがりaチームからは諦めの声が上がっていた。

私のせいで、私が慢心してストライクから入ったからだ、私なんか所詮県大会レベルなのに調子乗った罰だ、

「早苗！ちよつと早苗聞いてる!?!」

キャッチャーの赤星がマウンドに來ていることにも気が付かないぐらい放心状態だった。

「あ、ごめんアクア」

「は?」

「いったあい！何すんのよ!」

「あんたが私の氣にしているとこ触れたからでしょ!次言ったら乳首削ぎ落とすから!とにかく今のは私の配球ミスだから氣にしないで次の一姫抑えるよ」

「うん、今のは打った静褒めるしかないね」

「そいこと、じゃあ頼んだよ」

私はもう一度赤星のサインを見つめる。初球外に逃げるスライダー。内野ゴロ打たせたいのねわかった。

第一球を投げる!

しまった!? 指に上手く引つかからなくてボールは真ん中高め、つまり絶好球になってしまったのだ。

カキーン!

打球はセンターの前に落ちるかというライナー。

「天谷!!」

それは天谷君はスライディングしながらゴロゴロと地面を転がってダイビングキャッチ。

思わず見とれてしまった、、今の上がった瞬間に突っ込んでいなかったらもちろんノーバンなんかじゃ取れなかったし怪我をしないように受け身を取っていた。

ベンチに戻ると私は自然に足を天谷君の方に向けていた。

「ごめん天谷助かったよ、、って膝擦りむいてるじゃん! ちょっとまってて!」

「大丈夫だよ五十嵐さんこのぐらい」

「だめだよベンチ座ってて!」

「お、おう」

私はすぐさま保健室まで走って救急箱を取りに行った。あんなプレーをしてもらったならこのぐらいのことは当たり前だ。

私は中学の頃選択科目で保健を取っていたから包帯の巻き方などはほとんどマスターしている。

「はい！これでよし！ホント助かったよありがとね天谷」

「ううん、俺も打ってないでごめん、五十嵐さんめちやくちやいい投球してんに申し訳ない」

「え？いい投球？そ、そーかな」

小さい頃からそれなりの成績を残してきても父親は厳しく褒めてくれることがなかったから何か新鮮な気持ちだった。

「そーだよ！次は静の球打ってみせるから、引き続きお願いね」

「う、うん頑張る」

なんだろうこの気持ち、、、ドキドキして恥ずかしいようななんていうか、、、でも分かることは絶対静には負けたくないって思える。絶対勝とうね天谷君。

その頃純一は故意死球を受けて早苗の気持ちなどを知る由もなく、、、

その後試合はお互い得点を取れずロースコアの展開になった。そして最終回1アウトランナー2塁で天谷君。

「天谷打って!!」

「純一絶対打って帰って来いよ!!」

1 打同点、一発出れば逆転の場面で a チームからは大歓声が飛ぶ。

しかし天谷君は思いも取らぬ打ち取られ方をしたのだった。

いきなり静が告白まがいの事を言つて a. b チームを巻き込む歓声が飛んでいり、いだに小林先生がプレイをかけてそれに気付かず見逃し三振。しかも最後余計にあんなのことなんか好きになるわけないじゃん。これを聞いた瞬間私は胸の奥が熱くなつた。

なんでそんな事言うの？

天谷君の悪口なんて言わないで。

絶対に許さない。

気が付けば私は静がのいるマウンドに向かっていたのを赤星に止められた。

「今何しようとした早苗」

「わかんない、いきなりかーって熱くなってそれで、悔しくて」

「その涙は早く拭いちゃいな、天谷君に見せられないでしょそんな顔」

「うん、ごめん赤星」

私と赤星は笑顔とは言わなくとも良い顔で天谷君を迎え入れられたと思う、でも肝心の天谷君の顔色が真っ青で心配だった。

私と赤星は他の人と被らないように女子更衣室に入った。なんとなく他の人に顔をあわせたくなかったのだ。敗戦投手にもなってるし励ましの声なんて聞きたくなかった。それに今静に会ったら変なことを口走りそうな気がしてならなかった。

「あー結局静から誰一人として打てなかったねえ」

「赤星惜しかったんだけどねストレート狙いで初球捕らえたい当たり小久保君の正面だったからね」

「まあねえ、後早苗？」

「ん？なに？」

「天谷に惚れたろ？」

「へ？」

「へ？じゃないよ、まさか早苗が天谷をねえ、ついに初恋じゃん、中学の頃とか告白結構

されてたけど全部断ってたし恋よりソフト!だったしね」

「いやいや、何言ってるの!?!私が天谷を好き!?!」

「あんた気付いてないかもだけどあのセンターライナー捕って貰ったあたりが天谷の顔見る度に乙女みたいな顔してたよ、それに立ち直れたのも天谷と話してたからでしょ?」

「まあ確かに天谷の一言なかったらあのままズルズルいつてたかも、、、確かに傷の治療してた時初めて男の子にドキドキしたかも、、、」

「ほらね、そうと決まれば早くアタックかけな!以外に人気あるんだからね天谷」

「え!?!そうなの!?!」

「静とのやり取り見て何しても許されそうとか甘やかしてくれそうとかいう不純な理由だけどね、、、」

「ちよつとわかるかも、そっかあ初恋かあ、えへへ」

「何にやけてんのお気持ち悪い」

「酷いよ赤星、ほんとこんな気持ち初めてなんだから仕方ないでしょ!」

「まあ早く掃除しに教室行こ」

「もー!」

私と赤星はこうして女子更衣室から教室に向かった。

教室に戻ると天谷君が一人黄昏ていた。やっぱり何かがおかしい、それに三振した直後より顔色死んでる、、もしかしてただけど聞いてみよ。

「天谷大丈夫？さつきから顔死んでるけど」

「あー大丈夫だよごめんね心配かけて」

「ううん。つてか天谷がシヨック受けてるのつて試合の結果うんぬんより静の言葉なんじゃないの？三振した時はうわあやられたみたいな顔してたけど静が好きにならないつて言った瞬間いつきに顔色悪くなったのわかったからさ」

それをいった瞬間天谷君の表情が変わった。

「ああ、うんあつてる。そんなに顔に出てたのね俺、、」

「もしかして静の事好きなの？」

「んーまあ別に隠すことでもないしそーだよ」

ええ？

天谷君が静の事を好き？

いきなり私の初恋終わったんですけど!!!

でも世の中には略奪愛とかn t なんとかって赤星が言ってた気がするし諦めるのはまだだよね! 私はとにかくアピールしなきゃ!

「そーなんだ、、あーなんだあ好きな人いたんだあ。ここだけの話だけど結構天谷うちの女子から人気あるんだよ、まあ理由がどんなこと言っても許されそうとか甘やかしてくれそうとかまあまあ酷いけどね、多分静と天谷のやり取り見ててそう感じたんだと思うけどね」

笑いながら話す五十嵐さん。

「ひでえなおい、、なんか喜んでいいのか複雑だわそれ、、」

「まあそうだよね、でも私はそうは思わないよ、一生懸命に野球することか他人に気を使ってくれてたりするでしょ? ほら? 今日だって木下さんつらそうにしてて声掛けてあげてたじゃん? 私はそういうところ好きだよ」

何気なく好きだよって言うのがこんなに恥ずかしいだなんて思わなかった、、

天谷君の表情は、、?

顔赤くして照れてる、ふふふ可愛い。まだ諦めるのはやっぱり早いよね!

「お、おうありがとな励ましてくれて」

「ううん、私で良ければいつでも相談乗ってあげるから！後五十嵐さんはやめてよ、他人行儀つばいから早苗って呼んで。私も純一君って呼ぶから」

「はいよ、ありがとな早苗」

「う、うん！じゃあまた放課後掃除の時にね！」

早苗ちゃん早苗ちゃん、今言われた言葉を頭の中でリピートする。その言葉を思い出すだけで顔が熱くなるのがわかる。

見てなさいよ北原静！貴方なんか純一君は渡さないんだから!!!

疑惑

純一はこの日の授業を何事なく終え部室にタカと向かっていた。

「なあ？春の大会から背番号の変更あると思うか？」

「無いでしょ、変える要素がないもん」

「だよなあ、まあ気楽でいいや」

部室までの道をタカと歩いているとゆかりさんにあつた。

「おはようございませす」

タカと俺は揃って先輩のゆかりさんに挨拶をする。

「おはよー小久保君、純一君。もうそろ先生来ると思うから待機してて。後今日は練習

ないってさ」

「え、ないんですか？」

「なんだかサッカー部が明日試合だから一面使わせてって頭下げてきたらしいよ。だから自主練にするみたい」

「了解です」

「うん、じゃあ後でね」

「はあ、なんか無駄に緊張したわ、」

「なんでタカが緊張すんだよ普通俺だろ」

「まあそうだけどなんか起こる気がしてならんかった」

「流石にゆかりさんも懲りたんだろ」

「だどいいけどね」

俺達は部室に着いた。

「おはようございます」

「おーおはよ、そういうや練習なくなつたつて聞いたか？」

「はい、そこでゆかりさんに会つて聞きました」

「ならいいんだ、じゃあ先生来るまで各自待機で」

「はい」

それから5分もするとゆかりさんと一緒に野村先生が現れた。

「おはようございますー！」

部長「おはようございます!!」

キャプテンの高橋先輩に続いて俺達は監督に頭を下げた。

「おう、おはよ。それじゃ早速だが夏の県大会のベンチ入りメンバーを発表させてもらう。ベンチ入り出来ないメンバーももちろん出てくるがスタンドから全力で応援してやってくれ。頼んだぞ」

部員メンバー全員が緊張した顔つきに変わる。それはそうだ、この夏のために百合山高校野球部は練習に練習を重ねてきた。部員総数は35人と少ないが公立ながらそれなりの実力は持っていると自負している。春の大会ではベスト4という大きな結果を出すことも出来た。ちなみに学年分けは3年生5人、2年生19人、1年生11人となる。

「じゃあまず背番号1、相川勇太」

「はい」

パチパチパチと拍手が湧く。百合山高校では背番号を貰った選手を賞賛、鼓舞する意味でこの行いをする。

ギロつと俺の方を相川が睨みつけてきた。まだゆかりさんの事根に持ってんのかよあいつしつけーな。つたくめんどくさいぜほんと。

「じゃあ次、背番号2番館山」

「え、は、はい！」

部内がザワついたのが空気で伝わってきた。それもそうだ、1年の秋の大会からずつ

とクリーンナップでスタメンはつてきていきなりこれはおかしい。何故こんなことになってるかなんてすぐに分かる。エースの相川勇太だ。自分と合わない捕手を絶対に使わないという理不尽極まりない事を平気でこの男はやってのける。

「次、背番号3 小久保」

「はい」

おいおいタカをファーストで使うつもりかよこいつ。正直先輩とは言え館山さんは貧打だ。打率も公式戦だと0.180しかないし正直期待出来ない。その点タカは0.410と高いアベレージを持っている。そしてファーストのスタメンだった3年生の畠山さんは0.238と打率は低いながら春の大会では5本のHRを打っている。そんなに相川だけが大事なのかよ。

そして9番まで順当に名前が呼ばれ次から控えの枠の番号が発表される。

「背番号10 畠山」

「はい」

次だ。高校野球では基本的に11番に2番手のピッチャーを入れる。来年こそは1を1つ消してやるからな。

「背番号11 林」

「はい」

あれえ???

思わず力が抜けてしまった。てつきり春と同じ背番号だと思ったのに、

それから12〜19まで純一の名前が上がることはなかった。

純一に聞こえるぐらいに部内の雰囲気は危うかった。俺の事をいつも面倒を見てくれた高橋キャプテンは大丈夫だよとけつを叩いてくれて励ましてくれた、そうだな、まさか選ばれないなんてことは、

「じゃあ次でラストになる、背番号20大和」

「え？天谷さんじゃ、？」

「俺は大和と言ったんだぞ、早く受け取りに来い」

「は、はい、」

後輩の大和が申し訳なさそうな顔をして背番号を貰う姿が後ろからも見てわかった。

そして、

「ふざけんなよ!!なんで純一の背番号ねーんだよ!頭湧いてんじやねーのか!」
「タカ落ち着けて」

タカの罵声を同級生の清水が宥める。

「そうですねよ!監督こんなのおかしいです。俺ら3年は負けたら終わりなんですよ?それなのに2番手エースの天谷入れないとか考えられません!理由を納得のできるように教えてもらえないなら自分も背番号なんていりません」

高橋キャプテンもタカに続く。

「監督宜しいでしょうか?自分は相川には実力は落ちますが林に劣っているとは思いませんし春の大会では無失点です。流石に背番号貰えないのは納得いきません」

「そーつすよ!天谷無しで大会勝ち上がるとか無理に決まっています!」

他の部員からも抗議の声が上がった。

みんな、、ありがとう。

「そんなに理由が知りたいかお前ら」

「はい、教えてもらえるまでここを動く気はありません」

「ほんとは公にしたくなかったんだけどな。ご近所さんからな、うちの学校の生徒が喫

煙してゐるって通報が入ってな、写真まできっちり取られてるんだよ。これが誰だかわかるよな？」

そこには制服姿のままタバコを吸う俺の姿があつた。

は？タバコ？全く身に覚えがない。

「監督、自分じゃないです、タバコなんて吸つたことないつす」

「そーつすよ、俺基本的に天谷と学校の行き帰り一緒ですしこいつがそんなことしたとこ見たことないつすよ」

タカが俺の言葉に続く。

「じゃあこの写真はなんなんだよ！てめえのちよつとした軽い気持ちのせいで部員全員が大会出れなくなるとこだったんだぞわかってんのかよ！」

「だから自分じゃないって言ってるじゃないですか！今時写真なんていくらでも加工出来るやないすか」

「おい小久保」

突然相川勇太がタカに周りの人にも聞こえるような声で話し始めた。

「ん？なんだよ今話してる場合じゃないだろ」

「お前は一緒に帰ったりしてるとか言ってたよな？でもここ3日はどーだ？違うだろ？庇ってやりたい気持ちちは俺もわかるけどさ、この事実受け止めてやってくしかねーんじゃないの？」

あーわかった。全部相川が仕組んだことだろこれ。普段1回でもあんな風に優しく喋ったことがあつたか？答えは否。どれだけ自己中心的なやつなんだよ、

「お前ふざげんなよ!!さては仕組んだのてめえだな!!普段は他人の話に興味を示さねーくせに今だけいきなり出てきやがって！」

タカは激昂して相川に詰め寄っていた。流石にこれ以上はまずい、そう感じた俺は

「おいタカやめろ！お前までこのゴミのせいで試合出れなくなるぞ！」

「は？誰がゴミだつて？」

「てめえだよ自己中糞野郎、証拠見つけて絶対背番号貰つてやるからな」

「勝手に言つてろ、証拠ある以上なにもかわらねーよ」

「あの！監督いいですか!？」

「ん？どうした林」

「僕の1ー番、今は保留にしてもらえませんか？正直自分の球じゃ神浜とかの打線抑えられる気がしませんし無実の罪着せられてる可能性も無くはないと思います。天谷さんが言うように今なんて加工とか出来ませしちゃんと言つて証拠があつてからでも遅くはないと思うんです。逆にやつてない証拠があればいいんですよ？」

「ま、まあそうだが。とにかく俺は会議があるから後は勝手に解散してくれ」

あんたはそれでいいのかよ監督。相川さえいればそれでよしじゃねーだろ。

「天谷さん！自分も全力で協力しますので先生に無実つてこと証明しましょうね！」

目をキラキラさせてぴよんぴよん跳ねる林はなんか尻尾を振つて喜ぶ犬を連想してしまつた、林薫。中性的な顔立ちで女子からの人気も高い。後、男子からもマジで告

白されたことが何度かあるとか、まあ確かに一見女の子に見えないこともないけどさ。いや別に林の着替え見た時とかにドキドキはしたりしてないからね？

って誰に何を説明してんだ俺わ、、、

「おう、でもいいのか？俺が出なかつたら薫ちゃん試合出れるんだよ？」

「天谷さんの投球に憧れて入学した僕にそれを言うのは失礼だと思うんですよ」

ぷくつと頬を膨らませて抗議する林。え？なんだって？俺に憧れて入学？

「ちよつと待つて何それ初めて聞いたんだけど」

「去年の秋の大会あったじゃないですか相川さんが調子悪くて打たれた試合、6回ノーアウト満塁をたつた5球で打ち取つてそのまま9回までパーフェクトリリーフはほんとかつこよかつたです、自分もあんな風に投げれたらつて思つてここに入学したんですよ」

笑いながら話す林、つてか面と向かつて言われるとめちやくちや恥ずかしいな。

俺は林の髪をくしゃくしゃにしてちよつと照れを隠した。

「つたくほんとありがとな、今度メシおごつてやるよ。取り敢えず今日のところは大人し

く帰って明日からやろう。タカのプロローも入れてやりたいし。あいつも今回の被害者だからな」

「ほんとですか!? やったー! 了解です! じゃあまた明日連絡しますね! あ、これ自分の R I N E の i d なんで登録したら連絡くださいね!」

「はいよ、じゃあお疲れ」

「お疲れ様です!」

まだ部室には数多くの部員が残っていた。

各自今回の背番号に納得のいつてるものいつてないものがすぐに分かった。俺も取り敢えずタカと畠山先輩と話したい。絶対納得してないしな。実力世界でこんなことされたんじゃない。

「純一君」

部室に戻ろうとしたら後から声をかけられた。

返事をしようとしたら遮られてそのまま声の主が続ける。

「あなたってホモだったの?」

「はい?」

振り向いた先にいた声の主はゆかりさんだった。

「そりゃこんな可愛い私振るわけだよねあーあ静ちゃんもホモって知ったら悲しむだろうなあ」

「俺はホモじゃないですよ、、、ってかキャラ変わってますけどゆかりさん」

「別に純一君は私の裏知ってるわけだし何も遠慮することないじゃない、まあそんな話はいいいとしてホモなの？」

「だから違いますって、ちゃんと女の子が好きですよ、、、」

「ふーん、じゃあお詫びに私の胸もう一回触る？」

「触りません」

「ふふ、高判断ね。まあそんな話はどうでもいいから本題に入るわね」

ホモかどうか本題じゃなかったんかい、、、

「本題とは？」

「さっきの写真よ、あれホントなの？」

疑いの目を向けたゆかりさんが問いかけてくる。

「そんなわけないじゃないですか、喫煙なんてしたことありませんよ」

ゆかりさんははあ、と一息つくど、

「まあそんなことだろうと思っただけ。 ってことは相川か」

「ゆかりさんもそう思います?」

「いや、普通に考えてうちの部で純一君の事敵対してあんな偽装した写真なんて馬鹿みたいな考えるのあいっしかしいでしょ。ほんとキモい」

なんつーかこつちのゆかりさん普段とのギャップがすごすぎるよ、

「やつぱりそう思いますよね、だからなんとかして無実証明したいんですが」

「正直難しいと思う、あの元の写真が見つかるとかじゃなければね、まあ私も手伝ってあげる」

「ほんとですか!?ありがとうございます!」

「ええ、もちろんよ。でも私が貢献したら何か一つ言うこと聞いてもらおうかしら」

不敵な笑みを浮かべて話すゆかりさん。なんていうか、ほんと魔女を連想させるよ今のゆかりさんわ。

「別に構いませんけど付き合っつてとかは無理ですよ」

「ちえー、なんだよ別にいいじゃん、私なら静ちゃんがやってくれないようなことでも

やってあげるのにい。それにまだドーせ告白もしてないんでしょ？」

「いや、それが小林先生のせいで静に好きな人問い詰められることになって告白しちやったんすよ」

「それで振られて林君に乗り換えようとしたと」

「まだその話終わってなかったんすか、、振られてませんよ、付き合うことになりました。あ、この事は二人だけの秘密でお願いします、まだ静に言わないでって言われてるんで」

「なんだあ付き合っちゃったのか、静ちゃん案外素直になれるもんなんだね、あ、最後の言わないでってやつは無理だね。なんで恋敵の言うこと聞かなきゃいけないのかな、かな？」

「ええ、俺からの頼みってことでも願いますよ」

「仕方ないなあ、じゃあ口止め料貰つとくよ」

ゆかりさんは俺の方に顔を近付けると、、

「ちゅっ」

「ちよつとゆかりさん!?! って痛あ!?!」

ゆかりさんは俺の首筋にキスマークと齒形をつけてにやりとした表情で言った。

「静に純一君は私の所有物だってこと知っというて貰わなくちゃね、じゃあまた何かわかったら連絡するから、それじゃね」

「お疲れ様です、、」

どうすんだよこの跡! 静に見つかったら何言われるかわかったもんじゃやない。取り敢えず絆創膏で隠しとこ、、

頼もしい? 仲間と一緒に俺がやってないってことを証明するために動き出した純一だった。

学園の魔女

「はあ、」

純一は帰路に立つと深い溜息をついていた。

「どうしてこーなったんだよ、」

「溜息なんてついてたら幸せ逃げちやうよ純一君」

「ゆかりさん、さっきまた何かあったら連絡するねって言いながらなんで自分と一緒に帰ってるか説明お願いしてもいいですか？ゆかりさんの家逆方向ですよ」

溜息の原因は番号うんぬんではなく先程部室前で別れたはずのゆかりさんが何故か校門前で待っていてそれを見ないふりして帰ろうとしたら腕を掴まれて表の顔の笑顔で「一緒にかえろーよ！」と言われ今に至る。

「あーいう画像って基本ネットから拾うでしょ？ならパソコン借りて一緒に探した方が早いかなくて、私の家パソコンないから純一君の家の借りようかなくて」

「iPhoneありますよね？」

「通信制限で画像見れないからきついので、お願い」

表モードでお願いしてくるゆかりさん。ほんとこの人はころころ態度変わるなあ、

「ちよつとだけですからねー！」

「やったー純一君好きいい！」

うん、普通に腕に抱きついてくるのやめようか。つてか菜華ちゃんと静にRINE送つとかなきゃ、しばらく帰つてこないでつと。これでよし。

しかし、純一が思っていたものとは違う返信が双方ともから帰ってくる。

菜華ちゃんからは『もうおうちー。あー友達とか来るなら私部屋こもってるね』

静からは『あーまじ？私そろそろ家着くんだけど、部屋こもってるから大丈夫じゃない？あ、靴は隠しとく』

普通の友達なら大丈夫なだけど相手が相手なんだよな、

考えてる間に無情にも自宅の前へ、

「お邪魔しまーす、あれ？誰もいない感じかな？」

「両親共働きなんで帰りは夜遅くとかです」

「あーそーなんだ、なら猫被る必要ないか、結構疲れるんだからね学園のアイドルつても、告白も逐一丁寧になきやだし先生からも何かと頼まれるしでさ、まああなたの担任の小林には私の本性ハナから見透かされてたみたいでびっくりしたよ」

「ほんつと裏は言いたい放題つすね、もう普通に学校でも表裏なくしちゃつてみては

「？」

「はあ？」

何言つてんだこいつとばかりの呆れた顔でこちらを見てくるゆかりさん。

「わかつてない、わかつてないよ純一君。私に頼まれて断る男の子なんかいやしないし女の子からも私ぐらい完璧だと嫉妬心より尊敬心みたいなものが出て何も言えなくなるのよ、ほんと北原静だけは例外だったけどね」

なんつー人だよ、、、ほんと敵に回しちゃいけないわ、、、

「ま、まあこの話はここら辺でそろそろ本題に行きませんか？パソコンはリビングにありますので」

「そーね、鞆そこら辺に置いていい？」

「はい」

そう言つてゆかりさんは鞆を玄関脇に置く。つてか普通の男子からしたら夢のようなことなんだろうなこれ、、、裏知らない人からしたら学園のアイドルと家に二人きりだもんな。まあ今となつては学園の悪魔と二人きりだからなんとも思わんけど。

「あいたあ!?!なにするんすかゆかりさん、、、」

何故かスリッパで頭を思いつきり叩かれた純一だった。

「いや、今めちやくちや失礼なこと考えてたよね？私それなりに心読めるから」

そんな笑顔しながらスリッパ持つてる人僕知らない。

「ははは、取り敢えずパソコン付けますね」

自宅でパソコン使ったことなんてほとんどないから操作の仕方がおぼつかずネットの開き方がわからなかった、

「もしかして機械音痴、、？」

「すみません、、」

「ちよつと変わって」

「ちよ!?どこ座ってんすか？」

「え?膝の上だけど？」

「当たり前のように言わないで下さい、、」

そう、この人は俺がパソコンに苦戦してるところで普通に変わるのかと思ったらなんの躊躇もなく膝の上に座ってきた、、流石にこの体制はまずいって、、ってかめちやくちやいい匂いする、、あー考えんな!無心だぞ純一。

「えつと、高校生、喫煙、画像で検索つと」

慣れた手つきでパソコンをいじるゆかりさん。流石優等生だ。パソコンの授業とかでも成績いいんだろうなあ、、

「ほんつと、相川単純ね。見てみなさいこれ」

「え？ああ！」

画像検索の一番上に背景が一緒の写真が出てきた。おいおい、、、ちよつと頭使うやついたら秒でバレるようなことよくやるよほんと、、、

「よかつたじゃん、これで試合出れるよ」

「ありがとうございます。ほんと助かりました。自分T w i t t e rから探そうとしてたんで多分こつち気付きませんでした」

「野球バカは単純で助かるわほんと、お手荒借りてもいい？」

「あ、どうぞ。その扉出て右です」

そう言うところこゆかりさんはリビングを後にした。しかしなんていうか、、、ほんと野球しかやってきてないやつの頭の悪さが露骨に出てくれて助かった、、、このまま何も証拠もわからずスタンドで応援なんかになったら下手したら野球部やめてたかもな、、、

ドタドタドタドタ

ん？なんか上の方が騒がしいな。バレんだろそんな騒いだら、、、R I N Eで静かにしてって送っとこ。

「なんであんたが純一の家にいるの!？」

「それはこつちの台詞よ！なによまだ純一に未練タラタラなわけ!？」

「あんた先輩にその口の利き方とか有り得ないんだけど!? ってか説明してよなに? 高校生で同棲? やーらしー」

おい、まさか鉢合わせたのか、、、でもなんで上に、、、! ゆかりさん俺の部屋でも探しに行つて扉開けたら静が居候してる部屋に行つちやつたのか、、、

「これには色々事情があんのよ! あんたこそなんでのこのこ部屋に上がつてんのよ! また脅したの?」

「年中脅してるみたいない方は心外だわ。これにはこれがあーで色々あつているのよ」

「はあ、、、まあゆかりさんがいる理由はわかった。純一! 聞こえてんでしょ! 上来なさいー!」

行きたくねえ、、、もう上がどんな感じになつてるか予想つくもん、、、つてか菜華ちゃんは? 俺の代わりに止めてきて欲しいレベルなんだけど、、、

「私にはあの二人止めるのは無理だよじゅんにい」

リビングの扉からひよっこり顔を出して言う菜華ちゃん。

「人の心読むのやめなさい、、、はあ行きたくねえけど行かなきゃだめか、、、つて何その敬

「礼は」

「お国のために頑張つて下さい」

「人を特攻隊に行く日本兵見たく送んな」

二階に行くのと物凄く険悪な雰囲気になっていた。そりやそーだ。あんな件があつて静はゆかりさんへの評価はマイナス域振り切つてるしゆかりさんはに関してでは自分で言うのもあれだけど静は恋敵にあたるわけで、

「えつと、、、自分はどうしたら、、、」

「純一、私達付き合つてるんだよね？それで私の許可無しに女の子を家にあげるつてのは怒るよ？別にこの人に欲情して手上げたりするとは思つてないけどなんで隠したの？」

「いや、、、なんつーか怒られるかな、と」

「隠してた方が怒るに決まつてんでしょ。よりによつてゆかりさんよ？あんな事があつたばつかでよく家入れるよ、、通信制限なんて嘘だったよちなみに」

「すみません、、、つてゆかりさん嘘だったんすか」

「ごめんねー、純一君の部屋見てみたいなー思つてつい嘘ついちゃつた」

舌を出して頭に右手置く仕草で喋るゆかりさんにイラツときつつ話を続ける。

「俺の部屋なんて見てもなんもないっすよ。取り敢えず今後はやめてくださいね」

「はい、そーだ、聞き捨てならない事静ちゃんから聞いたけど付き合ってるの?」

「ゆかりさん事件の後で俺が静に告白して付き合うことになりました」

「へえ、あれ?純一君、その首筋の絆創膏どうしたの?擦り傷?」

「この人はほんとに、」

「あ、ほんとだ。純一いつの間に怪我してたの?」

「ちよつと体育の時間にバスケで引つかかれちゃってね」

出来るだけ自然な仕草で返す。しかしまたゆかりさんが余計なことを、

「えー?私のはてつきり首筋だから静ちゃんがキスマークでも付けて恥ずかしくて隠してるのかと思ったよ」

「な!?私そんなことしません!疑うっていうなら純一その絆創膏剥がしてその頭の悪い女に見せてあげて」

その瞬間ゆかりさんの口角があがったのが見てわかった。静なんでそーなるんだよおお!!普通にしていねーよでいいじゃんか!

「そーね、見してもらいましょうか」

ゆかりさんがすんげーいい顔してるよ、

「いや、でも結構グロいですし、傷口とか見せるもんじゃないですよ」

「なーに言ってるの純一君、私野球部だよ?怪我の手当とかだってるじゃん、ほら早

くー」

逃げ場がねえ、

「静、ほんとにいいんだな？」

「何言ってるのよ早くして」

はあ、言われるがままに俺は絆創膏を剥がした。

「どう？ゆかりさんそんなものあるわけないでしょ？」

「おかしいなあ、私の目にはキスマークがしっかりあるんだけど、もしかして純一君そのキスマークって静じゃない子から？」

あんただよあ、ん、た！はあ、どうすんのこれ。俺知らないよもう。

「はあ？んなもんあるわけないでしょ、うっそ、どうして、ごめんちよつと外出るわ今ここにいたくない。」

「おいちよつと待てよ静！」

「うるさい純一は黙ってて！」

「っ!!」

「ごめん、でも今は一人にして。私も冷静に話せる自信ないわ」
、、、、、

小学生からの頃からの付き合いだったが思いつきりピンタされたのは初めてかも知れない。それに静が目を真っ赤にして涙を堪えてる姿も、

仲直り？

「ゆかりさん行きますよ」

「え？」

「いいから！ 静追っかけます。それでちゃんとゆかりさんの口から謝って下さい。出ないと今後自分ゆかりさんと口聞くのやめます」

「ったくめんどくさいわね、行けばいいんですよ。でもあてはあるの？」

本当に面倒くさそうな表情をしながら言うゆかりさん。ほんとにこんなゆかりさん学校のやつに見してやられてーよ、、

「恐らくですけど、、でも見つけるまで探してちゃんとゆかりさんには謝ってもらいますから」

「なんで私が謝らなきゃいけないのよ」

「そろそろ怒りますよ。これでも大分我慢してるんですけど」

嘘は言っていない。流石に彼女にあんな対応されたら誰でも怒るだろ。静の居場所だけど中学の頃1度だけ大喧嘩して今みたいなことになったっ事があった。その時は河川の端で目真っ赤にしてたっけあいつ。

「わかったわよ」

その後は言葉を交わすこともなくゆかりさんと目的地の河川に向かった。

やっぱりいた。あの頃とほんと一緒だな。

「静!!」

「じゅん、いち?」

そこには暗い顔をした静がひっそりと河川敷に座っていた。ほんと不安にさせてごめん。もう心の中は謝罪しかなかった。

「帰ろ、静。そんでゆかりさんから話があるから」

「なによ、言い訳でも考えてきたの?その女がいいなら付き合えばいいじゃん」

不貞腐れた感じで話す静に俺はどうしたら納得してもらえるだろうかいいかわからなくなっちゃった。彼女なんて今までいたこともないし俺はその場で固まってしまった。何か言わなくちゃ、しかし静寂をやぶったのはゆかりさんだった。

「全く、純一君飛び出したのはいいいけど何も考えてこなかったんでしょ。それでどうしたら静ちゃんに信用して貰えるか考えてたら固まったと、これだから童貞は」

だいたいあつてるのが悔しいわ、ってか童貞関係ねーし。

「まあいいわ、静ちゃん私が話すわ」

「あんたの話なんて聞きたくないわ」

「なら独り言だから黙って聞いてて。ちよつと今回はやりすぎたわごめんなさい。あのキスマークも貴方と純一君が付き合ってるなんて知ってたらやつてないわこれはほんとは。ちよつとしたイタズラのつもりだったの、それで純一君の家に行ったら貴方がいるんだもん。まあ、なんていうか、その、同棲なんてずるいじゃない！それでちよつと焦っちゃつて煽ったらまさかこんなことになると思わなかったっていうか、ほんとにごめんなさい。独り言は以上よ、私は帰るわ」

「ぶつぶつ、あの高町ゆかりさんが焦ってたんだ、ねえ聞いた純一？マジで面白いんだけど」

そこにはさつきまでの不貞腐れた態度はなく涙まで出して笑っている静がいた。

「いや、良くわかんねーけど元気になってもらえたならよかったわ、」

「だって学校じゃ私可愛くて最強ですぐらしいの自信家の高町ゆかりがよ？私に対してごめんなさいとか言つて純一取られたからつて焦つてんのよ、これが笑わずにいられるもんですか、でも許したわけじゃないからね、家帰ったら覚えといて純一」

「あ、はい、」

ゆかりさんの方をみると、

顔を真赤にして腕をプルプルさせていた、こんなゆかりさん初めて見たな、思わず俺も笑いそうになるのを堪える。

「静ちゃん、いやもう静って呼ぶわ私も。あのね、純一君が貴方に謝ってなんて言っただけじゃあ、さっさと謝ってないから」

「なんであなたに呼び捨てされなきゃいけないのよ、じゃあ私もゆかりって呼ぶから。ほんつと学校でもその性格でやりなさいよ。逆に踏んでほしい層が出てくるかもしれないよ、ねえ純一？」

「俺に話を振らないでくれ、、、」

うしろでわちやわちやしてる二人を完全に無視して心配してるであろう菜華ちゃんに2人が仲良さそうに喧嘩しているとこを写メって送っておいた。

「静とゆかりさん実は仲良いでしょ、、、」

「なわけあるか!!!」

「取り敢えず菜華ちゃん心配してるから帰るよ俺。せっかくですしお二人仲良くなったら記念に飯でも食ってきます？一応喫煙疑惑のお礼も兼ねてるので」

「はあ!?!純一マジで言ってるの!?!あんたまだこの女に情与えんの?もう川に突き落とそ

うかとしてたんだけど!」

「ちよつと痛い痛い!何よこの馬鹿力女!?純一助けなさい!」

「なんであんたが呼び捨てで純一のこと呼んでんのよ!」

「別にいいでしょーが!」

ほんと何してんだろうこの二人、

「あのそろそろ二人ともいいすか、帰りたいしほかの人の目やばいんだけど、」

「え?」

静とゆかりさんは全く気にもしていなかったがさつきから交通人の目がやばい。お盛んねえって言うオバチャンからリア充は死ねオーラつきつけてくる男の人まで十人十色である。

静とゆかりさんは気が付いたのか家まで無言で帰るのだった、

夜

家に着くと俺は静、ゆかりさん、菜華ちゃんの料理を静と作り始めていた。

「ほんつとゆかりつてば人の話聞かないんだから、それに料理出来ないとは思わなかったね」

「ああ、前にゆかりさんが弁当作つてきて持つてきてくれたことあつただけどつてことはあの弁当はゆかりさんのお母さんが作つたつてことなのかな、」

河川敷での一悶着の後家に帰ると誰が料理をする？つて話になつた。静がゆかりさんと一緒に作つて女子力の差見せつけるから純一は作らないでとか言つたら普通いきよとんとした顔で

「私、料理なんて出来ないけど？天谷家のキッチン焦がしてもいいならやるけど？」

なんて言うので静と俺ですることになつたのだ。メニューはシンプルにカレー。だけど4人分ともなるとそれなりの量になるので以外に大変なんだよね。

「そーいや菜華ゆかりと2人にさせちゃつたけど大丈夫かな？」

「菜華ちゃんならコミュ力の塊みたいなもんだし大丈夫でしょ」

「まあそうなんだけどあの子もゆかりに悪いイメージしかないからさ。菜華人のこと嫌う時マジで尋常じゃないぐらい近寄るなオーラ出してやばいのよ」

あの子でも人を嫌うのか、、、なんつーか菜華ちゃんは誰とでも仲良くするって印象があつた。少し様子見に行つてこようかな。

「ちよつと様子見てこようか?」

「うん、お願い」

「おけ」

俺はキッチンを出てリビングの方に足を運ぶ。大丈夫かなあ。様子を見てみると、、、
「もおお姉ちゃんくすぐったいってばあ」

「ああ菜華ちゃんマジで可愛いよねえ静の妹じゃなくて私のとこに来なさいよ」

「それはできないかなあ、でも素のゆかりお姉ちゃん好きだよ?学校でも素の姿見せてあげればいいのに」

「いや、それはちよつとね、、、私もそろそろキャピキャピしてるの気持ち悪くはなつてきてるんだけど1度ついちゃった印象って壊せないものよ」

「そーなんだ、でも菜華にはお姉ちゃん素で接してよね、私と2人になった瞬間人変わるんだもんびつくりしちゃったよ」

「なんていうか癖、かな、両親にも姉にも仮面被ってるからもうどれが本当の自分かわからなくなってきちゃったのよ」

あのゆかりさんが弱味見せてるよ、流石コミュニケーションの塊。

「大丈夫だよ！菜華そんなこと気にしないから！その代わりおねえとはいつかちやんと仲直りしてくださいね！おねえ頑固なところあるけどほんとはめちやくちや優しいから」

「うん、菜華ちゃんが言うならちやんと話し合ってみるわ」

「やったー！ゆかりお姉ちゃん大好き！」

ゆかりさんに抱きつく菜華ちゃん。流石にオーバーリアクションだろって思ったけど菜華ちゃん気に入った人にはめちやくちや甘えるとこあったなそういえば、

「知らない間に仲良くなったみたいだね」

「あ、じゆんにいもう出来たの？」

「いやまだだけど静から菜華ちゃんとゆかりさん険悪な雰囲気になってないか見てきて言われて確認しに来ただけど心配いらなかったみたいだね」

「大丈夫だよー。最初はじゆんにい騙したゴミクスとか思ってたけど話してみたら普通にいいお姉ちゃんでびっくりした」

「ゴミクス、」

「ゆかりさんまともにショック受けないで下さい」

「だってこんな天使にゴミクズなんて言われたら泣くわよ！何この可愛さ！反則でしよ」

取り敢えずゆかりさんに菜華ちゃんがクリーンヒットしたことはわかったよ、
「まあもう少ししたら出来るから待ってて下さいね」

そう言つて俺は再びキッチンに戻る。

「どうだった？」

「それが菜華ちゃんのことゆかりさんがくそ気に入ったみたいでもうデレデレよ」

「あの子も面倒なのに気に入られたわね、あ、もう出来るからお皿取つて」

「ほいよ、やつぱり量あるな4人前だと」

「そーね、手伝つてくれて助かつたわ」

笑顔でいう静、こういうやり取りいいなあとか思つて少しにやけてしまう純一だつた。

「なににやけてんのは気持ち悪い」

「別になんでもねーよ」

「言わなきゃあんたのカレー私が食べるけど？」

「別に深い意味はねーよ、なんかこういうやりとりいいなつて思つただけ」

「なにそれ、意味わかんない」

意味わかんないって言葉とは裏腹に静は照れた表情をしていたので意図は伝わって
いたんだと思う。

「純一、これゆかりに」

「ほいほい」

俺は静が皿によそったカレーを皆の元へ運んでいた。

「お待たせー。じゃあ食べよっか」

一同「いただきます」

なんていうか今考えるとゆかりさんと静とご飯食べてるなんてちよつと前じゃ考え
つかなかったな。そもそもあんな事があつてこれからどう顔合わせればいいかと思っ
たのに何ふり構わず話しかけてきたゆかりさんは流石だと思つた、俺なら絶対無理。

「ん、美味しいじゃん」

「どーも。ゆかりも料理やってみたら？」

もうゆかり呼びが定着してるみたいだな。一応先輩だぞ静、まあゆかりさんもなん
も言わないから大丈夫そうかな、

「んー。やってみたいとは思わないこともないんだけどやる時間もないしね」

「そーなの？」

「あんだ野球部のマネージャーやりながら成績維持するのって結構大変なのよ、毎日予習復習は当たり前だしそれに夜更かしすると肌にも悪いでしょ？」

「自分に仮面つけて縛ってるからじゃん、ごめん、私予習復習もしてないし肌とかおしゃれとか私全然気にしたことないや、」

「まじで、何もしないでそれなりに可愛い顔してる静ちよつと羨ましいわ」

「なんか素直に可愛いって言われると照れるわ。まあゆかりには適わないわ、流石学園の天使」

「その呼び名どうにかならない？ 気持ち悪すぎるんだけど天使だとか妖精だとか姫だとか」

「男子にいいなよ、まあ気持ちはわからなくないかも、女子目線から見ても綺麗なのに誰にでも仲良くするから男子から俺ワンチャンあるかもとか勘違いされるんだよ？ 私のクラスの男子もゆかり通る度高町先輩マジやべー、とかやりてえとか言ってるんだから」

「うえー。ワンチャンなんてあるわけないのにねー。私は純一君だけだし。つてかやりたいとか言ってたやつ今度教えなさい今度土に埋めるから」

「ガールズトーク？ が繰り広げられてる中で俺はもくもくとカレーを食べ終えテレビ

を見ていたところにRINEが飛んできた。

『お疲れ様です！林です！先輩証拠見つけましたよ！ネットの画像に全く同じやつありました!!』

薫ちゃんも見つけてくれたのか。俺は一言ありがと助かったよ！つとRINEを返した。すると20秒後またRINEが飛んでくる。

『ご飯奢つてくれるって言いましたよね?!明日の夜空いてませんか?』

あーそんなこと言ったなあそーいや。まあ別にたまにはいいか。

『明日の夜ならおけよ。何食いたい?』

『ファミレスとかでゆっくり話しながら食べたいんですけどダメですか?自分あんまりご飯食べるの早くないので』

確かに薫ちゃんは皆で飯食う時いつつも最後だったなあ。

『全然大丈夫よー。じゃあ19時に百合山駅前でもいいか?』

『了解です!楽しみにしています!おやすみなさい!』

返信はえーなあ。取り敢えず明日静に夜いらないうってこと伝えなきや。

と思つたが肝心の静がない。ついで言うとうっかりさんと菜華ちゃんもいない。携帯と格闘してて全然いなくなったの気が付かなかつたよ、、、

びーん。

ん？ R I N Eだ。菜華ちゃんから。

『じゅんにい携帯に夢中だったから知らないと思うけどこれから3人でお風呂入るから覗くなら大チャンスだよ！学園の天使と美人姉妹の裸見れるチャンス！激熱！』

既読無視しとこ。つてかなんでお風呂？まさか泊まつてくつもりなのゆかりさん？
たまたま汗かいたからとかいう理由だよ、うんそうだと思つとこ。

数分後、

「じゅんにい助けてえ!!」

部屋でやることもなくベッドでうとうととしていたら悲鳴をあげて俺の部屋に入ってくる菜華ちゃんがそこにいた。

「どうしたの!?!つてか服!なんで下着しかつけてないの!?!」

お風呂上がりなせいかめちやくちやエロく見えて仕方ないのにしかも下着しかつけてない状態の菜華ちゃんに抱きつかれて理性が壊れそうになった、

「菜華ちゃんどこ行つたの!?!お姉ちゃんが髪乾かしてあげるからあ!」

「ひっ!!」

引きつった顔をした菜華ちゃんは慌てて俺の部屋の鍵を閉めた。

「何があったの、、、後これ着て。流石にずっとそんな格好でいたら俺もやばいから
そう言つて上下のジャージを渡した。」

「はあ、、、ごめんねじゆんにいきなり押しかけて」

「まあそれは大丈夫だけど、、、」

「えーつと、ゆかりさんなんだよね原因、」

「ゆかりさん？なにかされたの？」

「いや、皆でお風呂入ることになったのは言つたよね、既読無視したけど、なぜか既読無視されたけど」

2回も言わなくても、

「うん」

「それでゆかりさんがその、、、背中流してあげるって言つてくれたから任せただけだね、、、触り方がエッチで、、、」

「お、おう、何してんだあの人。静は止めてくれなかったの？」

「そーなの！おねえなら止めてくれると思つたのにね、完全に見て見ぬふり決め込んでそそくさとお風呂上がつちやつたんだよ！」

「あらあ、、、」

ってか当の静はどこに？ゆかりさん家に解き放ったままなんだけど。

「まあちよつと様子見てくるから待っててよ」

そう言つて俺はリビングの方へ足を向けた。

そこにはちよこんとソファアの端に座っている静とクッションに頭を乗せて熟睡してるゆかりさんがいた。

「ゆかりさん寝ちやつたの？」

「そーみたい、多分はしやぎすぎたんじゃないかな、今まで自分が素出せる友達なんていなかつたみたいだし」

「あーそーかもな。じゃあ布団持つてきてそのまま寝かせてあげよつか」

「そーだね、そしたら私達も寝よつか。菜華はどーせ純一のとこなんですよ、もうゆかり寝たから大丈夫つて言つてあげて」

「りよーかい。じゃあおやすみな」

「うん」

俺達は軽い抱擁をして寝室へと戻つた。

菜華の思い

ジリリリリリリリリ、ジリリリリリリリリ、ジリ、ガチャ。

『んー、もう朝か、ん？』

なにか違和感を感じた。

目が覚めるといつもよりベッドが狭く感じられそれに何かいい匂いっていうか知らない匂いが、

「すう、すう、んー！ー！じゅんにいおはよ」

その正体は菜華ちゃんだった、彼女は一伸びしてあくびを1つするといつもものようにはおはようと挨拶をした。いやちよつと待てよ。確か昨日の夜ゆかりさんがリビングで寝ちやつたから大丈夫って言って俺の部屋から菜華ちゃんを帰してすぐ寝たんだけか俺。

「お、おはよ、じゃなくてなんで俺のベッドに忍び込んでるわけ？昨日あの後静のところがなかったの？」

「戻ろうとしたんだけどなんとなくじゅんにいの横で寝ようかなって」

可愛らしい笑顔で話す菜華ちゃん、ほんと妹に下さい。

「あのねえ、俺だつて男なんだから軽く一緒の布団に寝ないの、それに俺が静に殺されるんだからね？」

前のお風呂の件を思い出して頂きたい、、あの時の静は俺の事を本気でゴミ屑を見るような冷たい目をしていた、、今回もそうなりかねない。いやね？確かに付き合い初めて毒減つて物足りなさはあるけどね。つて何言わせんだよ作者、、

「いやあ流石にその心配はしてないかな、、だつてじゅんにいだし、、だつたらお風呂に入った時に襲われてるでしょ、別に襲つてもよかつたのに」

笑顔で話す菜華ちゃん。舐められてんなあつてか男としてのプライドなんてものは俺にはあるのか知らないがボロボロになつてる気がする。

「だからそういう事を言わないの。クラスの男子にそんなこと言つたりしてないよね？」

中3の男子なんて高校生以上によくに溺れてるからな、、

「同級生の男子なんかに興味ないもん私が好きなのはじゅんにいだけだし。」

「またそういう事を言う、、」

いつもの冗談をいつものようにはいはいと軽くあしらつてとつとトリピングに行こうとした俺だったが菜華ちゃんからの声で足が止まつてしまった。

「冗談だと思つてるでしょ？でも冗談じゃないんだよ？私は初めて会つたあの日から

ずっと気になってたの。ほら？私ってあの頃人見知りだったの覚えてないじゆんにい？多分おねえの後ろに隠れてたと思う。男の人にも耐性なくて正直おねえになんて男なんて紹介すんだよって思ったぐらいなの。でもね、じゆんにいは私が人見知りだった分かったのかわからないけど私の警戒解くために目線を私より下に話して大丈夫だよって笑顔で言ってくれた。その時から気になり始めて中学上がる頃にはもうじゆんにいしか見えてなかった。おねえが好きって分かった時はショックだったなあほんと、でも私は諦めないからね。私は2番目でもいいなんて思わないから1番じゃなきゃやだから」

まじかよ、、、まだ寝起きの頭に菜華ちゃんからの告白はめっちゃくちや響いた。それにいつものふざけた感じの話し方じゃなくてきちっとした言い方に少しびっくりもした。すぐに何か言わなきゃなんだろうけど全然言葉が出てこなくて頭の中で言葉がグルグルしていた。

「あーあこんなタイミングで言うつもりじゃなかったんだけどなあ。鈍感すぎるんだよじゆんにい。この事はおねえには内緒にしててね。おねえも鈍感だし私がいじゆんにいこの事好きってのは分かってないと思う」

「え、ああわかった。でも菜華ちゃんなんで俺に協力してくれただよ？あんなに相談乗ってくれて、、、普通なら付き合っただけ欲しくないから邪魔するべきだったんじゃないの

「？」

告白するって決めた時菜華ちゃんはこんな事を言ってたっけ。

「大好きなおねえと大好きなじゅんににくっついてほしいの！」

多分静の事も本気で姉として好きだから裏切れなかったんだろうな、、、

「邪魔しようとしてるじゃん？」

「え？いつよ」

「あのねじゅんにい、、、普通お風呂なんて入らないよ、、、いくら彼女の妹だからって。あの時はじゅんにいに私襲ってもらっておねえに幻滅してもらおう作戦なんだっただけどなあ」

舌をペロツと出してごめんねって仕草をする菜華ちゃん。俺中3にはめられるとこだったのかよ、、、

「まあ、えつと今後はやめてね。菜華ちゃんの気持ちはすんごい嬉しいけど俺は静が好きだからさ」

「邪魔はやめない。私は諦めないから！それじゃ先ご飯食べてるから」

はあ、、、俺はベッドの上で大きな溜息をついた。

まだまだやらなきやいけない事だつてあるのにこの1ヶ月つてか1週間でバタバタしすぎだろ、、、ゆかりさんの告白から始まって俺の告白、喫煙疑惑、菜華ちゃんの告白。

今までぼんやりと時を過ごしてた罰ですか、とにかく今は喫煙疑惑をはらして大会に集中しなきゃ。もうすぐそこまで来てるんだから。

夕方の不運な日

菜華ちゃんからの告白を受けて私は先にリビング行くからねと言われてからかれこれ10分近く動けずにいる。

だって気まずいじゃん！リビング行ったら静にゆかりさんに菜華ちゃんだよ！? 修羅場ってか戦場じゃん！静と付き合ってるってのは知ってるけど遠慮ないんだもん、最近までほとんど色恋沙汰なんかは無縁だった俺にどういいう対応で接したらいいんだよ！普通に接すればいいじゃん！って思うかもしれないけど普通がわからないよ、

「ちよつと純一！なにしてんの！早く降りてきてよご飯冷めちゃうよ!!」

階下から静の声がする。このまま部屋にいるわけにもいかないし行くか、

「ごめん、お待たせ、ってあれ？ゆかりさん帰ったの？」

いると思っていたゆかりさんが不在だった。少しほつとした。

「あーゆかりなら家に忘れ物したとかで帰ったわよ、ってかどーしたのよ純一、なんか様子おかしいよ？熱でもあんじやないの？」

そー言つて頭に手をかざそうとする静。

「べ、別に熱なんてねーよ大丈夫」

「何よ、別に恥ずかしがることじゃないでしょーに。まあいいわ早く食べて学校行きましょー」

そう言つて自分の席に戻つてパンを不満そうに齧つていた。

ヤバイ俺どうしちやつたんだろほんと、、、とにかく今は部活だよ部活。

会話もなく朝飯を食べ終え俺は先に学校へと向かつた。タカとの待ち合わせまで10分以上早く着いてしまった。俺は朝の初めて見た真剣な表情の菜華ちゃんの顔を思い出してしまつていた。

『じゅんにいが好き』

不覚にも顔がニヤけてしまうのがわかつた。馬鹿か俺。今は浮かれてる場合じゃないだろつて。

「よお、純一。今朝ははえーのな」

そこには眠そうに欠伸をしながら喋る親友のタカの姿があつた。

「ああ、たまには俺も早い時ぐらいあるよ」

「まあお前が集合時間より早く来る時なんて決まつて何か言いたいことある時のが多い

「ただけどなんかあったんか？」

「ああ、例の喫煙疑惑なんだけどネットからの合成画像だったよやっぱり。今日の放課後ゆかりさんと野村監督のところ行ってくる。お前も来るか？」

「もちろ！つてかゆかりさんともう和解したんか？」

「うん。大会前つてのもあるしいつまでも気にしてたら仕方ないかなつて」

「純一。1つ言っておくけどお前優しすぎるところあるからな？多分俺なら許せてないわ。まあ純一がいいってんなら俺もいつも通りゆかりさんと付き合つてくわ」

「優しすぎる、んーそんなことないと思うけど。まあ気をつけるよ」

「おう」

その後も昨日のプロ野球の審判がジャビアンツ寄りだとか下らない話をして学校に向かった。

学校につくと1番最初に出迎えてくれたのは赤星、早苗ちゃんの仲良しコンビだった。

「おはよー純一君！」

「お、おはよ早苗ちゃん、朝から元気だね」

「まあねーほら赤星も挨拶しなきゃだよ」

「天谷絡むとなんでこんなに怠くなるのよ早苗、、あんたのせいよ責任取りなさい」

「俺関係ねーだろ、ってかタカもいんだけど早苗ちゃんタカにはそのハイテンションぶつけないの?」

「あ、いたんだおはよ小久保君」

「ねえ、純一。俺女の子に殺意湧いたの初めてなんだけど。ってかいつのまに下の名前前で呼ぶぐらい仲良くなってたん?」

「あああの紅白戦だよ。それで反省会的なのしてからだよ」

紅白戦勝ちたかったなあほんと。またやって欲しいレベルに面白かったし。

「へえ、五十嵐今日やけにお洒落してない? いつもポニーテールなのにロングだし軽く化粧してるでしょ?」

「な、なんでわかるの!?! 確かに髪型はまあその、ってか化粧なんてほんとわからないレベルなのに。赤星だつて気付いてないよ?」

「俺は授業中女の子しか見てないから」

そう、小久保隆俊は馬鹿がつくほどの女好きで中学の頃同時に3人と付き合つて浮気がバレてまあ酷い目にあつたのを間近で見てる。キャッチャーで鍛えた観察眼無駄なとこに使つてる感半端じゃないんだけど、

「きつも、..」

「いや流石にそれはきもいわ小久保、.. クラスの子に言つてもいい?」

「やめてくださいお願いします。つてか女の子からこんな拒否反応されたことないんだけど俺。純一今日話行くのやめていいメンタル折れた」

「今まで拒否されてねーのがおかしいんだよ。ふざけんな来るつて言っただから来い」

「はーい、つてか赤星」

「なによ」

「五十嵐つて純一の事好きだろ？」

「な、な、何言つてんのよ！そんなことあるわけないじゃない！」

「おいタカお前いじめられたからつて適当なこと言うもんじゃねーぞ」

「あんたの観察眼腐つてんのね同じ捕手として悲しいわ」

3 方向から非難を浴びてタカは、

「お、お前からそこまで言うことねーじゃんかよ！あ、北原丁度いいところに！助けてママあいつらがいじめる、うぼえ！痛い痛いごめんささい！もう一生ふざけたこと言わないんでその手やめて下さい！」

話しているところにたまたま静が入ってきてタカがふざけてママなんて言うもんだから、

腹パン↓股間蹴り↓ローキックなんてフルコンボを貰っていた。

「キーキーうるさいわね、この教室猿なんて飼ってたかしら。純一、この猿動物園に返すから縄持つてきて縛り上げて」

「いや流石にそれわ、、つてかタカお前が悪い。そろそろHR始まんぞ」

「ちきしょう、、」

「ハハハ」

赤星さんと早苗ちゃんは乾いた笑いか出ていなかった。

放課後になると俺とタカは中庭でゆかりさんと合流して野村監督のいる職員室へと向かった。

「そーいや純一君先生に言うこととか何か考えてきた？」

「え？普通に証拠の写メ見して終わりじゃないんすか？特に何も考えてませんよ」

その瞬間ゆかりさんの表情が表から裏に変わった。気がした、、

「あんたばかあ？あのね、写メだけ見せても通じるかもだけどあんたが強くなるやあ一つの暴論で丸め込まれる危険性だつてあるんだからね？ねえ、聞いてんの？」

なんかやけに突っかかってくんなあ、、なんかいつもより酷いぞこれ。

「あのゆかりさん？」

「なによ」

「今日学校で何かあったからって俺にあたるのはどうかと、」

「だってあんたドMでしょ？ 菜華ちゃんから聞いたわよ。ゆかりさんみたいな綺麗な人に罵られたらじゅんにいめちやくちや喜びますよ！ ってだから丁度いいかって」

「ドMじゃないです！ ってか何があつたんです、」

「いつものよ」

そう言つて鞆から4通の手紙を俺に見せるゆかりさん。

「ああラブレターですか。 いいじゃないですか」

「はあ!?! なんて興味もないやつに貰つて喜べんのよ。 だいたい男なら手紙なんかココソコソやらずに直接言わないやつはだめだわ。 それに見てよこの人の内容」

「はあ、 そうすか。 えっと」

内容はまあ酷かった。 あなたの事を毎日考えて自慰してます。 だとか学園の姫をこれから白馬に乗つて迎えに行くとかまでであった。

「先輩こいつに關してはセクハラなんじゃ、」

「もう何度目かわからないわ。 わかつた？ 姫演じるのも大変なのよ」

「ええまあ、 ってかタカもいるんすけどガン無視すか」

「ああいたんだ小久保君おはよ」

わざとらしく表モードの笑顔で話すゆかりさん。なんか朝からタカの扱いが不運な気がする、

「いや、俺裏知ってるんで普通でいいですよ。もう違和感しかありませんわ」

「はいはい、無駄話しちやっただわねとつとと行きましょ」

「はい」

俺らは野村監督の元へと向かった。

ゆかりさんの本気

俺達は職員室前に着くと一呼吸して野村監督を呼んでもらった。

「野村先生奥にいるから入っちゃっていいよ」

「わかりました、ありがとうございます」

ゆかりさんが表の笑顔で対応し俺達は野村監督の前に行った。

「野村監督お話があります」

「ん？どうした揃いも揃って」

「この間の天谷君の喫煙疑惑の写メのことです。やっぱりあれは誰かに偽造されたものでした。この写真を見てください」

「なに？まあ確かに見えなくもないが、」

野村監督の表情は不信感そのものだった。しかしその表情を見てゆかりさんの表情が変わった。

「野村監督！いい加減にしてください！天谷君抜きでどうやって勝つつもりなんです？林君で事足りるほど神奈川は甘くありません！私達3年生はこれが最後なんですよ！百合山高校野球部は相川だけの野球部だけじゃないんですよ！わかってますかそれ！

どんな思い出私達がこの3年間やってきたか！」

その後野村監督は背番号の再渡しを約束してくれた。ゆかりさんからの言葉がよっぽど効いたんだと思う。あんな真剣に怒ってるゆかりさんは初めて見た。

「ゆかりさん本当にありがとうございました」

「自分からもありがとうございました。これで純一の玉受けれます」

「まったくお礼は形で示しなさいよね、純一君明後日の祝日部活終わった後空けといてね。そこでお礼してもらおうから」

「まあ、自分に出来ることでしたら。流石に今回は頭が上がりません」

「じゃあ私と付き合ってくださいよ」

「それとこれとは話が別ですよ」

「はいはい、じゃあまた明日ね。静にも私が純一君の助けになったってちゃんとやってね」

ほんとゆかりさんはわからないなあ。職員室着く前まではただマネージャーとして付き添うだけだからって言うたのに野村監督の前言ったら全部話して終わらせちゃうんだもん。

「助かったな」

「あーほんとに。写メ見した時全然反応ねーからどうしよう思ってたもん、あーやべ忘れてた。今日薫ちゃん和飯行く約束してたんだわまた明日な！」

「おー珍しいな了解。また明日！」

ゆかりさんとタカと別れ俺は薫ちゃんとの待ち合わせ場所である駅前へ急ぎ足で向かった。

「あー天谷さん！こっちです！」

薫ちゃんは俺を見つけると小柄な身長をうんと伸ばして手を振っていた。

「ごめんな、遅れて、ってなんか私服見たら更に女の子っぽいな、」

「いえいえ！そっか女の子っぽく見えるんだえへへ」

「どうしたそんなニヤニヤして」

「い、いえ何でもないです！さ、行きましょ！」

「お、おう」

俺は薫ちゃんに手を引かれ駅から少し離れたファミレスに向かった。

女の子っぽい男子に手を引かれるところを見ていた人物が1人いたことにこの時純一は知らなかった。

??? 「ええ!?!じゅんにいがめちやくちや可愛い子といる!?!どういうこと!?!取り敢えずおねえに連絡しなきや」

薫ちゃんの秘密

ファミレスにつくと背番号再配布が決定したこととゆかりさんのお陰で丸く収まったことを薫ちゃんに伝えた。

「ほんとですか！マジでよかったです！ってか流石ゆかりさんですね。ほんと尊敬しちゃうなあ、」

薫ちゃんに裏のゆかりさんを見せてあげたい。こんな純粋な子騙してるんだからなああの人。

「ほんと助かったよ。今日は俺が奢るし何でも頼んでよ」

「ほんとですか！やったあ！じゃあ失礼して、あ！店員さん！ミックスグリル、春巻き、唐揚げ、山盛りポテトフライ、チャーハン大盛り、食後に杏仁豆腐と抹茶のケーキお願いします」

ん？俺は哑然としていた。普段少食でご飯食べるのが誰よりも遅い薫ちゃんが有り得ない量を注文したのだ。

「えっと、そんな食べんの？いや金はあるし構わないんだけどさ、」

「あーごめんなさい嬉しくてつい。部活の時大食い隠してるんですよ、何か恥ずかしくて」

「でも毎回食べるの遅くしてるのはなんで？」

「あー僕結構な早食いであんな量3分もあれば食べれちゃって後々お腹減ることわかってるんで1口1口ゆっくり食べてるんですよ。この事は2人の内緒でお願いします」

「お、おうそれは大丈夫よ」

程なくして料理が来るとデザート含めてわずか20分であの量を食べてしまった。運動部は食べるヤツ結構いるけどこんな食べる人は初めて見た。

「それと僕から話があるんです。ずっと悩んでて今まで誰にも相談出来なかったことなんですけど言いですか？もしかしたら引かれちゃうかもですが、、」

「ん？大丈夫よ。何言われようと引くわけねーだろ。人それぞれ色々あるだろーよ」

「ありがとうございます、じゃあちよつと着替えて来ますね」

「ん？わかった」

なんで着替え？考えてもわけがわからなかった。

数分後トイレから戻ってきた薫ちゃんを見て息をするのも忘れて見とれてしまった。彼はスカート履いて男子という事を忘れさせてしまうほど綺麗な格好をしていた。

「えっと、、そんなに見られると恥ずかしいんですけど、、」

「あ、ごめん、、悩みっていうのはえっと女装趣味ってことなのかな言い方悪かったらごめんね」

「いえ、全然大丈夫です。まあ含めてって感じですよ。小さい頃からお母さんや近所のお姉さんに女の子みたいで可愛いって言われると何故か嬉しくてそれから何かと女の子っぽく振舞ったりしたりすることが増えてって感じですよ、、性同一性障害って言うみたいですね世の中だと。だからさつきあつた時女の子みたいって言われた時嬉しくて、変ですよねこんなの」

「別に他人の事に俺は口出さないし本人がそれでいいと思っただけでいいんじゃないかな？他の人は気持ち悪がったりするかもですけど少なくとも俺はそんな目で見ないよ。でも野球部で大丈夫なの？着替えたりする時意識しちゃうんじゃないの？」

「やっぱり優しいですね天谷さんわ。ありがとうございます。あーまあ気にしてはいません。だから極力トイレ使って着替えてますよ。これからは天谷さんの陰で着替えよっかな」

その格好の笑顔やめてくれマジで目覚めかけるから。

「はいそこちよーしに乗らない、まあ何かあつたらまた言ってくれよ。じゃあ着替えてきたら？その姿見られたら流石にまずいだろ？」

「いえ、今日はこの格好で帰ります。ほらちゃんとカツラも持ってきてますから！」

「もしかして普段から学校終わった後とか普通に町歩いてたりする？」

「はい、何度か天谷さん見かけてますよ」

「まじかよ！ 気付かねーな流石に」

気づくわけもない。いつもは黒の短髪なのに今は茶が混じった黒髪のロングだもん。つてか人ってほんとわかんねーな、今俺の前にいるのほんとに薫ちゃんなのか？ そんな風に思ってしまう。今の薫ちゃんはヒールも履いて若干背が高く格好も大人びていて二三個年上に見えるレベルだ。

「まあですよ、じゃあ家まで送って下さいね王子様」

「誰が王子様だよ、しゃーねーな」

その後ファミレスから出て薫ちゃんの自宅の前まで送った。途中手繋ぎましようよとかふざけたことを言ってきたので軽くあしらっておいた。

「すっかり遅くなっちゃった、もう23時じゃねーかよ流石に静も菜華ちゃんも寝たかな」

音を立てないように静に戸を開けると、

「遅かったじゃない純一さん今日はどちらに？」

「え、えっと何その口調、」

「そーですわよ純一さんどちらに行かれてました？」

「ゆかりさん!?なんでここに!?!」

「そ、そーだよじゆんにいあの美少女誰!」

「菜華ちゃんまで、」

でも最後の菜華ちゃんの言葉で何で3人が問い詰めてきたのかわかった。薫ちゃんを女の子と勘違いしてるらしい。まああれはするよな、

「野球部の後輩とご飯行つてきて何が悪いんでしょうか」

「こう返すしかなかった。」

「はあ!?あんた嘘つくにももつとまともな嘘つきなさいよシバくわよ」

シバくわよ言う前に蹴り入れてるじゃないですか、

「あのねえ純一君野球部のマネージャーは私一人だけど?勝手に増やさないで貰え

る。」

「あーもー!あれは薫ちゃんですよゆかりさん!」

「は?林君?んなまさか。あのねえいくらあの子が女の子っぽく見えてもその言い訳は苦しいかな」

苦笑いで答えるゆかりさん。この際証拠突き付けるしかなさそうだ。

「じゃあ薫ちゃんに自撮り送ってもらうんでちよつと待つて下さい」

「そこまで言うなら待とうじゃない」

すぐさま R I N E についてる通話のボタンを押して薫ちゃんのアイコンをタップして電話をかけた。2コールもしないうちに薫ちゃんは電話に出た。

「もしもし薫です。どうしたんですこんな時間に?」

「突然ごめんな、さっきの女装の自撮りとかってないかな? あつたら写メ送って欲しいんだけど」

言つて気付いた。しまったあ!! なんの説明もせず写メくれとか相手にどんな不信感与えるかわかったもんじゃない。

「ええつと別にいいですけど、もしかして僕に惚れました?」

「それはないから安心しろ」

「はあ!?! ちよつと傷付きましたよ今の! まあいいですけど! 今送りました! 勝手におかずに使うなりして下さい!」

「おい! 変な誤解を与えるようなこと、つて切れてるし、」

「純一(君)」

「じゅんにいも大変そうだね、」

「なんでお前から冷たい目線貫わなきやいけねーんだよ! ほらこれが証拠だつて、ごめん、これ見せられないわおやすみ」

あのバカなんでこんな肌露出してる写メ送ってくんだよ普通にさっきの清楚っぽい写メでいいじゃねーかよ。

「静、菜華ちゃん」

「御意」

ゆかりさんの掛け声に合わせて北原姉妹に羽交い締めにされゆかりさんに携帯を取られてしまった。

「これマジで林君なの？私と変わらないくらい可愛いんだけど」

自分を比較対象にするのいい加減やめませんか、、、

「どれどれ見してー！うわ、エッロ、、、ってかめちやくちや美少女じゃん！これ男の子には見えないわ、、、菜華は刺激強すぎるからダメね」

「なんでよおねえのけち！」

「わかってもらえたか？ファミレスで飯食ってたのは自分が性同一性障害でっていう悩み相談だったんだよ。この事はここにいる4人の秘密な。それだけは約束してくれ」

「わかったけど、、、」

「まあ理解したけど」

「写メ見てないけど、、、」

「また一人増えた、」

バカ3人の相手するのをやめて俺は自室に戻って明日の準備をして寝ることにした。寝る前さっきの写メを見直して弾道が上がったことは内緒にしておきたいと思う。

ケースバツテイニング

「じゅんにい朝だよー起きてー。もう何回目なのこれ」

「ああもう朝か、、ありがと菜華ちゃん」

「しつかりしてよねもう、、ゆかりさんもおねえも待つてるよ」

は？ゆかりさん？また泊まって行つたの、、

「ねえ菜華ちゃん。またゆかりさん泊まったの、、？」

「いやおねえがね、家の居場所ないならじゅんにいの両親帰ってくるまでいたら？つて誘つたら向こうの親御さんも二つ返事で了承したみたいだよ？それに食費も出してくれるつて言うんだから断る理由ないよね」

「まじかよ、、まあ特に何も起きなければいいけど、、」

よくねーよ！ただでさえ静との同棲で理性保つのにいっぱいっぱいなのみてくれは完璧なゆかりさんまでいたらどうなっちゃうの俺？それに最近やりたいこともやれてないし、、まあ部屋鍵してやればいいんだけど、、昨日はマジで薫ちゃんの写真のせいで危なかった。

「じゃあ下にいるからね」

「着替えたら行くわ」

俺はちやちやつと制服に着替えリビングへと向かった。

「おお、」

思わず声が出た。ってか何これホントに現実か？いつもはなんら華のない天谷家のリビングだったが美少女が揃うととんでもない華やかさを持つことがわかった。つかゆかりさんのパジャマ姿初めて見たわ。

「おはよー純一」

「おはよ」

「あれ、ゆかりさん寝てる？」

「あーまたか、ゆかりいい加減に起きてよ起こすのこれ何回目だと思ってるの？」

「疲れてんのかなよ仕方ないじゃない。それに私朝はクソ弱いよ」

「全く、聞いてよ純一。ゆかりつたら起こしても起こしても起きないから菜華の色仕掛けでやつと起こしたんだからね。以外な弱点だよね朝弱いって」

「まあ、朝弱い人なんてくさるほどいるからなあ。ってか自分の妹色仕掛けに使うなよ、」

「そういえば去年の合宿の時ゆかりさんくそ眠そうにしてたの思い出したな。それに

朝早い遠征とかだと凄く眠たそうにしてたのを思い出した。

「はあ、とにかく食べちゃいましょ。静食べ終わったらシャワー借りていいかしら？
は熱いシャワー浴びないと起きないのよこの体」

「自由にごぞぞ」

おかしいなあこの家の主今は俺のはずなんだけど、

「結婚したら絶対尻に敷かれるタイプだよねじゅんにい。でも尻に敷かれて興奮するタイプだから嬉しいのかよかったね！」

「菜華ちゃん人の心読む癖やめよーね、物理的に敷かれることはねーよ」

「はーい」

俺達は静の作った朝ごはんを食べて学校へ向かった。もちろんバラバラで。

5限までだったらと座学を受け俺は部室へと向かった。

「天谷よかったな！番号ももらえるらしいじゃん。やつぱりあいつか、？」

あいつとはもちろんうちのエースの相川の事だろう。

「まあ確証はないですけど前回とのタカとの会話でほぼ間違いないかと。あいつにとつて邪魔なのは自分だけでしようし」

「まあ決めつけはよくないけどそう思うよな、とにかく大会まで1週間だし頑張ろうぜ」
「はいー!」

その後背番号を野村監督が再配布して部活はスタートした。俺は11番を貰った。タカは変わらず3番を受け取っていた。ほんとに公式戦戦館山さんスタメンマスクで行くのかよ、、、正直投げずらいんだよね。

「じゃあ今日のメニュー発表するから集まってくれ」

「はい!」

キャプテンの高橋さんの号令で部員が集まる。

「今日はアップした後ケースバッティングとケースノックな。ケースバッティングのピッチャーは林頼んでいいか? ケースノックは最初背番号1桁が守って2桁がランナーやってくれ」

「ピッチャー了解しました。思いつきり投げていいんですかそれって?」

「ああ投げてやってくれ。ねじ伏せる気持ちで投げてきていいぞ」

「わかりました!」

「それじゃ今日1日頑張つてこーぜ!」

「おー!!」

アップが終わると背番号順にケースバッティングが始まった。守備はベンチに入つ

ていない1. 2年生が担当してランナーは番号が遅い順に入った。

「じゃあ最初！ノーアウトランナー1. 2塁からな！サインは俺が出すからな」

一同「はい！」

背番号順ということで打席には1番の相川から入った。高橋さんのサインは、特になし。まあ公式戦でも4番だしバントはまあないわな。

ちなみに今投じている薫ちゃんも右のサイドスローで球速は110キロと遅いがその代わりコーナーへのコントロールが良くスライダーとシンカーを持っていて相川、俺に続くピッチャーだと思ってる。ベンチ入りしてない理由は相川が投手は俺だけでいいからと言いつ張るせいだ。普通に要所要所で球速速い相川から薫ちゃんへの継投で緩急使つて抑えられると思うんだけどな。

薫ちゃんが何やら俺の顔を見てウイंकをしてきた。どうやら本気で抑えにくみたいだ。

キヤッチャーは控えの捕手に薫ちゃんのシンカーが捕れないためタカがやっている。恐らく本気でタカも抑える気だろう。抑えて少しでも大人しくなって欲しいものだが、

第1球を投げた！外側へのスライダー。ストライクからボールになるつり玉だ。

「ボール」

相川はそれに反応する素振りを全く見せなかった。球速があまり早くないために見切られやすいと薫ちゃんは話していた。

第2球を投げた！次はインローへのシンカー。内角低めからさらに厳しくつく投球だ。

カキーン!!

「つちおせえから早く振りすぎたわ」

それを相川はま芯で捉えるもレフト方向への大きなファールになる。流石の打撃センスを見せる。今のファールで少し薫ちゃんの顔色が変わった。でもここで逃げてたら次には進めない。

「薫ちゃん！真っ直ぐでいいんだよ！自信持つて！」

俺はベンチから声を出す。本来ケースバッティングでは打撃側へ応援をするべきだが今は野村監督も見えてないし誰にとやかく言われたいだらう。

薫ちゃんもこちらを見て帽子のツバを触って了解の意を見せた。

「応援して自己評価アップさせてまたおかず画像貰う気なんですよ」

背筋が凍った。小声で耳元に声をかけられて少し変な反応をしてしまった。

「ゆかりさん、、、勘弁してください」

「ふふ」

誰にも気づかれずにゆかりさんは元いた場所へと戻っていった。

そんな事をしている間に第3球！外へ逃げるスライダー。

「ストライク！」

バットが空を切りツーストライクとなる。

「まつすくじゃねーのかよ」

相川が薫ちゃんを睨みつけているのがわかった。俺は別に真っ直ぐ投げろなんて言っていない。強い気持ちを持ってっことだ。

タカとのサイン交換が終わり第4球！外へのスライダー、かと思つたがこれは、、

「ストライク！バッターアウト！次館山！」

「つち」

さっきのスライダーを頭に入れてたから出来た投球だった。スライダーと全く同じ球速のストリートを投げて見逃し三振に仕留めた。

その後のレギュラー陣のケースバッティングはと言うと、、

薫ちゃんからヒット一本も打てず予定してたケースノックは中止になりひたすら素振りにトスバッティングをする事となった。高橋キャプテンから監督への直談判で林

をベンチに置いてください!とのことで当初予定していた背番号20を薫ちゃんが受け取ることとなった。そりゃレギュラー陣打てないピッチャーベンチに置いとくわけにいかないよね。

部活が終わり部室で着替えていると薫ちゃんがとことことやってきた。

「お疲れ様です!さつきはありがとうございました。正直相川さんに特大ファール打たれた時やばいかもって思ってた縮こもりかけました」

「お疲れ様、まあ気持ちはわからなくもないけど絶対打者に気持ちで負けちゃダメだよ。

公式戦でも絶対投げる機会あるんだからね!」

「はい!あ、あと一緒に帰りませんか?」

「ん?構わないよ。なあタカ大丈夫だよな?」

「あーわり。俺今日用事あるから別で頼むわ」

「おーそつか了解、じゃあ帰るか」

「はい!やった天谷さんと二人つきり」

「ん?」

「いえいえ何でもないです!」

部室を出ると昨日の夜の話を持ちかけてきた。

「そういえば天谷さん何で昨日僕の写メが欲しいなんて言ってきたんです?」

やっぱりそーなるよなあ、、

さあ、どう言い訳するかな。

何故か期待に満ちたようなキラキラした目で薫ちゃんをこちらを見つめていた。

帰路にて

「なんで写メ送れって言ったんですかあ」

もうすでに10回近く聞かれて俺はそのたび聞かないふりをしてみたり適当な返事を返していた。彼女とマネージャーに問い詰められて仕方なく聞きましたなんて言えるわけねーだろ、

「もしかして、、ほんとにおかずに、」

「するわけねーだろ！」

「な!?するわけねーだろ! って失礼じゃないですか! まるで僕みたいなブスなんかに興味わかかぬーよって言ってるみたいなものじゃないですか!」

「ブスとかそういう以前の問題じゃなくてお前は男だろうが!」

「僕は女の子だと思ってる生活してるんですから女の子なんです! じゃあ今から着替えてくるので待つて下さい! エナメルの中常に着替え入ってるんで!」

「おい! ちよつと待つて! っっていねーし、」

「ってか毎日のように荷物パンパンなのは中に女性物の着替え入れてたからなのか、お待たせしました!」

「おお、」

そこにいるのはほんとに同性かと疑わざるを得なかった。かつらをかぶっているとはいえハナから見たら100%男だなんて思わないし行く人は振り返って薫ちゃんを見ていた。

「純一？」

「へ？」

考えもしていない方向から声をかけられて気の抜けた声で返してしまった。

「へ？じゃないわよ彼女の顔も忘れたの？」

「いや、何でこんな所にいるのかなって」

「ちよつと買い物してたのよ、ってかその子誰？ちよつと見てたけど大分仲良さそうにしてたじゃない」

「いや部活の「初めまして！天谷君とは練習試合で仲良くなりました、桜ヶ丘高校1年のマネージャーの如月雫っていいます！」

俺が普通に後輩の林って言おうとしたら遮られて平然と嘘つきやがったこいつ、、、誰だよ如月雫って、、、

「あーそーなんだ、純一と仲良いんだ」

「まあ、それなりについて感じます。えっと、先輩？でいいんですよね、天谷君の彼女さん

だったりするんですもしかして？」

「そうね、純一と同級生の北原静です、こちらこそ宜しくね如月さん。まあ他校の貴方になら言ってもいいか、純一とはまあその付き合ってるわ」

「そうなんですか、」

じとーつとした目で見てくる自称如月さん。いや確かに前彼女いるか聞かれていないといったのは悪かったけど隠してるんだからしゃーないでしょ、

「それで帰るところだったのかな？私も一緒にしてもいい？」

「あ、いえ！天谷君とはたまたまあつただけでお邪魔しちや悪いんで先帰ります！それじゃ天谷君またね！」

「お、おう」

つてかお前百合山高校のエナメルで走り去るなよバレンぞ、

「あれが林薫って子でしょ？」

「なんだわかってたのか」

「そりやあの子が女装する前から見てたからね」

「なんで最初から出てこねーんだよ、」

「いやなんか男相手のくせにべたべたしてて気持ち悪いなあ思つて見てたらなんか大きな声出してあの子が紙袋持つて出てったからもしかしたら変身見れんじゃね？つて

思つて待つてたのよ」

「やめてくれよ俺はホモじゃない、んであいつの変身の感想は？」

「やばいわねあれ、、、多分私より女子力高いわ。さりげなく話す時に上目遣いになつたり首ちよこんと横にしたりあれは魔性よ、あと純一？」

「魔性つて、、、ん？」

「あの子間違ひなく純一の事好きだよ」

「は!?!いやいやないつて。いくらあいつが女の子っぽくても中身は男なんだよ？」

「あのねえ、、、私は言つてあげたからね?のこのこ僕の家行きましようよ先輩言われてついていって帰ってきたらお尻痛いとか言い出したら別れるどころか絶交だから」

「俺が好きなのは静だけだつて言つてんだろ?仮にあいつが俺の事好きでもやんわり断るよ」

「ならいいんだけど。ゆかりさんやらなんであんたみたいなのがいいんだろ?ね、でもそうなる私もか、、、」

「いやなんでそこ落ち込むんですか、、、」

「あー思い出した本題なんだけどさ、土曜日純一大会前最後の休みよね?私達付き合ひ初めて恋人らしいこと全然してないじゃん、、、だからそのさ、遊園地のチケット取れた

から2人で行かない？」

少し顔を赤らめながら言う静はめちやくちや可愛かった。もちろん断る理由なんてなく。

「もちろんいいよ、ごめんな部活とかであまり2人でいれなくて」

「そ、ならよかった。それに家で今なら会えるじゃん、遠距離とかの人に比べたら相当幸せだよ私達」

なんかいつもより素直じゃね今日？前までなら2人でいれなくてとか言ったらきもとか言われてたのに、、もしかしたら今日なら行けるかもしれない、、

俺は生唾を飲み込んで言った。

「静、あの、よかったらなんですけど、手繋ぎませんか！」

静はきよとんとした顔になってその数秒後、、

「は？くす、ふはははは！真面目な顔したと思ったたらそんなことなの、手繋いでいいですからって小学生じゃあるまいし、ふふ、純一面白いね」

「こ、こっちは真面目に聞いたんだよこれでも、キモとか言われると思ったたらそんな返しされるとは思わなかったわ」

「ほら、行くよー」

そう言っつて静は俺の手を引いて走り出した。

「お、おいいきなり引っ張んなって」

笑っていた静の顔を見るとほんのり赤くなっているのが分かった。

家に帰って

「純一歩くの遅くない？」

手を繋いだはいいものの2人の歩調はバラバラだった。純一は気付いていないが静は誰かに見られたら恥ずかしいという気持ちがとても強く自然と歩くペースが競歩の選手並みに早かった。

「いや、静さんあからさまにペース上げて歩くのやめてもらえませんかね」

「犬の分際で私のペースにケチつけんの？ほら、ワンちゃん早く早く」

なんか静のテンションがおかしい、俺は仕方なく競歩並のペースで自宅へ帰った。でも静は結局最後まで手を繋いでくれたのはめっちゃくちゃ嬉しかった。

「ただいまー」

「おかえりなさい、あらい緒だったのね」

出迎えてくれたのは何故かゆかりさんだった。

「平然と俺の家から出てくるのやめてもらってもいいですか、めっちゃくちゃ心臓に悪いです」

「また来たのゆかり」

「なんだかんだここ居心地いいのよ、心配しなくてもご両親帰ってきたらおいとますわ」

「まあ静がいいなら自分は大丈夫つすけど」

「別に私も平気、ゆかりの家のことも知ってるしね」

「そう？じゃあ遠慮なく。今菜華ちゃんお風呂入ってるから上がったら2人で入ってくれば？あ、後静。貴方歩くの早すぎよ、せつかく手繋いでたんだからもっとゆっくり歩いてお互いの手の感覚楽しんでればよかったのに」

相変わらずどこでゆかりさんは見てるかわかったもんじゃやないな、

「な、な、なんでゆかりがそれ知ってるのよ！後お風呂は1人で入るし！」

「あらあ真赤になっちゃって可愛いじゃない。別にキスももうしてるみたいだしいいじゃないそれぐらい。それとも私と入ろうか純一君？」

静はいわゆる恥ずか死ぬ状態になってしまっていて話せるレベルじゃなくなっていた。乙女かよ。

「あの、その情報はちなみにどこから？」

「いやあ菜華ちゃんとお風呂入りたくてお願いします！お願いします！言ったらおねえとじゅんにいの秘密教えるので勘弁してください！って言われてそれで知っちゃった」

平気で姉を売ったよあの子、

「菜華ちゃん、ってかゆかりさんは菜華ちゃんにベタベタしすぎつすよ」

「なに？もしかして妬いてんの？姉妹丼でもご希望なのかしら？」

くすくす笑いながら話すゆかりさん。本当にその姿は魔女にしか見えなかった。学園の姫とはよく言ったものである。

俺はゆかりさんの言葉を無視して自室へと着替えに行った。

しばらくして菜華ちゃん、静がお風呂から上がってようやくお風呂の順番が回ってきた。今まで家族3人で風呂を回していただいていたからかはわからな
いが何故か新鮮な気持ちになった。結婚とかして子供とか出来たらこんな感じになる
のかな？なんて考えたら自然と顔がにやけてしまうのがわかった。

俺はさくつとシャワーを浴びて風呂場を後にした。リビングでは女の子3人でアイ
スを食べながら談笑しているのが目に入ったので邪魔をせず明日に備えて寝ようと
思ったんだが、

p r p r p r . p r p r p r

「まったく誰だよこんな時間に、」

「は、い、も、も、も、」

「あ、夜遅くにごめんね早苗だけど」

早苗ちゃん？つてか番号教えてたかな？まあいいやそこわ。

「大丈夫だけどうしたの？」

「赤星から聞いたんだけど夏の大会出れないってほんとなの、？純一君去年投げたなかつた？」

どうやら俺が背番号貰えなかつたことを気にしてくれての電話だったらしい。

「あーそのことならもう解決して試合出れるよ。なんか喫煙疑惑かけられて困ったよほんと」

「はーなにそれ！絶対そんなことするの他校の野球部の人じゃん！1人ピッチャー削りに来てるよね考えらんない！」

ごめんなさい早苗ちゃん多分身内です、

「ほんと後輩とゆかりさんがネットと同じような画像見つけてくれて監督説得してくれて助かつたよ。早苗ちゃんもわざわざ電話ありがとうね」

ドタドタドタ！なんか早苗ちゃんが電話の向こうでバタバタしてる気がしたけど気のせいかな。

「べ、別に私は何もしてないしお礼言わなくなつて大丈夫なのに。夏の大会応援しに行くから絶対勝つてよね！それじゃおやすみ！」

「おう、ありがとな。おやすみ」

そう言つて俺は電話を切つて寝ることにした。のだが、

「随分仲良さそうに話してたけど誰？」

俺を寝させんとばかり次から次へと何か起こるな、そこには静が立っていた。つかいつのまに俺の部屋入つてたの、

「同じクラスの五十嵐だよ、ほらこの間の紅白戦の時こつちのチームのピッチャーだった子」

なんとなく早苗ちゃんとは呼ばないようにした。なんか言われそうだし。

「あーあの子ね。そーいや反省会とかしてたんだけ」

「そーそー。めちやくちや落ち込んでたよホームラン打たれたこと」

「まああの時はスライダー来るって分かつてたから打てただけなんだけどね」

「え？わかつてたの？」

初耳だった。そりやそれなりの打者なら球種絞れてるならそりや打てるわな。

「タカがスライダー投げる時わずかにだけグローブ構える位置が下がるつてのに気付いてね。流石にキャッチャー一筋でやってるだけあつて観察眼はないわ」

「なるほどね、それよりどうしてここに来たの？」

「あーなんだっけ、ああそーだ土曜日の予定決めとこうかなつて思つたんだけど眠く

なっちゃったからまた今度でいいわおやすみ」

「お、おう。おやすみ」

土曜日でも楽しみみだけど明後日は大会の抽選会もあり今週は色々忙しくなりそうだな
と思う純一だった。

抽選会とデート前夜

日にちは進んで今日は午後から夏の大会の抽選会の日だ。各高校この大会の為に頑張ってきたと言っても過言ではない。

俺たちは授業が終わると野球部全員で2駅離れた抽選会場へと向かった。

「ついにこの時が来たな、」

キャプテンで背番号7の高橋さんが緊張した顔で言う。

俺達も緊張のせいか抽選会場まで誰一人として喋らなかつた。

『ただいまより第87回神奈川県大会の抽選会を開催致します。各高校の代表選手は壇上までお願いします。まずは1〜50番の札をお持ちの高校の方宜しくお願いします。』

神奈川は高校の数も多く300校近くあるので何回かにわけて抽選をする。俺達百合山高校はシード権を持っているので最後の組の抽選だ。

どんな組み合わせが決まっていき場内にどよめきが生まれていた。そしてついに俺達百合山高校の抽選が始まった。

「出来ればdに入りたいな、強豪校0だけ周り」

横の席のタカが小声で話しかけてきた。

「お前言うなや、俺も思ってたけど口に出したらやな予感しかないよ」

「へへ、わりー」

『私立相模原大学付属高校dシード』

「ほらみろ。よりにもよって去年の準優勝校が楽なルート行っちゃまったじゃねーかよ」

「ちえー、お、高橋さんが引くぜ」

俺達は高橋さんの引いたくじをじっと見つめた。

『神奈川県立百合山高校aシード』

「まじかよ、、」

「高橋やっちゃまったな」

部員達から悲鳴が上がっていた。aシードの前の1. 2. 3回戦で上がってくるチームが8割方分かっていたからだ。去年の夏の覇者の聖ペリーペリー学園。最近出来た新設校だが各地から選手を引き抜いてたったの創立2年で甲子園に出場し優勝したチームだ。しかも去年主力だった2年が3年になって隙が無いチームに出来上がっているとこの記事を見た。

「別に負けたわけじゃないじゃないですか。それにいきなり決勝やれるみたいで良くないですか？自分はそう思います」

「純一言うじゃねーか、そーだなやってやろーぜ」

俺の一言でチームがまとまったらしくちよつと照れくさくなった。しかしまとまっただけでは勝てないのが高校野球。実力はもちろんのこと運もなければ甲子園には行けない。

『全高校がくじを引き終わりましたので抽選会を終了します。起立、礼。それでは各校退場して下さい』

俺達はアナウンスに従って外へと出た。

「すまん！まさか初戦でベリーベリーと当たるなんて、、」

「何言ってるんだよ高橋、初戦からやれるなんてラッキーだろ。事実上の決勝みたいなもんだろ？諦めてどーするよ絶対勝つぞ」

「お、おう！みんなごめん暗いこと言ってる！じゃあ学校戻って練習すんぞ！」

一同「おお!!」

学校へと戻った俺達はいつも以上に集中して練習へと取り組んだ。試合を想定した

ケースノックを中心にやってこの日は練習を終えた。

「じゃあ明日は大会前の最後の休みになるから皆ゆつくり休むように！解散！お疲れ！」

一同「お疲れ様でした！」

「はあ、疲れた、、それにしてもベリーベリーか。俺の球で抑えられるのかな。そもそも出番あるかわからんけど、、」

「いやお前に出てもらわなきゃ困るよ」

「ん？タカなんで？」

「去年のデータ見てただけど各打者皆直球にめちやくちや強いんだよ。だから相川のストリートが下手したら打ちごろの可能性まであるんだよ。正直緩急使える薫ちゃん使った方がいいレベルまである。見てみ？ストリートに対するデータまとめたものゆかりさんから貰ったから」

ゆかりさんデータとかもまとめてほんとにすごいな、、

タカから渡された各打者のデータを見るとまず打率がやばい。1番は打率356の出塁率が5割を超えていた。クリーンナップの3・4・5は全員4割近くのアベレージを持っていて去年の甲子園では各打者2桁ホームランを打っている化物揃いだ。

えっと、ストレート、変化球に対する打率はこれか、：

「マジ、、？」

「残念ながらマジだよ」

なんとストレートだけの打率なら5割を超えていた。相川のMAXの球速は確か151キロ。それでも抑えられるか心配なレベルだ。変化球はお世辞にも曲がるとは言えないし緩急使えるチェンジアップもコントロールに不安があり大事な場面では使いたくない。対する俺はMAX143の変化球はスライダーにフォークにチェンジアップ。緩急ならそれなりに扱える。後は薫ちゃんだけどこら変則的なサイドスローとは言え球速に難あり。もしかしたら低速になれてなければ十分通用するはず。

「こりゃ相川に試合までにチェンジアップ完成させてもらえないと困るな。館山さん！ちよつといいですか？」

タカが近くにいる今夏の大会のスタメンマスクを被る予定の館山さんに声をかける。

「ん？どうしたタカ？」

「館山さんもデータ見ましたよね？ベリーベリーの直球に対するデータ」

「あー見たよ。あれはやべーよ。正直先発は薫ちゃんか純一の方がいいかと思ってるぐらいにね」

「やっぱりそう思いますよね、、。なんとか相川にチェンジアップ完成させるように言ってもらえませんか？」

「了解！」

「ありがとうございます！」

なんとか館山さんには伝えたもののそれを相川がすんなり聞き入れるかどうかが問題だな、、。

「まあ帰ろーぜ。今から慌てても仕方ねーよ」

「そーだな」

俺とタカは不安が残る中帰宅した。

「ただいま」

「あ、やつと帰ってきた！ちよつと大変なのよ！純一も早く電話出て！お母さんから！」

「え、おう」

すごい慌てぶりで俺に電話を急かす静。何かあったのか？

『もしもし？』

『あ、純一君？久しぶり！静とは仲良くやれてる？』

電話の相手は静のお母さんの静流さんだった。

『お久しぶりです。仲良くやらせてもらってますよ。どうしたんです突然？帰国は明後日のはずですよね？』

『いやあそれがね、もう少し帰れないかもっていう連絡なのよ、』

『ちなみに理由はなんですか？』

『純平さんが海外で起業してみたって言い出してね、それで天谷、北原で協力してやってみようって話になったの。純一君には悪い話じゃないと思うよ？せっかく静と付き合えたのに私達いたんじややることやれないんじやない？』

純平さんとは俺の父親である。あのバカ親父今度は起業とかマジか。後半部分のやることやれないのとは笑いながら話していた。この母あって菜華ちゃんありだなんてつくづく思う。ってかなんで付き合ったこと知ってたんだ？

『あ、菜華から聞いたよ貴方達が付き合い始めたって言うのは、あ？物理的に突き合うのはまだみただけど』

俺は話を無視して切り返す。

『海外にしばらく残ること了解しました。両親に宜しくお願いします』

これ以上いじられるのもあれなのでそこで素早く電話を切った。

「聞いた？」

「うん、何故か俺達が付き合い始めた事も知ってたよ静流さん」

「マジで!? 菜華また余計なこと言って、ってかあれだね、マジで同棲見たくなるねしばらく帰ってこなくなるってなると」

そんな恥ずかしい感じで言わないでくれよ、俺だつて意識してないわけじゃないんだから、

「まあ、そーだね、まあ俺達は俺達のペースで、ね? 明日の予定建てようよ。せつかく静が誘ってくれたんだし」

「うん、予定って言っても遊園地の開園に間に合わせるだけだし7:30ぐらいに起きて各自準備して9時に家出る形でいいんじゃない?」

「そーしよつか」

「え!? なにそれ私聞いてない!」

「あんたは留守番してなさいな、後つけてきたら、わかってるよね菜華?」

「はい、ちゃんと留守番します!」

得意の睨みが決まって菜華ちゃんをコントロールすることに成功したようだった。でも菜華ちゃんだしなあ、

「それじゃ私達はもう寝ちやうから、また明日ね。寝坊すんじゃないわよ」

「おやすみ、流石に大切な日に寝坊しねーよ」

俺は明日が楽しみすぎてなんだかんだ深夜2時ぐらいまでそわそわしてて寝付けな

かった、

静 side

ついに明日は初デート？でいいんだよね。付き合う前も何度か2人で出かけたことはあったけど恋人同士で出かけるのは初めてだもん。あー何着てけばいいんだろ。普段通りだとインパクト弱いし見慣れられてるから可愛いって言ってくれないよねきつと、どーせなら可愛いと言われたい、って何考えてるんだろ私らしくもない！ちやつちやと決めて寝なきやなの、あんまり頼りたくないけど、

「菜華！ちよつといい？」

「どうしたのおねえ？」

「私をコーディネートしてくれない？」

「ええ、じゃあはい」

菜華は私に向けて金よこせの仕草をしてきた。

この子はほんとに、今は出し惜しみしてる場合じゃないよねだけど、菜華は将来デザイン関係の仕事につきたいらしくておしゃれとかは毎回勉強してるから私よりは間違いなく服選びのセンスはいい。

「いくらよ、」

「姉妹割で2000円でいいよ、それにしてもじゆんにいと出かけるのに服悩んでるおねえ見るの新鮮で面白いよ」

「わかったわよ、はい2000円。もう、からかわないでよ私だってあいつ相手に悩む時が来るなんて思っても見なかったわよ」

「確かに受け取りました。仕事だと思って責任持ってコーディネートさせてもらいます
！」

「頼んだわよ」

こうして私は妹によって明日の服を決めた。すぐ寝ようとしたのだが明日が待ち遠しくて夜遅くまで眠れなかった、

デート当日

こんにちは、北原静の妹の菜華です。2人の初デートってことでゆかりさんとこつそり付いていくことにしました。面白そうだし。私は部活があるからって言うって制服で朝早くから家を出てゆかりさんと合流した。それにしても家から出てこないなああの二人。もう9：30だよ？

「あー！！！！何してんだよ俺もう9時じゃねーかよ！！！」

そう、この主人公は初デートの日に寝坊っていう一番やつては行けないことをやってのけただった、

「絶対静怒ってるよな、、早く着替えて謝りに行かなきゃ、、」

俺は目にも止まらぬ早さで服を着替えると一直線にリビングに行って恐らく人類がやった土下座の中で一番綺麗な土下座を試してみせた。

「本当にすみませんでした！！ってあれ、、？」

謝ったはいいもののそこに静の姿はなかった。

もしかして怒って自室から出てこないんじゃない、今回は俺が200%悪いし部屋から出てくるまで待つて謝るなんて男らしくもないし正面切って行くしかないよな。

俺は土下座の勢いそのまま静と菜華ちゃんが使っている部屋に向かった。

「静さんほんとにごめんなさい！って、え？」

説明しよう。そこには布団でスヤスヤ寝ている北原静の姿があった。

「どうしよう、起こした方がいい、よな？」

寝ている静の方に行くのと、

「やっぱり可愛い、って違うだろ何観察してんだ俺」

しかし思春期真っ盛りの高校2年生に無防備な彼女というのは破壊力が強すぎた。パジャマは第三ボタンまで空いていて胸チラしているわ寝顔は可愛すぎるわで理性が吹っ飛びそうになり一時静の部屋から退散せざるを得なかった。

「今俺何しようとした、」

一瞬理性が飛びそうなのを必死に抑えて退出し静に電話をかけた。

5コール目の辺りで部屋の向こうからバタバタと音がした。どうやら電話で起きたみたいだ。

「もしもし、、、」

生気の無い声が耳元に聞こえた。寝起き悪いのか静。

「起きた？」

「うん、、、今何時、、、？」

今まで9年間の付き合いだったけどこんな弱々しい声聞いたことなかったな。えつと今は、、、うわ、もたもたしてる間に10時前か。

「えつと、9時57分だよ」

「え、ええ!?ほんとに!?マジでごめんなさい!すぐ支度するから!」

そこで完全に目が覚めたようだった。

「いや、慌てないでもいいよ、落ち着いて静。実は俺も寝坊して今さっきおきたんだよ」
「そーなの?でも私のが遅いしほんとにごめんなさい、、、せつかく楽しみにしてたし台無しだよ、、、今から行っても行列だらけで何も乗れないよ、、、」

俺達が行こうとしてたところは通称マウスランドと言う有名な遊園地。開店から1時間でどんなアトラクションでも2時間並びとかになるめちやくちや混雑する遊園地なのだ。

確かに今から行ってもなあ、、、他のところ提案してみるか。

「なら他のところにしようよ。取り敢えずリビングにいるね。慌てないで大丈夫だから」

「うん、ほんとごめんね純」

ほんとに自分が寝坊したことにシヨック受けてるみたいだった。

15分ほどすると着替えた静がリビングに降りてきた。

「お待たせ、ほんとにごめんね」

「ううん、そんな謝らないでよ。寝坊は誰にでもあるんだしさ。ってかいつもと服装感じ違うね」

これ以上謝られるのも申し訳なくなるから俺も話題を変えた。話題を変えたいって理由もあつたけど普段はボーイッシュのような服装をしていた静だったけど今日は珍しくスカート履いて軽い化粧をしてめちやくちや可愛かった。

「え、ああこれね、実は服決まらなくて菜華に任せちゃったの、あの子将来デザイナーとかになりたいみたいでオシャレには私の何倍も知識あるから頼んじやつた」

少し恥ずかしそうに話す静に俺は言葉は返す。

「そーだったんだ、その、似合ってるし、可愛いと思うよ」

狙いすぎたかも知れないけどめちやくちや可愛いし思った通りの事を俺は伝える。

「そ、そう、ありがとう」

顔を真っ赤にしていた静を見ただけでも勇気を出して可愛いって言ったかいがあつたと思う。

「それとき、行く場所なんだけどーっ私、純一連れていきたい所あるんだ」

「ん？どこ？」

「久々に私の部屋来たくない？小学生以来来てないでしょ？近場で申し訳ないけど家デートって言うのもまつたりしててありかなって、どーかな？」

考える必要もなかった。

「久々に行きたいかも、静がいいって言うなら喜んで」

「じゃあ決まりだね、それじゃ行こっか」

「うん」

ここうして当初の予定通りとは行かなかつたが静の部屋に行くことが決まった。

「菜華ちゃん純一君と静ちゃん遅すぎやしない？もしかして私達がいることバレて裏口から出たんじゃやないの？」

「確かに、おねえ昨日の夜絶対付いてこないでって言ってたし、どうしようゆかりさん！もうマウスランド行っちゃったかも！追いかけなきゃ！」

「ちよつと落ち着いて菜華ちゃん、あの人混みの中じゃ見つけれないわよ。仕方ないけど諦めましょう」

「うー、、、見たかったのに、、、」

「その代わり、私とデートしましょ菜華ちゃん」

「はい?」

「私もせっかくの休み棒に振りたくないのよ、ほらほら決まったら早く行きましょ」

そう言つて私の返事も聞かずにゆかりさんは私の手を引いて駆け出した。

「ちよ、ちよつとゆかりさん!?!どこ行くんですか?」

「ふふ、2人だけで楽しめるとこ」

「え、、、た、助けておねえ!ゆかりさんの目がやばいんだけど」

「はいはい、行きますすよー」

「いやー!!!」

まあまだ純一君と静は家にいると思うんだよね。さつきドタバタ音が聞こえたし。初デートぐらい邪魔しないどいてあげるわよ。これは貸しーつだからね純一君。

お家デート

静部屋は2階の一角にあった。ちなみに北原家は天谷家の目の前で道路を挟んですぐという感じだ。ご近所さんつてこともあり子供が同級生つていうこともあり俺の両親と静の両親は大の仲良しだった。まあそれでも海外で起業と言うのは規格外つていうかなんていうか、

「純一ちよつと待つててもらつてもいい？少し片付けちゃうから」
「わかった」

5分ほどすると中から入つていいよと声がかかり俺は中に入った。

静の部屋は物が少なくとてもシンプルな部屋だった。

「あんまりジロジロ見ないでよ恥ずかしいんだから」

「お、おうごめん」

「女の子らしくない部屋つて菜華から結構パツシング受けたんだよね、私の部屋なんだから勝手にさせてつて感じよほんと」

「菜華ちゃん言いそう確かに」

「でしよ、何か飲み物持つてくるよ、お茶でいい？」

「うん、お願いします」

静が部屋から出て行って部屋に1人になる。

ここで静が寝たり勉強したりしてんだよな、って何考えてんだ落ち着け俺。俺の目の前には静のベッドがあつてそれが気になつて仕方なかつた。

ちよつとだけ、匂いとか嗅いでも怒られない、よね、朝から色々なことで悶々ときせられて割と限界が近い純一さんはそこにあつた枕を手を取つて顔に近づけようとした時だった。

「お待たせ、って何してんのあんた？」

タイムミング悪くおぼんにお茶をのせた静が部屋に戻つてきた。静から見たら彼氏が枕を持つてゐるって謎の絵図がそこにあつた。

「いや、えつと、ちよつと枕の位置が気になつて、」

自分で言つても苦しい言い訳に静は、

「はあ、何しようとしてたかはなんとなくわかるけどあんたも一応男だし特に言うことはないわ。それに付き合う前からあんたがどうしようもないドMの変態つて言うのはわかつてたし」

フオローされたんだかさされてないんだか分からない返答をされたが怒つてないようなのでよしとする。

「DMの変態って言うのは否定させて欲しいんだけどな、」

「罵られて喜んでるじゃないのよ」

「それは静から言われた時だけだよ、言ったじゃん特別扱いされてるのが嬉しかったって」

「いやさ、それで興奮してるのは十分DMだと思うんだけど、まあいいやこんな話。つてかお家デートって何するもんなのかな？家でまったり話してるだけなら私達ココ最近ずつとしてたよね？」

お家デート。確かに何するんだろう？つてなるよね。今まで彼女なんていた事ないしこういう時タカとかなら上手く女の子リードするんだろうなあ、んー、何する、わかんねえ確かに。

「ちよつと黙り込まないでよ、なんか私が独り言言ってるみたいじゃない」

「あ、ごめん、確かにお家デートって何するのかなって考えてたんだよ」

「んで何かわかった？」

「ごめんなさい全然わかんないや」

「だよねー。まあ適当でいいんじゃない？」

「そーだよね」

まあお家デートって言ったら女の子はともかく俺ら男子はエッチとかって思ってる

のは内緒にしておこう。殺されかねないからね。

その後は本当に夕方近くまで適当に過ごした。小さい頃のアルバムを見て笑ったら昔の事とかを話したりしていたら時間が過ぎるのがあつという間だった。そして帰ろうか?と言った最後に、

「ねえ、純」

「ん?」

「夏の大会応援に行くから絶対勝ってよね!負けたら別れると思って必死にやりなさい」

「ありがと、でもその賭けはやめてくれ心臓に悪すぎるわ」

「ふふ、そうね」

こうして俺達は北原家から天谷家へと戻った。

お家デート後、静side

prprpr...pr

「もしもし、、寝てただけど」

「ごめんゆかり、ちよつと話がしたくて」

「何よ、こんな時間に、今日のデート失敗したの？せつかく私が菜華ちゃんに邪魔させないように捕まえといたのに」

「いや、失敗したわけじゃないんだけど、その、私ってやっぱり女の子として魅力ないのかな、って。今日さ、寝坊してマウスランド行かずに私の部屋でデートしたんだよね」

「なによ、惚気なら聞きたくないんだけど？って、ぶつくすくす」

電話の向こうでゆかりが笑いを堪えてるのが聞こえてくる。私は結構真剣に悩んで電話したのに！

「ちよつと！こっちは真剣なんだけど！」

「あのねえ、あのへたレな純一君が一番大切にしてる静に手出すわけないでしょ？私が何回純一君誘惑してると思ってるのよ。仮に今日お家デートでエッチしてたんならもっと早くに私が純一君の童貞もらってるっつーの」

「大切にされてるって思ってるいいんだよね、よかったあ、ってか純一誘惑するのやめてね」

「静がそんなにメンタル弱いと思わなかったわ。また話聞かせてねおやすみ」

「うん、おやすみ」

そっか大切にしてもらってるんだよね、私が慌ててどうすんのよほんと。気持ちもすつきりしたし寝よ！

幕開け

純一と静のお家デートから1週間経って神奈川県夏の大会は順調に日々を消化していった。当初の予定通り百合山高校の初戦の相手はペリーペリー学院に決まった。今は放課後で相手校の研究をして各自データを頭に入れているところだった。

「純一、やっぱりあのクリーンナップやベえよな。ここ3試合で打率6割オーバーの本塁打各打者2本は化け物すぎる」

「うん、相川の球で抑えられるかわからないね、2回戦の菊山常陽のエースの人も140後半の速い球投げてたのに軽く当てられたからね、その点遅い球のデータ取れないから薫ちゃんもキーになるかもね」

「だな、」

試合までの日程と言うのは自分達が思ってるより早く時間が進みついにペリーペリーとの4回戦の日がやってきた。

俺は家から出る前に静から負けたら許さないから！とハッパをかけられ奮起するとこを決めた。それに菜華ちゃんと一緒に学校を休んで見に来てくれるらしい。頑張ら

ないわけにはいかないな。

試合会場までのバスの道のりはとても長く感じ誰一人として言葉を発しなかった。緊張してるのか集中しているのかはわからないが皆が勝利に向けて意識しているのは間違いなかった。

会場に着くと大会の委員の人からロッカールームへ案内された。そこで初めて部員の会話が起こる。それからしばらくすると監督から今日のスターティングメンバーが告げられた。

「集合日!」

監督の一声で部員が全員集まった。

「皆緊張が顔に出てるぞ、笑っていきいこーぜ。泣いても笑っても負けたら最後なんだから負けることなんて考えるな!じゃあ準備はいいな!」

一同「はい!」

「じゃあスタメン行くぞ!」

1 番 ショート 鳥谷

2 番 セカンド 清水

3 番 ファースト 小久保

4 番ピッチャー相川

5 番レフト高橋

6 番サード木村

7 番ライト佐々木

8 番センター野間

9 番キャッチャー館山

勝つてこいよ!!」

「はい!!」

スターティングメンバーが決まるとついに俺達はベンチへと足を踏み入れた。

「タカ! 絶対勝つて次行こうな!」

「当たり前よ、お前が出てないで負けたら可哀想だもんな」

冗談混じりに話してくるタカ。こういう緊張してる場面で1人でも笑えるやつがいるとチームとしても緊張がほぐれやすい。

「相手チームのシートノックが始まるから見ておけよ」

監督の支持が飛ぶ。ベリーベリーは攻撃だけでなく今大会まだエラーが無いぐらい守備も堅い。特に二遊間の連携のレベルはプロレベルと言う評価だ。

「純一君」

「はい」

後からゆかりさんに声をかけられる。

「負けたら私ともう部活じゃ顔合わせられなくなるんだからね。絶対勝ってきて」

「もちろんです」

「そ、頼んだわよ」

そうこうしてるあいだにベリーベリーのシートノックが終わり次はこちらのシートノックとなる。俺は控えなので監督へのボール渡しを買って出た。

ノックを観ていて思ったのが皆いつもより動きがだいぶ硬い。いつもならエラーをしないようなイージーなゴロをファンブルする場面が多々見られた。

「内外野動き硬いよ！リラックスリラックス!!」

俺は監督の後から声を張り勇気づける。負けたら終わりのトーナメント制で自分の力出し切れないで負けたりしたら最悪だからね。

「じゃあラスト！キャッチー！」

「お願いしますー！」

監督がノックの終わりとなるキャッチャーフライを打ち上げてこちらのノックが終わった。

グラウンド整備が行われてついに審判員から声がかかる、

「整列！」

「よっしゃや行くぞお!!!」

「おお！」

高橋キャプテンの掛け声とともに勢いよくベンチを飛び出してホームベース付近まで走った。

「両校、礼」

「お願いしますー！」

ついに俺達の夏の大会がここに幕を開けた。

初回

『1回表百合山高校の攻撃は、1番ショート、鳥谷君』

「よっしゃ先頭頼むぞお!!」

「初球からな!甘い球逃すなよ!」

ついに試合が始まった。相手のピッチャーはエースの月村。打たせてとるタイプのピッチャーで球速は130前後ながら4方向への変化球と針の穴を通すコントロールが持ち味だがその点スタミナがないので出来るだけ粘っていけという指示が飛んでいた。

「プレイボール!!」

審判のプレイと同時に月村が鳥谷さんに第1球を投げた!

「ストライク!ワン!」

初球はど真ん中からストンと落ちるスプリット。直球とほぼ球速差がないので真っ直ぐだと思って打ちにいったら凡打になっていただろう。

2球目も同じところに決まり早くも追い込まれてしまった。

「鳥谷さんいけますよー！」

「ビビる必要なんてねーんだよ！積極的に打ちこまえ!!」

自軍のベンチから声が飛ぶ。

第3球を月村が投げた！

「ストライクスリー！バッターアウト！」

最後は左バッターには外に逃げるシユートで三振に取られてしまう。

「どんまい！どんまい！清水今の攻め方頭に入れとけよ！」

「おう！」

しかし清水もバットに当てることすら出来ず三振に倒れてしまう。

『3番ファースト小久保君』

「タカ！なんとかしてくれ！」

「心配すんなよ、お前の球よりよっぽど打ちやすいわ」

▼サインを作つてこつちに見せてくるタカ。そのタカへの2球目だった。

カキーン！

「おお！ナイバッチ!!」

落ちるスプリットを捉えて打球は左中間を真つ二つに割るツーベースとなる。

「よっしやー続け相川!!!」

アルプススタンドからの吹奏楽部の応援もより大きく聴こえてくる。余談だがベリーベリーは元女子高なので非常に女子の比率が高く試合開始前に黄色い声援に嫉妬したタカはめちやくちや燃えていた。

『4番ピッチャー相川君』

「先制点頼むぞ4番!!」

ベンチからの声援には相変わらずの無視だった。去年の公式戦から相川を見てきたが声援に対して笑顔を見せたことがあっただろうか。とにかく能力は確かなものだから任されたぞ。

その初球だった。

かきっ! 情けない金属音と共に打球はピッチャーファーストセカンドの間にポトリと落ちる小フライになりその間に一塁を全力で駆け抜け内野安打となる。ツーアウトながら1・3塁。流れを持ってきたいところだ。すかさずベリーベリーの監督はマウンドへ伝令を送る。

『5番レフト高橋君』

「キャプテンお願いします!!」

「高橋頼むぞ!!」

自軍のベンチからの声援に相川とは対称的に右手を上げて応える高橋キャプテン。いきなりチャンスが貰えるとは思っていなかった百合山ナインのボルテージも上がっていた。

サイン交換が終わり月村が第1球を投げた。外に外れて1ボールとなる。

制球乱してるのかな?なんて考えた瞬間だった。

「アウト!!」

は?何が起こった?

1塁ランナーの相川が牽制球に刺されチャンスが潰れてしまった。

「どんまい!次切り替えろよ相川!」

打席の高橋キャプテンが相川に声もかけるも頷くだけだった。一言詫びぐらい入れろよ。昨日あれだけ月村の牽制は早いから要注意って言われてたろ。ツーアウト1.3塁でリードでかくとる意味なんてなんらないぞ。文句言ってる場合じゃない、俺も切り替えて守備につく野手陣に声掛けなきや。

「初回大事だかな!!!!みんなしっかり!!」

『1回裏ベリーベリー学院の攻撃は、1番ショート平山君』

1番の平山は出塁率、打率ともに高く塁に出すとめんどくさいランナーでもある。なんとか先頭抑えてくれ。

「ピッチャー、ファースト、サード！セーフティ警戒しとけな!!」

相川が振りかぶり第1球を投げた。

「ストライクワン！」

インローいっぱい150キロのストレートが投げ込まれた。いいところに決まっている時の相川は調子が良い証拠だ。任せたぞ。

第2球を投げた。

「ストライクツー！」

コースは甘かったが空振りを取りツーストライクとなる。

「ナイピー！いいボールきてるよ！」

キャッチャーの館山さんも調子の良さには気付いてるようだった。

第3球は高めの釣り玉でボールとなりこれでツーワン。第4球を投げた。

カキーン！

相川の150キロのストレートを綺麗にセンターに弾き返しセンター前ヒットで

ノーアウトランナー一塁となる。

今のセンター返しに出来んのかよ、ほんとに直球には強そうだな。

『2番セカンド青島君』

キャッチャーの館山さんが内野手にサインを出す。恐らくシフトの指示だろう。サインを出し終わるとファースト、サードがじりじり前に出てくるのがわかった。打者はすでにバントの構えに入っていて向こうもセオリー通りに攻めてくるようだった。

相川が第一球を投げた。

「走った!!」

一塁を守っていたタカの声がグラウンドに響く。そして打者はバントの構えを引きヒッティングに切り替え初球のストレートを綺麗にライト前へ運びノーアウト1・3塁となる。

バスターエンドランかよ、ノーアウトからしてくるようなことかよ。いや、だからか。流石にこの状況はまずい。監督も俺の事を手招きしていた。どうやら伝令のようだ。

「天谷、変化球を混ぜるように指示してくれ。内野手は1点は仕方ないからゲッツーシフトを取るようにと」

「わかりました」

「林！お前も軽くキャッチボールしてくれ！表でやるなよ、お前の球筋がほんとにキーになるかもわからん」

「わ、わかりました！」

あの監督が早くも相川降ろすことも考えてるなんて珍しいな。こつちとしてはちゃんと考えてくれてるならありがたいわ。

「タイムお願いします！」

俺はタイムを取りマウンドへと向かった。

「んだよ一々来んじゃねーよまだ初回だぞ」

「お前が真っ直ぐだけの短調なピッチングしてるから監督から変化球混ぜるように指示貰ったんだよ。後内野手はゲッツーシフト。まだまだ初回なんだし皆頑張ろうぜ！」

「おう！」

相川を除く野手は返事をしてくれた。頼むぞ相川。今日の相手はお前がわがままを言っていて勝てる相手じゃない。

『3番センター巨峰君』

ベリーベリー側のスタンドからより大きい声援が送られる。キャプテンで打率6割2分8厘得点圏打率は脅威の7割。怪物と言っていていいだろう。

「相川びびんなよ！お前の球なら抑えられる！」

「頑張つて相川君！」

ゆかりさんのからも声援が飛ぶ。

相川が第1球を投げた。その隙に1塁ランナーはスタートを切りノーアウト2・3塁となる。

第2球を投げた。外へ外れてボールとなる。その後も外にボールが流れ歩かせてしまった。これでノーアウト満塁。しかし、守りやすくもなった。4番の東は巨峰よりも打率は低く抑えやすい打者だと思つていい。

『4番キャッチャー東君』

第1球を投げる前のサイン交換に少し時間がかかつていてすかさず館山さんがタイムを取る。こちらからは何を話しているかわからないがすぐサインが決まったらしくマウンドの輪は溶けた。

そして第1球を投げた。

カキーン!!

「センター！」

館山さんが大声を上げる。しかしセンターは打球を追うのを諦めた。

満塁ホームラン。

百合山ナインの顔が一気に沈むのが見てわかった。ベンチ内にいる俺達も声を出すことが出来なかった、

投手交代

満塁ホームランで愕然とする中で一番最初に声を上げたのはゆかりさんだった。「まだ初回でしょ！切り替えてけ相川！」

ゆかりさんの大きな声に百合山サイン一同は下を向いていた顔を上げ直した。

「天谷君貴方もよ！声出していきなさい！」

「はいー！」

ゆかりさんはまだ諦めてない。これだけで百合山サインは奮起した。

『5番サード桜君』

「相川こつからだぞ！締まってけ!!」

「打たせてけ！絶対捕ってやる!!」

投手に内外野から声がかかる。

「全く、、あんまり大きな声出させないでよね」

ゆかりさんが俺の足を踏みながら言う。いくら人見てないからって俺に当たらないで下さいよ、、

「すみません、でもゆかりさんの一声で助かりました。ありがとうございます」

「今後ないからね」

相川が第1球を投げた。

カキーン！打球は快音残してレフト後方へ。

「高橋さん！」

「うおおお!!!」

高橋さんが横つ飛びで打球を抑えた。

百台山ナインから歓声上がる。

「ナイスキャッチ!!!」

「ナイキヤー!!」

しかし続く6・7番に連打を浴び再び1死1・2塁となる。館山さんは変化球中心に責めているが肝心な変化球がコースも甘く変化量も少ないため簡単に弾かれてしまう。ストレートはほんとに通用してなかった。

「タイム！」

野村監督がタイムをかける。伝令かと思つて内容を聞こうとしたのだが。

「ピッチャーの相川がライトに。ライトの佐々木に変えてピッチャー林」

ベンチの皆が驚きの目で野村監督を見つめた。前までの公式戦ではどんなピンチで

も変えなかつたのに。監督の心境にも変化があつたみたいだ。交代して外野に回つた相川は不満がモロに顔に出ていた。

「天谷さん」

「ん？どうした薫ちゃん」

「自分少し怖いです、、ほんの一秒でいいんで手握つてもいいですか？」

「ん？そんな事でいいなら」

手を握ると薫ちゃんの手は冷たかつた。緊張の表れだろう。少しでも勇気づけるように強く手を握つて俺は言つた。

「大丈夫だよ！薫ちゃんの球は打たれないから！自信持つて投げてきな！」

そう言うのと少し体温が上がつたのか手にも熱が帯びてきた。

「ありがとうございます！行つてきます！」

「おう！」

相川が外野に戻つてきた事により変わった佐々木が声をかけてきた。

「純一が監督に変えろ言うたの？」

「ううん、監督の独断だよ。ベンチ皆びつくりしてたよ」

「マジか！でもいい変化だよな。勝ちに行つてるのがわかるわ。全力で応援しようぜ」

「おうよ！」

マウンドでは薫ちゃんの投球練習が始まっていた。見た感じではボールは走つてるように見える。館山さんが構えたコースから本当にぶれがない。任せたよ薫ちゃん。

『8番ピッチャー月村君』

相手打者はバントの構えをしていた。月村は打率1割台と低く次の打者に回すようだった。

薫ちゃんは確実に1つアウトを取るためにわざとバントのしやすいアウトコース高めにボールを投げてしつかり1アウトを貰った。これで2アウト2・3塁となる。

『9番レフト田村君』

「よし2アウト！薫ちゃん打たせてこーあと1つだよ！」

俺の声に対してコクンと大きく頭を頷かせた。9番とはいえ打率2割8分。他のチームなら十分に上位を打っていてもおかしくない打率なだけに油断はできない。薫ちゃんが第1球を投げた。インローヘシンカーが決まり1ストライクとなる。

「おけ！ナイボーよ！」

「いいぞ！薫ちゃん！押してけ！」

内外野からも声が飛ぶ。

第2球を投げた。

「ストライクツー！」

外側いっぱいいのストレートが決まりこれで追い込んだ。

時間いっぱい使い館山さんとのサイン交換が終わる。

第3球を投げた。

カキツ、鈍い金属音とともに打球はショート手前のボテボテのゴロとなる。

「鳥谷さん！」

「任せろ!!」

打球にいち早く反応していた鳥谷さんは勢いそのままにランニングスローで一塁へ送球した。

「アウト!!」

塁審が高々と右手を上げる。タイムリングはギリギリで鳥谷さんの打球反応がなければセーフだった。ファインプレーだ。

3アウトを取って帰ってくるナインに俺達は明るい声をかけた。

「まだ初回よ全然大丈夫よ! 薫ちゃんナイピー! 相川は切り替えてけよな!」

「ありがとうございませす!」

「監督、なんで俺下げたんすか。こつからだって時に」

相川は不満をそのまま監督にぶつけたようだった。

「自分で投げててわからないのか? 俺からも公式戦前に変化球磨いとけって指示出した

はずなんだがな。いざ試合になってみたら何ら変わってないじゃないか。ストレート一本で抑えられない相手だつて部室で何回も言ったよな？今日はマウンドへ上げる気は無い。打者でしつかり貢献してこい」

「……」

相川は無言で明後日の方を向いていた。それを見て監督は。

「わかつたかつて聞いてんだよ！お前一人だけが部員じゃねーんだよ！校長とかから相川を鼻屑しろ言われてきたがもう限界だよ。俺は勝ちたいんだよ！ここにいる皆で甲子園にな！ネクスト呼ばれてるぞ！しつかり狙い球絞つていけよ！」

「はー」

ネクストの高橋キャプテンは急いで打席へと向かった。そして俺達部員は監督の熱い想いが分かったことでチームが一つになった気がした。この勢いがあれば4点差なんて絶対にひっくり返せる。そんな雰囲気は百合山ベンチにはあった。

パーフェクトリリーフ

『2回表百合山高校の攻撃は5番レフト高橋君』

いい流れで攻撃を断ち切ったとはいえ点差は4点。早く1点でも返しておきたが、
たが、、

「ストライクバッターアウト！」

「ストライクバッターアウト！」

「ストライクバッターアウト！」

5. 6. 7番と月村の完璧な投球で三者三振に切られてしまう。

「すみません、、」

7番に代わって入っている薫ちゃんが申し訳なきような顔をしてベンチに戻ってくる。追撃モードを出していた勢いを完全に相手エースに断ち切られてしまった、、

「どんまいよ薫ちゃん。バッティングよりピッチング集中しよ。正直薫ちゃんが捕まったらほんとにきついよ」

「なんとかしてみます」

『2回裏ベリーベリー学院の攻撃は1番ショート平山君』

そういうえば初回で打者一巡してるのか、頼むぜ薫ちゃん。

「天谷」

「はい」

ベンチの奥で座っている監督に呼ばれる。

「長くても林は6回までしか投げさせない。7回から行かせるつもりだからそれに合わせて準備しといてくれ」

「わかりました」

「あ、ちよつと待て」

「はい？」

「今からキャッチボールしにいくなよ？大分林に気に入られてるみたいだからなお前。多分あいつのモチベーションはお前だよ。だからギリギリまで肩作りにいくのはやめて貰えるとありがたいんだが」

「は、はあ、それは別に構いませんが」

「助かるよ、ベンチから支えてやってくれ」

「はい！」

俺の声なんかでヤル気になって貰えるんだら喜んで声出すよ。ほんとにキツイだろうけど頑張ってくれ。

「監督公認ホモツプルになった感想は？」

試合中でもこの人はほんとに相変わらずだ。まあお気づきかと思うからゆかりさんだ。俺はそれを無視して百合山ナインに声援を送る。

「2順目ね相手！さっきはセンターいってるよ！」

その瞬間背中に重い衝撃を受けた。

「あ、ごめんなさい天谷君！大丈夫!？」

「大丈夫すけど、、流石にジャグ持って背中突撃は確信犯すよね、しかもわざと大きな声で謝ってわざとじゃないアピール、、」

「無視する方が悪いと思うの。じゃあ私スコア書かなきやだからまたね」

ほんとに試合中まで自由だなこの人、、

ゆかりさんとわちやわちやしてる間にカウントは1ストライク3ボールとなっていた。

「薫ちゃん打たせていいよ！自信持ってけ！」

マウンド上で館山さんのサインに大きく頷き第5球を投げた。

きーん！

左打者から見て外に逃げるシンカーで相手をひっかけセカンドゴロで1アウトとなる。

「1アウトー！」

「1アウト!! ナイピー薫ちゃん!! この調子で頼むよ！」

マウンド上ではベンチでの暗い表情はなく笑顔だった。続く2、3番も内野ゴロに打ち取り三者凡退で攻撃を締めた。

「ナイスピッチング林! この調子で頼むぞ！」

「はい！」

監督も薫ちゃんのピッチングに感心していた。強力な上位打線を3人に切るとは監督も思っていなかったんだろう。

「天谷さん」

「ん? どうした？」

「ちよつと話があるんです来てくれませんか？」

「え、ああ」

裏のブルペンのスペースの辺りまで来てフォームのチェックかな? とか思っていたのだが。

「天谷さん。自分は6回表までつてさつき言われました」

「ああそうだね、俺も聞いたよ」

「それで6回まで僕が無失点で切り抜けられたら1日だけでいいんで先輩の彼女として

デートしてもらえませんか？ 気付いてると思うけど自分、天谷さんが好きなんです。北原さんと付き合ってるのはもちろん知ってる事です。だから1日だけ。お願いします！」

「えつと、その好きはlikeの方で？」

「loveの方です。同性やんけとかいう突っ込みは無しでお願いします。前にも言っただ通り自分は女の子とだと思ってるんで」

「そっか。気持ちは普通に嬉しいよ。デートの件わかった！じゃあ引き続きいいピッチング頼むぜ！」

それを言うのと薫ちゃんは不安そうな顔から笑顔になった。

「やったあ！もちろんです！絶対抑えてみせます！」

そう言うのと薫ちゃんは駆け足でベンチへと戻って行った。

静の予想が当たってしまった。女の子目線から見たらわかるものがあつたってことか。とにかく今は試合だ。薫ちゃんのあの調子ならそんな簡単に打たれないはず。俺もベンチ戻って応援に行かなきゃ。

「ふ、普通に気持ちは嬉しいんだぜ、きもちわる、、、」

何かと思えばブルペンの端にゆかりさんが仁王立ちしていた。ほんとこの人抜け目ないな、、、つてか貴方スコア書かなくていいんですか。

「そんな言い方してませんよ、、」

「まあいいけど、もう攻撃終わるわよ？早く戻りましょ」

「え!?!まだ始まったばかりでしたよね!?!」

「向こうのピッチャースタミナ配分考えて下位打線には打たせてとるピッチングして
8・9番5球で抑えちゃったよ」

「すげーな、、鳥谷さんならやってくれると思うし戻りましょ!」

俺とゆかりさんはブルペンを後にしてベンチへと戻った。あの様子から見るとゆかりさんも薫ちゃんも俺に好意を持っていることがわかっていたみたいだった。女の子って鋭いんだな、、

ベンチに戻った瞬間だった。

「ストライクバツターアウト!スリーアウトチェンジ!」

まじかよ、、ほんととんでもないな月村、、でもこっちだつて守備から流れ作ればきつとチャンスはくる!頼んだよ薫ちゃん!

純一の思い通り薫ちゃんは完璧なピッチングを見せた。なんとあの強力打線を5回3安打無失点で抑えた。しかしこっちも相川とタカのヒットだけで他が全く手が出なかつた。6回を終えて4-0ここから終盤に入る。

ついに次の回から俺か、、絶対に抑えてやる。薫ちゃんがせっかく凌いでくれたん

だ。俺にだってやれる！

『7回表選手の交代をお知らせします。ピッチャー林君に変わりました。天谷君』
俺はマウンドへと走った。

反撃開始！

「あまやあ!!!」

百合山の応援スタンドから大歓声が降りそそぐ。ゆかりさんの件でどうやら俺は有名人になってしまったみたいだった。その中で俺は聞き逃さなかった。

「純ー！頑張って!!!」

間違いなく静の声だった。俺は声の方に親指をたてた。絶対に打たせないからな。

『百合山高校選手の交代をお知らせします』

ん？誰だ？

『キャッチャーの館山君に変わり畠山君。その畠山君がファーストに入りキャッチャーには小久保君が入ります』

「お、ま、た、せ！」

タカが知らない間にマスクを被っていた。

「やっとか、おせーよほんと」

「ビハインドで攻撃重視に出たんだろ。お前打たれたら北原にあることないこと話すからな」

「打たれたのはタカのリードが悪いつてことにしとくよ」

「んなろ、頼んだぜ！」

「おう！」

投球練習の時のマウンドの高さと自分の今日の調子確かめるよう1球1球時間をかけて投げた。大丈夫だ俺はやれる。それだけを信じて先頭の3番の向こうのキャプテンの巨峰を睨みつけた。

『7回裏ベリーベリー学院の攻撃は3番センター巨峰君』

初球のサイン交換が終わる。インローに全力投球。最後に外れてもいいからってジエスチャーがあった。なら遠慮なく行くぜ。

第1球を投げた！

あ、やべ引つかかった！

「デッドボール！」

「さーせん」

俺は帽子を取り一礼する。やつちまったあ、、、力みすぎた。

「おいこのバカ！次頼むぞ！」

タカからもフォローが入る。

「おう！わりい！」

続く4番にも制球を乱しノースリーとなる。

おい、どうしたんだよほんとに。いつもはこんな大舞台でも緊張したことなかったのに、、、

気付かないうちに冷や汗を流していることに気付いた。どうすればいい？答えを探しても出てこない。とにかく今はタカのミットに投げ込むことを考えなきゃ。

第4球のサインはアウトローのストレート。俺が1番投げやすいところだった。とにかく入れるということなんだろう。

セットポジションから第4球を投げた！

「ボール！フォアボール!!」

なんでだ、、、なんでストライクが入らない、、、今まで野球をやってきてこんなこと今までなかったのに、、、

「タイム」

伝令で薫ちゃんが向かってきているのがわかった。そしてマウンドに輪が出来る。

「おいどうしたんだよお前らしくもない」

「悪い、でもストライクが入らないんだよ、」

「切り替えて行くしかねーぞ」

「あの先輩方がいいでしょうか?」

薫ちゃんが手を挙げて発言する。

「自分純一さんの彼女さんにこういう時の蘇生方法聞いておいたんですけど試してもいいですかね? ちよつと見られるとまずいんで隠してもらえます?」

「え、お、おう」

タカがこつちを見てきてえ? なにこれみたいな視線を送ってきたが俺にもわからない。

「天谷さん失礼します!」

マウンドに集まった内野陣はそれを見てポカーンとするしかなかった。

スパイクで股間を蹴り上げ終いにはピンタを貰うというコンボを貰ったせいで危うく意識が飛ぶところだった。

一同「薫ちゃん!」

「えへへ、どうですか天谷さん? これやると元気出るって聞いて監督に直談判して伝令行かせてもらいました」

「恥ずかしそうに言う薫ちゃん。いや恥ずかしいの俺だよ？ ってかいつのまに静と連絡取ってたんだよ、そ、それに嬉しくなんてねーし。」

「嬉しいかはともかく気合いは入ったよ。もう大丈夫。ほら散った散った！ 次トリプルプレーやるんだから内野の皆様お願いしますよ？」

「お、おう」

内野陣は腫れ物を見るような目でこちらを見て退散した。やめてそんな目で見ないで泣いちゃう。

「なあ純」

「んだよタカ」

「やったね君はドMの称号を手に入れた」

「ドMの力見とけよ」

くだらない会話を終えて俺は5番の桜と対峙する。薫ちゃんに助けられるとは思わなかったな。どうやら俺は緊張してたみたいだった。さっきのやりとりで肩の重荷が取れた感じがした。

サイン交換が終わり初球はインコースのストライクからボールになるツーシーム。ただでさえ変化量のないツーシームでそれを要求してくるってことは信用してもらったってことでいいよな。

第1球を投げた!ボールは狙い通りインコースへ!

かきい!インコースを無理に引つ張ろうとして打球はサード正面に飛んでいった。

「サード!」

「セカン!」

一同「ファーストオ!!!」

トリプルプレー。土壇場でこれが出来るならまだまだやれる。相手の5番打者は監督に呼ばれ怒られていたそうだった。まあ普通に考えて制球安定してないピッチャーの初球なんて手出すもんじゃないしな。しかも内側の厳しいところ。

ベンチに戻ると監督がすごい笑顔だった。待つて、絶対何か勘違いしてるよねこの人。

「ハラハラさせんなよほんと」

「わりい、まあ今は攻撃だよ。誰から?」

「お前からだよ!塁でなきや殺すかな!」

「そりや打たなきやな」

「天谷さんまたあれやりましょうか?」

「いらん!」

ベンチ内には笑いが起こっていた。

『8回表の百合山高校の攻撃は7番ピッチャー天谷君』

「先頭頼むぞ！」

流石に月村にも疲労の色が見えていた。中継ぎに変わる前に仕留めないと。

第1球を投げた！

「ボール！」

ストライクからボールになるスプリットを見送って0—1となる。

「見えてる見えてる！」

「ごめんなさい手が出ませんでした。下手な読み合いとかするのはやめた。ストレー

ト1本に絞る！」

第2球を投げた！

「ボール2！」

外へのスライダーが外れてバツティングカウントとなる。

次の球で絶対に打つ。

「天谷さん打てますよー！」

ベンチの薫ちゃんからも声がかかる。

第3球を投げた！

きた！インコースへのストレート！

カキーン!!

打球はショート頭の頭を超え左右間を真つ二つに割るツーベースとなった。

「つしやあ!!」

「ナイバツチ天谷!!」

『8番野間君に変わりまして代打中村君』

監督も勝負に出たようだった。

中村さんは3年生で代打だけなら打率6割を超えている百合山高校の切り札でもある。

「タイム!ピッチャー金本!」

出てきたか。ベリーベリー学院の中継ぎエース金本俊。防御率は0.78と低く緩急を使ったピッチングをする投手だ。

「中村さんお願いします!!!」

「タイムリータイムリー中村!タイムリータイムリー中村!」

ベンチ、アルプスから大歓声が飛んでいた。

勝負はすぐに決まった。

カキーン!!

中村さんは金本が投げた初球のチェンジアップに完璧に合わせレフトスタンドへと叩き込んだ。

「つしやー!!!」

塁上で俺も自然とガッツポーズが出た。

これで2-4。まだまだ逆転出来る点差だ。

「中村さんナイバツチですーチェンジアップよんでたんですか?」

「投手交代の初球は7割がチェンジアップから入ってたから山はらせてもらったよ。まあホームランは出来すぎだけだな」

ほんとにこの人の勝負強さは頼りになると思った純一だった。

カキーン!!

「きやあー!!!」

「よっしやー!!!」

え?なにこの歓声?

中村さんと話している間に続く畠山さんがこれまたチェンジアップをレフトスタン

ドに叩き込んだのだった。

「えええ!!!!すげえマジで! 防御率0点台から2者連続はやべえ!!」

ベンチのボルテージは最高潮だった。事前の研究があったから打てたと畠山さんは言っていた。やっぱり下調べは大事なんだなって。

続く鳥谷さんにはチェンジアップが1球も来なかった。どうやらチェンジアップ狙いがバレたようだ。まあ流石に2者連続ドンピシャじゃね。

1. 2. 3番は完全に配球が読めず三者凡退。流石防御率0点台。すぐに立て直して来るあたりいい投手だなと思った。

「天谷! 点とった後の守備大事だからな! 頼んだぞ!」

「はいー!」

俺は8回裏のマウンドへと向かった。

ピッチャー返し

『8回の裏ベリーベリー学院の攻撃は6番ファースト青山君』

点取った後のこの回だ。せつかく1点差になったのに俺が点取られたら意味無いからな。

タカとのサイン交換が終わり第1球を投げた。

カキーン!

!?

「純——い!!!」

何が起きたのかわからなかった。

俺が最後に目にしたのは走ってこっちに来るタカだった。

私は5回の表から友達の八神祐希と共に百合山高校の野球部の応援に来ていた。

「あ！あの子でしょ！最近静が仲良くなったっていう後輩ちゃん」

「あ、ほんとだ！頑張れ薫ちゃん！」

私もスポーツをしているためスポーツ観戦などする時はめちやくちや応援する派だ。やっぱりスポーツは燃えるよね。

その変わった薫ちゃんが6回裏まで無失点で抑えついに純一が出てきた。

「お、出てきたね純一君」

「そーね。頑張つてね純一。あんたが抑えるしかないんだからね」

「大きな声でダーリンファイター！って言わないの？」

「言うかバカ。純一！絶対抑えなさいよね!!」

純一はその回制球に苦勞するも私が教えた蘇生法で何とか事なきを得る。

「あのバカハラハラさせてほんとに、、」

「まあ野球よくわかんないけど抑えてるならいいっしょ」

「まあね、あ、純一からじゃん」

「あ、ほんとだ純一君打てえ！」

スタンドの祐希の応援に応えるように純一はツーベースを打った。その後まさかの2者連続ホームランがあり私達の周りの応援団もボルテージがMAXになった。

そして8回裏。そこで二度と忘れない出来事が起きた。

「天谷頼むぞー!!」

「純一君任せたよ!!」

その初球だった。

カキーン！ベリーベリー学院の先頭打者は初球を真芯で捉え打球は、

純一の後頭部に直撃した。

「嘘よ、純一い!!!起きてー!立ってよ!!!」

私の声は虚しくも純一には届かず担架でベンチ裏へと運ばれていった。

私はその場で泣き崩れた。人生でこんなに泣いた日は無かったと思う。まだ純一の安否はわからないにしても泣いた。好きな人が心配になるなんてこんなに辛いと思わなかった。私がどんなに悪口を言っても笑って答えてくれた純一。初めてのキスの時の時も、抱きしめあつた日もどんな時でも純一は笑っていた。でも担架で運ばれる純一は苦痛の表情を浮かべていた。

「祐希、ごめん。私これ以上ここにいられない。病院調べて純一のそばにいたい」

「わかった。でもその涙はふいちゃいなよ」

「うん」

試合の結果はと言うと4―3でベリーベリー学院の勝利となった。百合山ナインは涙1つ流さずにそこにいるはずだった背番号11の容態を心配して一目散に監督に詰め寄っていたらしい。

病院を探す時間はそんなにかからなかった。RINEでゆかりが教えてくれたからだ。私は一目散に駆け出した。

病院に付くと手術室の前でゆかりが目を真っ赤にして待っているのが見えた。

私は何て声をかけていいかわからずにゆかりの横に座った。

沈黙を嫌ったのか初めに口を開いたのはゆかりだった。

「純一君、まだ意識が戻らないみたい。医者が言うには今夜が山だって。今夜中に意識戻らなければ最悪植物状態になる可能性もあるって、ねえ静、私人生で初めて泣いたよ。好きな人が傷つくのがこんなに辛いことだなんて知らなかった」

「私もだよ。スタンドですつと泣いてた。でも泣いてるだけじゃ意味無いと思ってここに来たの。純一は絶対に目を覚ますよ。なんたって私があんだけ調教して痛みには慣れてるはずなんだから」

軽い冗談を交えて話さないと私のメンタル的にしんどかった。今夜が山だって聞い

た瞬間意識が遠のいてまた泣きそうになった。でも今は泣いてる場合じゃない。純一を信じてここで待つだけ。

それから何時間待っただろうか。私とゆかりはずっと手術室の前で待ち続けた。その間に百合山高校の野球部全員が来て、それから相手校の人が謝りに来て、、、、
気付けば私とゆかりは精神的疲労もあり寝てしまった。

私の大切な人

私は夢を見ていた。私が純一を友達から異性として意識して間もない頃の夢だった。中学1年生の時の9月。まだ暑さが抜けきつていなくその日も暑かったつけ。

私はその日も日課にしてたランニングを純一としていた。純一が野球を始めた事もあり自然と一緒に走ろうか？つて言つて始めたランニングだった。その時から純一は私の事好きだったのか今考えると。そりゃ1回も遅刻とか嫌な顔せず走るよね。好きな人の前なら全力全開でやるよね。

「ん？今日ペース少し遅くない静？」

確かあの時私の調子の変化をすぐ見抜いたつけ純一。何度も一緒に走っていたせいかペースの乱れに気が付いたようだった。私は全くそんな事を思っていないくてこう返したと思う。

「え？いつも通りだよ？体力ついてきたんじゃない純一？ペース上げようか？」

「え、そうなのかな？大丈夫このままでいいよ」

「そ」

その後走り続け自分の調子がおかしいって感じたのは走り始めて3キロほどたつ

た時だった。頭痛を感じ始めてその場に座り込んでしまった。

「静?!大丈夫!?!」

「ごめん、ちよつとくらつてきた。少し休んでいい?」

「全然いいよ、ちよつと待つてて水買つてくる!」

純一は私の体調を気遣つて近くの自動販売機からスポーツドリンクを買つてきてくれた。

「はい、これ以上続けるのもあれだし今日はもう帰ろ」

「うん、ごめんね」

やばい、、、頭痛が酷くなつてきた。風邪かな。ちよつとしばらく動けそうにないや。

「純一、ちよつと動けそうにないや、、、」

そこで私の意識はぶつりと切れた。

目が覚めたのは自室のベッドの上だった。

「あれ、確か私ランニングしてて体調崩して、、、つて純一!?!」

私のベッドに突つ伏して寝ている純一の姿があつた。

「あ、静。やつと目覚めたのね。貴方熱中症で倒れて家まで純一君がおんぶして静流さん!静が!静が!つて大泣きして連れてきた時はびっくりしたんだから。純一君起きたらちゃんとお礼するんだよ。体調の方はどう?」

「え!? あそこからおんぶで!? 体調の方はもう大丈夫だよ。お母さん心配かけてごめんね」

「そーよ。それで静が起きるまで横にいさせてくださいなんて言うんだからほんと素敵
な男の子じゃない純一君。ちゃんと大切にしなさいよね」

「え、う、うん」

多分この時から純一の気持ちお母さんは気付いてたんだなって思う。笑ってたし。

しばらくして純一が起きて私の顔を見てまた泣いてなだめたっけ。それで男の子らしい一面見せられてから単純だけど異性として意識し始めたんだよね。

「天谷さんの彼女さんですよね?」

あ!? いけない寝てた。ゆかりは何故か横にはいなかった。トイレにでも行ったのだろうか。

「あ、はいそうです。それで純一は!?!」

「私達医師としては全力で治療致しました。ですが、天谷さんはまだ目を覚ましておりません。いつ目を覚ますかわからない状況で油断ができない状態になってます。しばらく入院してもらおうことになると思います。本当に申し訳ありません」

今日が山だつてゆかり言つてたよね、、、いつ目を覚ますかわからないつてことは、、、
「あの、目を覚まさなさいつてことも、、、」

その瞬間医者目が曇つたのがわかつた。

「はい。このままずっと寝たきりになる可能性ももちろんあります、、、」

「嘘、でしょ、、、」

「すみません、失礼します」

そう言うつと医師はその場をあとにし私は我慢していた大粒の涙を流した。

「なんでよ！なんで純一が！なん、で、、、うう、、、」

「静ちゃん」

「純一のお父さん、、、」

「まさか、俺が海外に行つてゐる間にこんなことになるなんてな。ほんと勝手な父親で周りに合わせる顔がないよ。本来なら試合だつて見に行つて応援してなきやいけないにな」

確かにそうかも知れない。でも本当に酷い親なら起業中の海外から仕事を放り出して帰つてくるなんてことはしないはずだ。だから私は純一のお父さんにこう返した。

「そんなことないと思いますよ、こつやつてすぐ飛んできてるじゃないですか。それより純一のお母さんと私の両親は来てないんですか？」

「ありがとうねフォローしてくれて。今医者から話聞いてるよ」

「そうですか、、、」

「せっかく付き合い始めたばつかなのにあいつも馬鹿なやつだよほんと、、、静ちゃん泣かせるなよな」

「ホント馬鹿ですよ。だから目覚めたらぶん殴ります。私は純一が目を覚ますのいつまでも待ちますから」

「ありがとう、俺もしばらく日本にいるよ。海外の事は静流さん達に任せることにした。だから静ちゃんと菜華ちゃんとはしばらくうちになね」

「わかりました」

「そろそろ遅いから帰ろう。また明日学校終わったら送つてくから来よ」

「そーですね、帰りますか」

病院から出ると駐車場には私の両親と純一のお母さんがいた。

「お母さん、、、」

たまらず私はお母さんに抱きついた。口では目を覚ますと思っただけでも中身は違っていた。このまま純一が目を覚まさなかつたら、、、って思ってしまった自分がいた。今回で私がいかに純一に依存してそれがなくなろうとするといかに弱いかがわかった。きつと私が倒れた時の純一もこんな感じだったんだろうな、、、

お母さんは優しく抱きしめ返してくれた。

「大丈夫よ、貴方が信じ続けられればきつと純一君は目を覚ますわ。私も3日は日本にいるし今日は北原の家に帰りましょ」

「うん、」

私はお父さんが運転する車に乗り家へと帰った。家に着くと菜華が目を見つ赤にして私に飛び込んできた。

「おねえーじゅんにいは!?大丈夫なんだよね!?!」

私は隠さず真実を菜華に話した。いつ目を覚ますか分からないこと。最悪目を覚まさない可能性があること。

それを聞くと菜華は壊れたおもちゃのように泣き続け私とお母さんでずっと菜華を抱きしめた。私は涙を出し切ってしまったのか心は悲しいのに泣けなかった。

一夜明けて

「少しは落ち着いた？」

「うん……ごめんおねえ……」

時刻は丁度0時。あれから玄関で動けなくなった菜華を無理やり動かして私の部屋に連れてきたって感じた。こんなに動揺した菜華を見た事がなく私も少し動揺してしまつた。

「純一を信じるしかないよ。あいつが私に何も言わないでさよならとかするわけないでしょ」

「でも……でもお！」

「いい加減にしなさい！皆純一が倒れて悲しいのは一緒なんだよ！私達に出来るのは毎日病院行つて声掛けてあげて後はあいつの根気次第なの！菜華も信じてあげて！お願ひよ……私だつて辛いのは一緒なの……」

気付けばまた私は泣いていた。ほんと弱い私つて……1度でも自分が強いだなんて思つてたのは勘違いだつたつてことがよく分かつた。一方の菜華はと言うと……

「おねえごめん。周り全く見えてなかつたよ私……ほんとにごめんなさい。おねえやお

かあに当たつて……グスン……もう泣くのはやめにする。私も信じる」
「菜華……」

私が菜華の前で泣いたことなんて今までにあつただろうか。恐らく姉が弱い面見せて逆に立ち直つてくれたのかもしれない。

「後おねえに言わなきゃいけないことあるんだけどいいかな？ほんととはこんなタイミン
グで言うつもりじゃなかったんだけど」

「どうしたの？」

「おねえ気付いてなかったかもだけど私もじゅんにいのこと本気で好きだったの。だからお風呂とか一緒に入つたりしてちよつとでも邪魔してやろうかなと思つてたの。ほんとにごめんなさい。じゅんにい取られたくないっていうのが頭の中で先行しちゃつて……でもじゅんにいはおねえしか見てなかったから何の効果もなかったんだけどね……」

「なんだそんなこと……あんたと何年姉妹やつてると思つてんのよ。とつくに気付いてたわよ。他の男子との対応違いすぎるもの、あれで気付かない方がおかしいわ」

「ええ……気付いてたの……じゅんにいの気持ちは一切気付いてなかった癖に」

「それは言わないで」

「ふふ、やつぱりおねえはじゅんにいに弱いよね」

「好きな人には弱くなるのよ。そろそろ寝ましよ。明日も学校なんだから」

「そーだね、おやすみ」

「うん」

「おねえ？」

「ん？」

「ありがとう、励ましてくれて」

「あんたが暗いと皆心配するでしよ気にしないで」

それ以上は返事が帰ってこなかった。どうやらすぐ寝てしまったみたいだった。つか自分の部屋戻って寝なよとも思ったがたまには妹と一緒に寝るのもいいか。

「おやすみ菜華」

私は菜華の綺麗な髪を撫でて眠りについた。

「静、菜華、朝よ起きて！学校遅刻するわよ！」

あれ？今何時だろ？つかお母さんに起こされるのすんごい久々な気がする。

「8時!!嘘!ちよつと菜華起きて!」

「え?もう朝……つて!嘘!」

菜華が朝寝坊するところなんて見たことなかったし本人も驚いているようだった。

私達は急いで支度をし軽い朝食を食べて学校に向かった。

菜華と途中の道で別れ学校に行く途中の道でゆかりと会った。

「遅いわよ。シヨックで休みかと思つたじゃない」

「休まないわよ。つてかいつのまに昨日帰つてたの」

「貴方が起きる前にお医者さんから容態聞いててね、それでこれ以上いてもつて思つたから先帰らせて貰つたわ。今日学校終わつたらお見舞い行くけど静も行くよね？」

「起こしてくれても良かったじゃん…うん。そのつもり」

「わかつた。じゃあ放課後校門前で」

「了解」

放課後純一の病院に行く約束をして私達は学校へ向かった。

教室に着くと皆昨日の事は知つているようで私が教室に入ると気を遣つてか話していた生徒が黙り込んでしまった。スタンドで大泣きしたせいでほとんどの人に私と純一の関係がバレてしまったみたいだった。そんな空気でも話しかけてくれたのは純一に好意を向けている早苗だった。

「静、話聞いたよ。大変だったみたいだね…」

「早苗ちゃん…うん。見苦しいところ見せちゃったよ私も。教室の空気が重たいのつてそ

のせいでしょう？つてかタカは？こういう時にあいつの明るさが必要なのに」

「ううん……好きな人があんな怪我したら私でもそーなるよ。ニユースで私も知ったんだけどしばらく泣いてたよ。目を覚ますかもわからないんだよね……小久保君なら多分部室じゃないかな？野球部でミーティングがあるとかで」

「やっぱりそーだよね……そっかありがと。そろそろホームルーム始まるし座ろっか」
「そだね」

小林先生が来るまでがすごく長く感じた。いつもなら純一と話しながら待ってたりして逆に早く感じるぐらいだったのに。

「あぶね、まだ先生来てなかったか。あ、北原おはよ」

「あんたは変わらずで安心したわ。おはよ」

「あたりめーだろ暗くしててなんか変わるのかよ。つてかなんだよこの重たい空気……」

「皆私に氣遣ってるみたいよ。昨日スタンドで恥ずかしながら大泣きしちゃってね、多分それで私達の関係バレたわ」

「え……じゃあ普通に話しかけた俺くそ空気読めてないやん……」

「バカ。普通にしてもらった方がいいに決まってるでしょ。あんたにまで氣遣われたら逆に気持ち悪いわよ」

「それもそーか。あ、小林先生来たみたいだぜ」

ちよつとだけタカに救われた気がする。ありがとね。つてか早苗ちゃんぐらい自然に話しかけてくれてもいいのに……まあ難しいか。

「おはよー！……って皆暗いよ！……テスト前じゃないんだからさ。はあ……まあ皆知つてると思うけど天谷君が昨日試合中に怪我してしばらく入院するみたいです。お見舞い行きたい人とかいたら病院教えるから後で聞きに来てね。それじゃ今日も一日頑張つてこー！」
小林先生も結構無理してる感じがした。早く帰つてきてよ純一。皆心配してるんだからね。

ゆかりside

思いの外元気で安心したわ。昨日のあの調子じゃ静が学校くるのは5分5分だと思つてたから。後は教室行つたら質問責めか周りに気遣われて教室お通夜になるだろうけど頑張りなさいよ。

かくいう私もまだ気持ちの整理がついていないんだけどね。昨日医者からまだ目を覚ましません。私達にもわからないって言われた時は本当に崩れ落ちかけた。なんとか平静を保つて返事を返したけど家に帰つて自室に戻つたら涙が止まらなかつた。今日学校に行くのも少し悩んだぐらいだったし。なんやかんや考えてるうちに教室つい

ちやつた。モード切替なきや。

まあ知ってるだろうけど私には表裏がある。学校では裏表のない素敵な人ってことで通ってるけどね。

「おはよー」

「あ！ゆかりさんおはよー！」

「おはよー！」

わざわざこつちまで言いに来なくていいわ…ほんとになんで男ってこうなんだろうね…

「そういえば昨日ゆかりさんに手出そうとした天谷ってやつ怪我して倒れたらしいじゃん、ほんとさまーみろって感じじゃね？」

「それぞれ！自分の身の程も知らないでゆかりさんに近付いた罰だよな！ぎやははは！！」

「ちよつと男子うるさいよ！流石にそれは言い過ぎ」

「別にいいだろ、俺らあいつのことめちやくちや嫌いだったからいなくなつてせいせいするわ。そのままずっと入院してればいいのにな」

その瞬間私の中の何かが弾けた。

学園のアイドル？もうそんなものどうだっていい。

あいつら絶対に許さない。

「今なんて言ったの」

「え？ゆかりさんに手出そうとしたからざまーみろって言ったんだよ。ゆかりさんとあいつじゃ間違っても釣り合わないっしょ」

「ふざけんなよ」

「ゆかりさん？」

「ふざけんなって言ったんだよ!!!お前らみたいなのに私の気持ちかわかるわけ!?!それに

手出そうとしたのは、天谷君じゃないし！告白したのも彼氏にしようとしたのも私から！まあ断られたけどね。それを釣り合わない？怪我をしてしま〜みる？ふざけないで！好きな人が怪我してしかも目を覚まさないかもって言われてる私の気持ちも考えてよよ！」

「おいどうした！」

私のクラスの担任が入ってきた。

「何でもないです」

そう言つて私は静かに自分の席に座つた。

ああ頑張つて猫被つてたけどこれで終わつたな。これも天谷君のせいかな…あんなに感情表に出したのなんて久しぶりだったかも。私に友達いなくなつたら責任取つてもらうからね天谷君。まあ今の私に友達つて呼べる人静ぐらいしかいないけど。早くまた皆でご飯食べようね天谷君。

それぞれと思いと

時刻は12:45分。ちょうど百合山高校の昼休みの時間だった。私はゆかりに呼ばれて屋上に来ていた。突然呼び出しなんて何かあったのかな。

「ねえ、私達も来てよかったの?」

「大丈夫よ、純一の容態の詳細知りたいんでしょ」

他に祐希と早苗ちゃんも連れてきている。多分純一の話かなと思ったから勝手に連れてきたけどいいよね。

「まだかねゆかりさん」

「んーそろそろだと思っけど」

その瞬間屋上の扉が勢いよく開いた。

「しずかあ!猫被ってんのバレちゃったあ!ふえええん!!」

「はあ!?って痛い!勢いそのままにタツクルしてくるんじゃないわよ!なによふえええんって気持ち悪い」

「なによ!私にタツクルされて喜ばない男子はいないのよ!?喜びなさいよ」

「私女ね?ってか周り見なさいよ」

「周り？ああいたのね」

祐希と早苗ちゃんはポカーンとした顔になっていた。

「あの、ゆかりさん、ですよね？」

「そうだけど？なんか文句ある？」

「あのね、この子達貴方の裏知らないんだからそういう態度で接しないで貰える？困ってるでしょ」

「あーそれもそうね。ごめんね、えつと、静ちゃんのお友達だよね？はじめまして。高町ゆかりって言います、宜しくねーうふ」

「うふって何よ。あんた表の方の性格壊れてんじやないの」

「色々あつて朝一に裏が出ちゃってからめんどくさくなつて表の方引つ込めてたんだから仕方ないでしょ」

「ゆかりさんが……」

「静……ゆかりさん何か悪い物でも食べたの……」

困惑している2人を置いておいて私は本題を切り出した。

「で、話つて何よ。純一の事？」

「いやただ教室に居づらくなつてご飯食べる相手いないから呼ぼうかなと。特に話はな
いよ」

「あんたねえ……純一の話だと思つて容態知りたい2人連れてきちゃつたじゃない」

「その2人も純一君のこと好きなの？」

「いや、私は中学の時から仲良くしてたんで気になりました」

少し遅れて早苗ちゃんも続く。

「私は純一君が好きです。まさか静と純一君が付き合つてるとは思いませんでしたけどね……やっぱり好きな人が倒れて心配にならない人なんていないと思うんです」

真つ直ぐな目をしてゆかりさんに言う早苗ちゃん。こんなに物事をはつきり言える子だったんだなつて驚かされた。

「そ」

ゆかりが返した言葉はたった一言それだけだった。その後純一の容態を丁寧に伝えて屋上から消えていった。

「まああれが本当のゆかりだからさ。気分悪くしちゃつたらごめんね」

「ううん、大丈夫。でも純一君大変だね……私も時間ある時お見舞い行くよ」

「ありがとう」

「早苗ちゃん大丈夫？」

話を聞いた時から昨日の菜華のように固まつてしまつて動けなくなつてしまつたみ

たいだった。

「ごめん…ほんとにそんなヤバいと思ってなかった。今話聞いてクラッと来ちゃったよ…」

「私も最初泣いて立てなかったよ。私達戻ってた方がいい？」

「ごめん、先戻ってて」

「わかった」

早苗 side

私はもしかしたら性格が悪いかもしれないって今凄く思った。ゆかりさんから話を聞いてなんで純一君なの？他の人がぶつかれば良かったのになって本気で思ってしまった。

「なんでよ…なんで！」

我慢していたものが溢れ出した。気付けば私は涙を流していた。静には気遣わせちゃったな。ごめん。

「でも、まだ純一君は生きてるんだもん。私は信じて待つ。静だって純一君の回復信じてるから立ち直れたんだろうしね」

純一君早く帰ってきてよね。そしたら私の気持ち伝えるから！

キーンコーンコーンコーン

6限の授業が終わり下校のチャイムが鳴り響いた。私はゆかりと合流するために校門前に向かったのだが…

「ちよつと何よ！私これから友達と用事あるんだけど」

「ゆかりさん酷いですよ！俺達騙してたんですか！普段皆にいい顔して裏では気持ち悪いなこいつらとか思ってたってことですか」

ゆかりは3・4人の男の人に周りを囲まれて身動きが取れなくなっていた。

「そういえば猫被ってたことばれたんだっけ…それでゆかりのファンの反感買ってこんなことになったのかな…」

「ちよつと離しなさいよ！汚い手で触らないで！」

「うるさい！どーせあのぶつ倒れた天谷とかいうやつには触らせてたんだろ！」

「ちよつと！ほんとにやめて…」

ゆかりの顔色が変わった。いくらゆかりが強気といえど力では男子に及ばない。

助けなきや！

「あんた達なにして「おい！てめえら何してんだよ!!!」

私の顔の横から風切り音がしたと思ったら一人の背中に硬球が直撃していた。

誰かと思ひ後ろを振り向いたら純一の親友で私の幼馴染である小久保隆俊だった。

「お前からふざけんなよ！いくらゆかりさんがゴミでもやっていいことと悪いことがあるだろうが！オラア！」

硬球を当てて怯んだ一人に体を入れて押し倒して一人をボコボコにすると次の相手には自分より背丈が小さな相手を選んだようだった。

「なんだお前！今いいところなんだよ消えろ！」

小柄な男の右ストレートをあつさり交わした時だった。

「調子に乗ってんじゃねーよ！今だやつちまえ！」

もう一人の大柄な男に羽交い締めにされ絶体絶命かと思われたその時だった。

「はっ！せい！」

え？それは一瞬の出来事だった。

突然大柄な男の急所に蹴りが入り男が悶えているところに脳天にかかと落としが決まり大柄な男は倒れた。

「はあ…あんま人に手出ししたりするなってお父様から言われてるんだけど…大丈夫小久保君」

それをやったのはさつきまで泣きそうな顔をしたゆかりだった。

「え、ああ…つてか普通にやれるじゃないすかゆかりさん…俺いりました？」

「まあ正直言うといらなかつたわ。私小さい頃から空手やっててそれなりに自衛出来るのよね。ほら、私可愛いから襲われた時とかね？」

自分で言うのか……

「まだやるつもりかしら？そのもやし君」

「す、すみませんでしたあ！」

もやし君と名付けられた先輩は蜘蛛の子を散らすように逃げていった。

「ゆかり大丈夫?!」

「もー遅いわよ。貴方が遅いから変なのに絡まれちゃったじゃない。ほら行くわよ」

「え、ごめん。わかった」

え?この事態の後始末とかは?これ警察沙汰になるような問題だよな?

「じゃあ後は宜しくね小久保君」

「俺すか!?!」

「私性格ゴミなんだもん。ゴミは後始末なんて気が利くことできないわ。それじゃね。一応お礼は言っておくわありがとう」

表の笑顔でお礼を言われてタカは何も返す言葉がなかったらしい。

学校から出てバスに揺られること30分。私達は純一の入院している病院へと着いた。驚くことに先客がいた。

「あ！静、ゆかりさん遅いよお！」

「おねえ遅い！何分待たせるの！」

そこには早苗ちゃんと菜華がいた。純一の事を心配して来てくれたことに私はとても嬉しかった。こんなにも可愛い子に心配して貰えるなんてほんとに純一は幸せものだよ…

私達は純一が寝ている病室へと向かった……

お見舞い

「天谷さんの病室はここになります」

私達は看護婦さんに純一の病室へと案内された。

「集中治療室……先生。そんなに純一は容態優れないんですか？」

私も漫画や小説の知識しかないが集中治療室というのは一刻の猶予もないような患者などが隔離された病室と聞いた事がある。

「念の為です。いつ容態が悪化するかわからないのは事実ですが……私はこれで失礼しますね」

「あのババア感じ悪。まあいいや行く」

早、菜「ゆかりさん……」

「感じ悪いのはあんたよ！もう猫被る必要ないけど素のゆかり性格悪すぎるでしょ！そりゃタカにゴミ言われるよ」

「別に。それに小久保君に何と思われようが私の知ったことじゃないわ」

「純一が元気になったらあんたの性格も手術してもらった方がよさそうだわ……」

ゆかりとくだらない会話をして私達は病室へと足を踏み入れた。

「純一、皆来てくれたよ。早苗ちゃんと菜華とゆかり。皆心配してくれてるんだから早く起きてよね」

眠る純一を見て私は泣きそうになる気持ちをぐっと抑えた。なんでこんな悲しくなるのかなほんと。一番辛いのは純一なのにね…

「純一君、久しぶり早苗だよ。なんで静と付き合ってる事教えてれなかったのよ！元氣になつたらちゃんと言聞かせてもらうからね。私からも話したいことあるからさ」

「じゅんにい…菜華だよ。おねえから聞いた時はほんとにびつくりしたんだから…でも私は絶対元になるって信じてるからね」

「貴方のせいで裏がバレちゃったの責任取らないままどつか行くなんて絶対許さないから」

皆それぞれ純一に声をかけていた。ほんと皆純一の事が好きなんだなって思う。でもその中で純一は私を選んでくれたんだもんね。絶対諦めないよ私も。

「あ、もう19時じゃん！ごめん私そろそろ帰らないとお父さんに怒られちゃうから帰るね！」

「私もそろそろ帰るわ、静と菜華ちゃんは？」

「菜華、先帰っててもらっていい？私はもう少しここに残るわ」

「わかった…じゃあ私家で待ってるね」

「うん」

「それじゃ皆また明日ね」

こうして皆は純一の病室を後にした。

「純……」

私は純一の頭を撫でた。こんな事をして何か変わるのかはわからないけれど触れていないと純一が離れていってしまうような気がして仕方がなかったのだ。

「寂しいよ……せつかくお互いの気持ち分かって幼馴染から恋人同士になれたのにさ……ごめん、こんなしおらしくするつもりはなかったんだけどどうしても気持ちを抑えられなくて……」

私は純一の寝ているベッドに顔を伏せて泣いてしまった。ほんと弱いな私。

コンコンコン

「失礼します。面会終了の時間となりましたのでご退室お願いします」

「あ、すみません。じゃあまたね純一、また来るからね」

そう言い残して病室を出ようとした時だった。

「しず、か？」

純一の小さな声が私の耳にはつきり届いた。

再開

「純一！純一！目覚ましたの!？」

私は病室の出口から全力で純一が寝ているベッドへと向かった。

私は布団に眠っていた純一の顔を覗き込んだ。

「あ、ああ……よかった……ほんとによかったあ!!うわあああん!!」

そこにはしっかりと目を開けてこっちを見て微笑む純一が寝ていた。

「静うるさい……って抱きつくな！濡れるから!」

「そんな事言ったって!どれだけ心配したと思ってるのよ!このバカ!」

「あの……そろそろ宜しいでしょうか?」

すっかり忘れていたが看護婦さん来てたんだった。

「すみません、純一この通り目覚ましたみたいなんですけど……」

「え、ええそうみたいです。天谷さん体調の方はどうですか?」

「ちよつと頭が痛いぐらいで他は何も無いですよ。俺、ピッチャー返しくらって……あ!

試合はどうなりました!？」

「なら明日検査をしますので今日はゆっくり休んで下さい。試合の結果は彼女さんに聞

けばわかると思いますよ、それでは私はこれで。彼女さんも出来るだけ早く帰って下さいね」

「わかりました。おい静…そろそろ起きろって…もう俺は大丈夫だから」

「ほんとに？どこか痛いとかない？」

「大丈夫だよ。まだ打球当たったところが少し痛いぐらいだから。それで試合はどうなったんだ？」

「この試合結果を純一に伝えるのは酷かと思つたが私は事実をそのまま伝えることにした。」

「あのまま4―3で負けちゃったよ…」

「そっか…ほんとごめんな心配かけて」

「ほんとよ。もうほんとに死んじゃうんじゃないかと思つたんだから…」

「わーごめんごめん！もう泣くなつて！お詫びになんかして欲しいことあつたらなんでもしてやるから！」

「じゃあキスして」

「はあ?!どうしたんだよいきなり」

「いいから!」

私もなんでこんな事を言ったのかわからない。でもそれだけ純一が目を覚まさない

間胸が張り裂けそうな気持ちになるしご飯は喉を通らないしですつと心配してたんだからこのぐらいいしてもバチは当たらないよね。

「わかったよ…じゃあこっち来て」

「ん」

「静、ほんと心配かけてごめんな。これからは絶対傍離れたりしないから」

「約束だからね」

「ん…ん！はあ…ちよつと誰が舌入れていいって言ったのよ」

「しよーがねーだろ、男ってそういうもんだよ」

「まったく…じゃあまた明日来るからね。おやすみ」

「おやすみ」

こうして私は純一の病室を後にした。

ホントによかった…目を覚まして記憶喪失とかになつたりして私の事忘れちゃつたりしないかなって心配だったけど、純一は起きてすぐに私の名前を呼んでくれた。ホントに嬉しかった。それでまた泣いちゃったけどね。検査終わって帰ってきたらまたご飯作ってあげるから早く退院してよね！

純一 side (静が目を覚ました純一に気付いた辺りからの視点になります)

「純」また来るからね」

なんだろう…：静の音が聞こえた気がした。っていうかここはどこだ？確か俺は試合中に…：そーだ。ピッチャー返し貰って頭に打球当たって…：それでここはどこだ？

「いつて…」

頭に激痛が走る。恐らく寝てるっていうより倒れてる時って言った方がいいか。痛覚が麻痺してたんだろうけど意識がはつきりした今だからわかる痛みがそこにあった。まあその痛みはよくある打撲程度の痛みだったからたいしたことにはなさそうだけど。

それより今静の音がしたような…：くっそ、体がずっと寝ていたせいか上手く起こせない。声が届くか分からないけど俺は喉の奥から絞り出すように声を出した。

「しず、か」

一生懸命に絞り出すように出した言葉がこんな情けない音量かよ…：こんなんじや仮に静いても気が付くわけないじゃん…：まあ体調回復待つかねーか。

「純一！純一！?!目覚ましたの!?!」

嘘だろ？ほんの小さな音量で聞こえたって言うのか？

足音がだんだんと俺が寝ている場所に近付いてくる。そして…：

心配そうな顔でこちらを覗き込む静と目が合った。ほんとにいたんだ…：よかった幻

聴とかじゃなくて。それにここ病院だよな？お見舞いとか来てくれてたんだなって思うと少し嬉しかった。

そんな軽く考えてた俺とは違い静は俺の顔を見ると…

「あ、ああ……よかった…ほんとによかったあ!!うわあああん!!」

静?!俺は今まで静と付き合ってきたてこんな大泣きして子供のよう静は見たことがなかった。俺はそれだけ心配かけてたのか…

「って抱きつくなよ!濡れる!」

いつもの静なら有り得ない行動だった。自分から俺に抱き着いてきて思いっきり甘えるような風に体押し付けてくるなんて事はなかった。ほんとどれだけ心配かけてたんだよ……

予想通り静の口からは本当に心配したって言われてしまった。俺も今は特に少し頭が痛いぐらいだから大丈夫って返しておいた。これ以上静泣かせたら菜華ちゃんに怒られちゃうしね。

試合の方は負けてしまったみたいだった。本当に途中で抜けて申し訳ない気持ちで沢山だった。

静はまだ元気がなさそうだったから話の成り行きとは言えなんでもしてやるからつ

て言う俺の発言に対してキスしてって言われてほんとに焦った。お家デートした時だつてしなかったのにこうも突然言われるとめっちゃくちや動揺するんだなつてことがわかった。俺だつて男だ。彼女からキスしてなんて求められて断るわけがない。ちよつと調子に乗つて舌入れて怒られるかな？つて思ったけど静は満更でもない表情だつたから大丈夫だよね。

静が病室から出たのを確認して俺はまたベッドに横になった。

「天谷さん、彼女さん本当に心配してましたよ。明日の検査が終わつて無事退院したら彼女さんめいっばい可愛がつてあげなきゃダメですからね」

おばさん看護婦が冗談混じりに俺に話しかけてきた。もしかしてさっきの見られてた……？

「もちろんですよ。もう金輪際あいつ泣かせたりしませんから」

「ほんと熱々ね、それじゃおやすみ天谷さん」

「おやすみです」

こうして俺は無事峠を超え、翌日の検査も異常無しで1週間後に退院が決まった。

最終回 行ってらっしゃい!

ついに今日は俺が病院から退院する日になった。検査も異常無しで俺の担当の医者は奇跡的な回復力とか言ってたっけな。自分にもよくわからないけどとにかく何事もなく終わってよかった。静のあの心配様から見るとほんとに危ない状態だったみたいだしな。

「帰ってきた…」

静は病院まで迎えに行くって言ってくれたんだけど元気だから家で待ってて連絡をしておいた。どうやら俺が倒れた日に両親が一時帰国していたらしいが俺が目覚まして検査に異常無しって分かった日には帰ってしまったらしい。俺が起きてる時にも顔を出してくれてもいいじゃんかとは思ったが昔からそういう性格の人だから特に気にせず何も言わなかった。何より俺の事が心配で一時的にも起業中の会社を放置してまで来てくれただけでも嬉しいしね。

「どうしよう…俺の家なのにピンポン押す勇気が出ない…」

俺は家の前で3分ほど固まってしまった。

「よし、行くか」

ピンポーン、ピンポーン

ほんと緊張する。2週間家に帰ってなくて家に彼女いるってだけでこんなに緊張するものなのかな…

「はい、天谷ですが」

なんだか静の声で天谷ですがと言われると結婚したみたいでなんだか照れくさかった。まだまだそんなこと考える歳でもないけどね。

「あー、純一だけど」

「あー純一！今開けるね！」

中からドタバタと音が聞こえて数秒後…ドアから静が顔を出した。なんだろう…少し会ってなかったただけでもすんごい泣きそうになってしまった…

「おかえり純一」

「うん、ただいま静。やっと帰ってこれたよ」

「うん…」

俺はそつと静を抱きしめた。

「ちよ、ちよつと！…近所さんに見られたらどーするのよ！」

「いいよ、別に。ダメか？少しこうしてちゃ」

「ううん、いいよ。私もずっとこうしたかったから」

静は顔を真っ赤にして、それも目を赤くして抱きしめ返してくれた。

だが家の中から思わぬ人物が出てきてそれを止めに入った。

「あ！ダメだよ静抜け駆けは！」

「早苗ちゃん!?!待っててって言ったのに」

「絶対そういうことしてると思ってたんだもん。早く入ってよ。ご飯も冷めちゃうよ」

「んー、わかったよ」

なんで早苗ちゃんが俺の家から出てくるんだろか：俺は玄関の靴が5足あった事に気付いた。ってことは静、早苗ちゃん、菜華ちゃんと多分タカ。それで後1人か：まああの人だろうな。学園の魔女ゆかりさん。

「誰が魔女よ。あんたのせいで私に裏ある事バレたんだから責任取りなさいよね。まあ何事もなくてよかったわ」

「人の心読むのやめてもらってもいいですか：ってかバレたんですか!?!」

「まあ色々あってね。だからしばらくはゴミのゆかりさんだから。ねえ小久保君?」

「ゴミ言ったのは悪かったすけどここまで粘着されると思わないっすよ：」

「あつそ」

取り敢えず俺が寝てる間にタカとゆかりさんの間で何かあったのは間違いなさそうだな…

「純一！早くリビング来てよ！何してんの！」

「ごめん、今行く」

「すげ…」

俺の目の前にはこれでもかとはかりに豪華な食卓が広がっていた。俺が好きな物ばかりを作ってくれたのか静…

「これ全部静が？」

「ううん、早苗ちゃんも手伝ってくれたよ。タカとゆかりと菜華は戦力外だったから何もしてないよ」

「ノーコメント」

「まあ俺は皿とか運んだけどな」

「私はゆかりさんに捕まってた」

「皆ありがとうなほんと。もう絶対こんなことないようにするからさ」

「当たり前でしょ。次倒れられたらこっちが倒れたくなるわよもう」

「また静が赤ちゃんみたいに泣くからフオローするこっちの身にもなってよね」

「ちよつとゆかり！」

なんだかんだでやっぱり仲良いよなこの2人。

俺達はその後静と早苗ちゃんが作ってくれた料理をペロリと平らげた。

「ごちそうさま。美味しかったよ」

「お粗末様でした」

「じゃあ俺は部活あるから行くわ。あ、言い忘れてたけど次のキャプテン俺になったんだ」

「マジで!? 頑張れよタカ。来年は絶対甲子園行こうな!」

「おうよ! それじゃまた明日学校でな」

「おう、いつてら」

「私も引継ぎ終わってないんだった。面倒だけど行かなきゃ」

引継ぎ? うちのマネージャーってゆかりさんしかないのに誰に引継ぐんだ?

「引継ぎってマネージャーいませんよねうち?」

「その早苗ちゃんがマネージャーになってくれたのよ。後アクアちゃんもね」

「ええ!? 早苗ちゃんがマネージャー!? ってか赤星さんまで?」

「うん、この間の紅白戦でまた野球熱来ちゃってマネージャーいないならやらせてもらおうかって。だから私ももう行かなきゃ行けないんだけど純一君に一つだけ言いたいことあるんだけどいいかな?」

「ん? なに?」

今後の野球部についてとかかな。早苗ちゃんの野球の見方とか経験者だから結構頼りになりそう。

「えつと…そのお…」

「ん？」

「私も純一君の事が好きなの！だから第2婦人とかでもいいから付き合つて下さい！」

「ぶふっ！はあ!?!ちよつと待つて待つて」

後ろの方ではゆかりさんとタカが爆笑してるのが見えた。一方の静はこちらを心配そうにしているのが見えた。菜華ちゃんは知らない間にリビングからいなくなっていた。

「待てない！私人を好きになつたのつてこれが初めてなんだよ！だから告白するのとかももちろん初めてで…だから早く返事ちよーだい！」

凄いい剣幕で迫られて俺は返事をせざるを得なくなつた。

「ええと…ほんと俺なんかを好きになつてくれてほんとにありがとう。でもごめん。俺2番目とかは作らないよ。俺が好きなのは静だけだからさ」

「そつか…ありがとちゃんと返事くれて。でも諦めたわけじゃないからね、じゃあ部活行つてくるよ。純一君もお医者さんから許可降りたら戻つてきてよね！」

「おうよ」

こうしてタカとゆかりさんと早苗ちゃんは野球部の方に行ったみたいだった。それにしても経験者2人がマネージャーとは心強いな。

「さっきの台詞臭すぎ」

「そりやねーだろ…」

おかしいなあ…俺が倒れてた時の優しさは何処へやら…

「菜華はなんか友達の家行つたよそーいや。じゅんにいの元気な顔見れてよかったつて。ついに兄離れつてか純一にくつつくのやめたのかもね」

「そーだったんだ。それはそれで残念な気もするけどな」

「ロリコン」

「うるせえよ」

「ふふ、やつぱり私達はこうでなくっちゃね。変に気遣いせずやつてくのが1番だよ」

「だな。流石飼い主と犬だよ。そろそろご褒美くれてもいいんじゃないか?」

飼い主と飼い犬。これは俺が中学生の時に友達に言われた言葉だった。静の事が好きで仕方なかった俺はずっとくつついてたもんな今思い返せば。くつついたせいで静にはずっとこき使われっぱなしだったな。それを喜んでやってた俺をタカはDMとも言ったけか。今思えばほんとに懐かしい。それに静と恋人同士になれるなんてあの時は思いもしなかった。今の俺は本当に幸せだと思う。

「ご褒美ね。ふふ、そーよね。飼い主と犬から恋人同士になったんだもんね。いいよ、あげる」

俺は静をリビングのソファァーに押し倒した。

「優しくしてくれなきや怒るからね」

「うん。なあ静、今幸せか？俺はすんげえ幸せだよ。好きな人とこうして一緒に居られるんだからな」

「バカ…私も幸せだよ。純一の彼女でよかった」

この日俺達は1つになった。

10年後……

「こら若葉！早くしないと幼稚園遅れちゃうよ！」

「うっさいママのバカ！パパ助けて！ママがいじめるう！」

「そーやってすぐにパパに助け求めるのいい加減にしないと怒るわよ！」

「若葉知ってるよ！そう言うの嫉妬って言うんだよね」

「んな!?!そんな言葉どこで覚えてくるのよ…」

「静も若葉もその辺にしときなよ。ほんとに幼稚園遅れても知らないからね、置いてっ
ちやうよ」

「ごめんパパ今行く!」

高校を卒業した後、俺と静は一緒の大学に入り大学を卒業してすぐに籍を入れた。野球は高校で辞め。大学では主にスポーツの医学を勉強し28歳となった今ではプロ野球チームの専属の医師をするほどにもなった。そして23歳の時に娘も出来た。名前は若葉。静に似て元気な女の子に今は成長している。今年で5歳になる幼稚園児でまだまだ生意気なところもあるが可愛い娘だ。

「ほんと誰に似たんだろうねこの子、私はお父さんに逃げたことなんてなかったよ」

「いつ私があんたに甘えたのよ、1回頭ぶん殴ろうか?」

「遠慮しとくよ」

「パパー!準備出来たから行くー!」

「ほらほら行った行った」

「じゃあ行ってくるよ」

「気を付けてね」

「おう」

俺は若葉と一緒に扉を開け1歩を踏み出した。